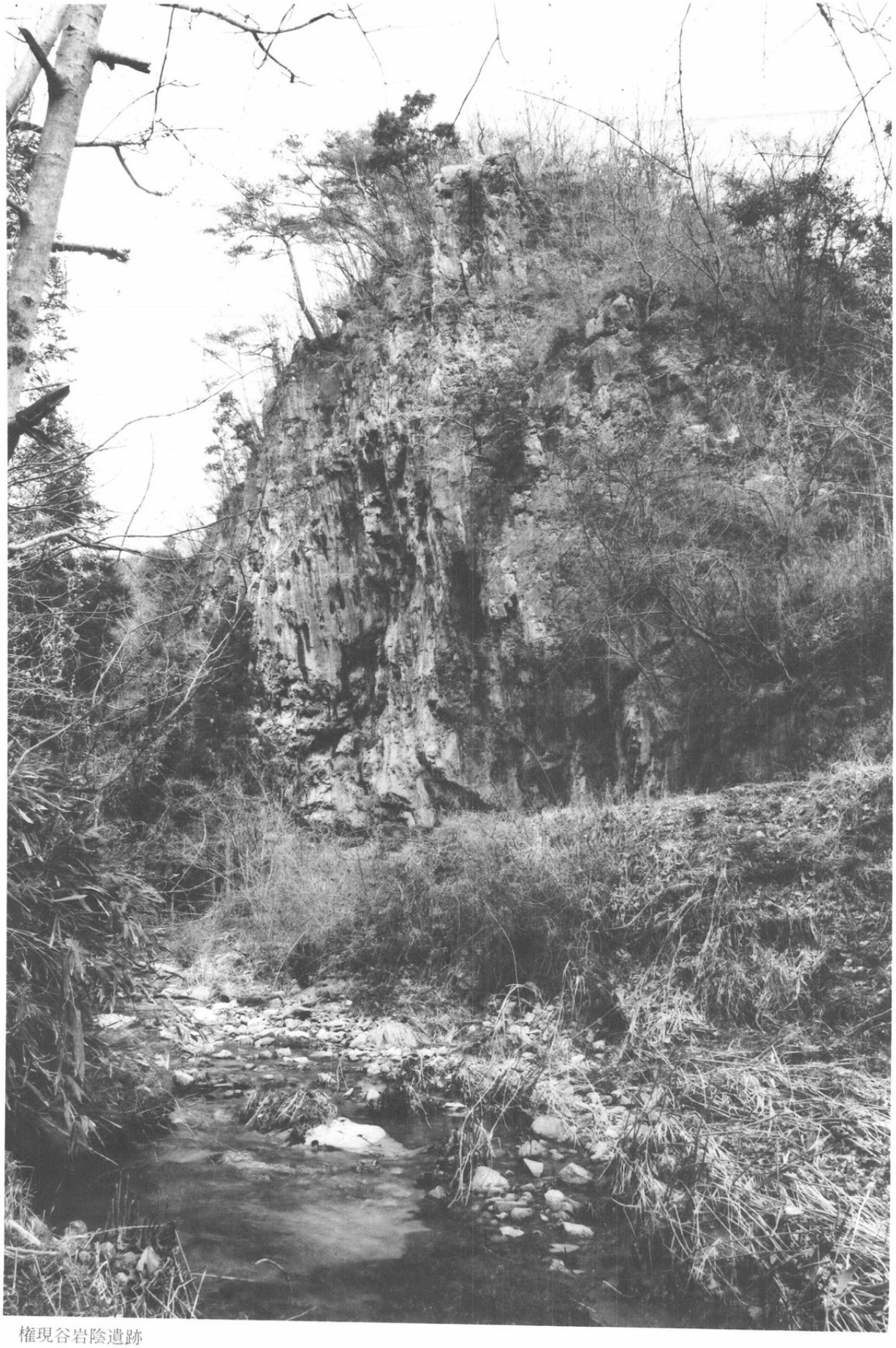
# 権現谷岩陰遺跡

1983

岡山県川上町教育委員会

# 権現谷岩陰遺跡

編集
近藤義郎
宇垣匡雅



権現谷岩陰遺跡

# はしがき

原滝山岩陰遺跡発掘後まもない1978年３月上旬，兼高昭一・西森裕良の両氏から，川上町高山市（こうやまいち）の横松川畔において土器を出土する有望な岩陰を発見したとの報に接した。そこで同年３月８日用田政晴君・宇垣匡雅君を伴い兼高氏の案内を得て現地を訪れ後期縄文土器数片と獣骨など発見，縄文時代岩陰遺跡であることを確認した。同日川上町教育委員会の三村義弘教育長にその状況を報告したところ，折柄進行中の町史編さんのための研究の一環として発掘の実施を依嘱された。しかしその年の夏から1979年にかけては，楯築弥生墳丘墓の発掘とその整理に忙殺されて延期を余儀なくされ，ようやく1980年３月本遺跡の試掘を実施することができた。

発掘に当っては岡山大学文学部研究生吉留秀敏君が一切の準備の中心として働き，また岡山大学文学部考古学研究室の専攻学生は数回にわたり研究会をひらき，発掘にそなえた。川上町教育委員会においては三村教育長をはじめ職員の方々は土地所有者との接渉・宿舎・予算等について，調査を円滑に行うための諸方策を推進された。

発掘は種々の事情から，1980年３月27日から10日間という短期間を余儀なくされ，また岩陰通有の落磐が多く，広さの点でも深さの点でも充分な発掘はできなかったが，以下の報文にみるように，本遺跡の性格と時期を探るという試掘としての目的は達成されたものと信じる。発掘後の整理研究の作業は，５頁にあるように，参加学生が中心となって行い，また新入生の援助もあった。

ここに報文を刊行するにあたり，芳名を上記した各氏および土地所有者西川時雄・藤原茂の両氏，宿舎を提供された穴門山神社迫本昌利氏御一家，物心の援助を与えられた赤木医院に深く感謝するものである。

1982年９月１日

近　藤　義　郎

# 目　　次

はしがき …… 1
1．遺跡の位置と環境 …… 7
2．岩陰の形状 …… 12
3．発掘経過 …… 16
4．遺跡の層位 …… 18
　1．基本層序 …… 18
　2．層位の検討 …… 18
5．遺構 …… 20
　1．炉址 …… 20
　2．Pit，その他の遺構 …… 21
　3．小結 …… 23
6．出土遺物Ⅰ・縄文土器 …… 26
　1．縄文土器 …… 26
　2．出土縄文土器の検討 …… 48
7．出土遺物Ⅱ・石器・骨角器 …… 53
　1．石器・骨角器 …… 53
　2．小結 …… 72
8．出土遺物Ⅲ・近世遺物 …… 78
9．出土遺物Ⅳ・動物遺体 …… 80
10．むすび …… 84

# 図　目　次

図1．権現谷遺跡周辺地形図 …… 8
図2．周辺遺跡採集の遺物 …… 10
図3．七地蔵雲庵前出土の備前焼壺 …… 11
図4．七地蔵雲庵前出土の亀山焼甕 …… 11
図5．権現谷岩陰遺跡地形図 …… 12
図6．岩陰の形状 …… 12
図7．岩陰平面図 …… 13
図8．岩陰断面図 …… 13
図9．発掘区設定図 …… 16
図10．発掘区断面図 …… 折込
図11．遺構配置図 …… 折込
図12．F.P.-1の検出状況 …… 20
図13．F-11・12，G-11・12グリッドにおける遺構検出状況(1) …… 20
図14．F.P.-18 …… 21
図15．F-11・12，G-11・12グリッドにおける遺構検出状況(2) …… 22
図16．縄文土器(1) …… 27
図17．縄文土器(2) …… 29
図18．縄文土器(3) …… 32
図19．縄文土器(4) …… 34
図20．縄文土器(5) …… 35
図21．縄文土器(6) …… 36
図22．縄文土器(7) …… 37
図23．縄文土器(8) …… 38
図24．縄文土器(9) …… 39
図25．縄文土器(10) …… 40
図26．深鉢形土器の分類 …… 50
図27．石鏃(1) …… 54
図28．石鏃(2) …… 55
図29．石鏃の長さ・幅・重さについての頻度分布図 …… 56
図30．石鏃長幅相関図 …… 56
図31．スクレイパー・その他の石器 …… 58
図32．楔形石器・その削片 …… 59
図33．石核 …… 60

図34．石核長幅相関図 …… 61
図35．フレイク長幅相関図 …… 61
図36．フ レ イ ク (1) …… 62
図37．フ レ イ ク (2) …… 63
図38．フ レ イ ク (3) …… 64
図39．フ レ イ ク (4) …… 65
図40．フ レ イ ク (5) …… 66
図41．フ レ イ ク (6) …… 67
図42．フ レ イ ク (7) …… 68
図43．フ レ イ ク (8) …… 69
図44．フ レ イ ク (9) …… 70
図45．石 器 実 測 図 …… 71
図46．骨　角　器 …… 72
図47．近 世 遺 物 …… 78

# 表　目　次

表１．権現谷岩陰遺構 …… 25
表２．土 器 観 察 表 …… 41
表３．石 鏃 観 察 表 …… 74
表４．スクレイパー観察表 …… 74
表５．その他の石器観察表 …… 75
表６．楔形石器観察表 …… 75
表７．フレイク観察表 …… 75

# 図 版 目 次

図版１．遺　　跡　１．遺跡全景（西から）
　　２．岩陰下部（東から）
図版２．遺　　跡　１．発掘前の状況（東から）
　　２．発掘前 の状況（西から）
図版３．遺　　跡　１．F-8･G-8グリッド東壁（磨り石検出状況）
　　２．G-7･G-8グリッド北壁（地山堆積状況，中央部にFP-4）
図版４．遺　　跡　１．FP-18（近世配石炉）
　　２．F-20グリッド（西から）

図版5．遺　　跡　1．F-11・F-12グリッド南壁

2．F-18グリッド西壁

図版6．遺　　跡　1．F-16グリッド南壁

2．F-16グリッド西壁掘り下げ状況

図版7．出土遺物　縄文土器

図版8．出土遺物　1．石　　鏃

2．スクレイパー・楔形石器・石核他

図版9．出土遺物　1．磨り石・敲石・骨角器・獣骨

2．周辺遺跡表採遺物

3．縄文土器条痕

**発掘調査団構成**

責任者　近藤義郎（岡山大学法文学部教授）

現場主任　吉留秀敏（岡山大学法文学部研究生）

第1班　乗岡実（岡山大学法文学部3回生，以下大学学部は略す），田代健二（4回生），吉村健（2回生），大石千城（2回生），大久保徹也（1回生）

第2班　荒俣一雄（3回生），秋山浩三（4回生），西川雅紀（2回生），高井健司（1回生），宮原文隆（1回生）

第3班　末永弥義（2回生），瀬川拓郎（4回生），田中裕介（2回生），山田佳伸（1回生）

第4班　丹羽野裕（2回生），宇垣匡雅（4回生），北条芳隆（1回生），関沢聡（1回生）

随時参加　高橋恵子（6回生），用田政晴（岡山県史編さん室主事），長瀬治義（4回生），山中悦雄（3回生），福田輝子（2回生）

**本書作成参加構成**

石器実測　丹羽野裕，福田輝子，阪本和子，関沢聡，北条芳隆，吉留秀敏

土器実測　吉留秀敏，瀬川拓郎，宇垣匡雅，高井健司，宮原文隆，北条芳隆，阪本和子，大久保徹也，関沢聡，

遺構トレース　北条芳隆

石器トレース　丹羽野裕，福田輝子，阪本和子，関沢聡

土器トレース　吉留秀敏，瀬川拓郎，高井健司，宮原文隆，北条芳隆，関沢聡，大久保徹也，阪本和子

遺物写真　宇垣匡雅，乗岡実

遺跡写真　近藤義郎

挿図整理・清書協力　矢田聡美，武上弥壽，伊藤美登里，松岡かおり，古市秀治，池橋幹

**執筆**　はじめに　近藤義郎　　1．遺跡の位置と環境　乗岡　実　　2．岩陰の形状　秋山浩三　　3．発掘経過　宇垣匡雅　　4．発掘の層位　吉留秀敏，瀬川拓郎，宇垣匡雅　　5．遺構　北条芳隆　　6．出土遺物(Ⅰ)土器　高井健司，宮原文隆　　7．出土遺物(Ⅱ)石器・骨角器　阪本和子，丹羽野裕，関沢　聡，北条芳隆　　8．出土遺物(Ⅲ)近世遺物　瀬川拓郎　9．出土遺物(Ⅳ)動物遺体　林　謙作　　10．むすび　近藤義郎

**編集**　近藤義郎，宇垣匡雅

# 1. 遺跡の位置と環境

権現谷岩陰遺跡は，岡山県川上郡川上町高山市字ナル川内道上1655—3に所在する。

川上町は，岡山県の中部・西端，いわゆる吉備高原地域に位置する。高梁から国道313号線を南西に約20km，町の東部を流れる領家川の谷あいに，町役場のある地頭の街がある。高山市の街は，その地頭から西へ約7km，標高約600mの吉備高原上にあり，眺望で名高い弥高山(標高654m）のすぐ西側にあたる。そこは川上町の西端で，街の半分は岡山県後月郡芳井町に属している。本遺跡は，この高山市の街の北北西約1.5km，再び高原を降りた横松川北岸，標高約390mの地点にある。

吉備高原は，町内全域に広がっており，高原面の標高は約600～350mで，概して西側に高い。町の北半部には石灰岩地形が広がり，とりわけ高山市から上大竹神野（地頭と高山市のほぼ中間）にかけての一帯は，大賀台カルストとして知られる石灰岩台地の中心部である。高原を深く刻む各谷川は，原則的には東～北流し，町の北方を東流する成羽川に注ぐ。この成羽川は高梁川の支流である。石灰岩台地の谷あいには，そうした河川や浸透水の浸食作用により，数多くの洞穴・岩陰がみられる。本岩陰もまさにそうしたもののひとつである。

本遺跡を除けば，町内の先土器[(1)]・縄文時代遺跡の内容は，その存在を含めてほとんど知られていない。それでも，縄文時代に関しては，断片的資料が得られた遺跡（地点）はいくつかある。今のところ，縄文時代遺跡は，石灰岩地の谷間にある岩陰遺跡と高原上平坦面にある開地遺跡に大別される。前者については，本岩陰遺跡の他，地頭の街の北西約1kmにある原瀧山岩陰遺跡[(2)]をあげることができる。ここでは，後期に属すると考えられる注口土器等が出土した。この他の洞穴・岩陰中には，形状・向き・河川との比高等からして居住条件が良好であったにちがいないと思われるものもあるが，遺跡の存在は今のところ推定の域を出ない。ちなみに，本遺跡のある横松川の谷に面するいくつかの洞穴・岩陰の分布調査を試みたが，そこでは縄文時代の遺物等は何ら発見出来なかった。一方，後者については，高山市の街の周囲四地点で，縄文時代のものと考えられる磨り石，サヌカイト製石鏃・剝片等を採集した（図2—1～7）。各地点間にはやや距離があり，各地点を包括する大規模な遺跡というよりは，小規模な遺跡を，二，三想定する方がよいようである。当遺跡と権現谷遺跡との比高は約200mであるが，直接的な関係については今のところ判らない。その他，上大竹神野北平では，磨製石斧一点が採集されている（図2—8）。

町外の縄文時代遺跡に目を転じると，まず，広島県神石郡油木町に所在する豊松洞面遺跡があげられる。この岩陰遺跡は，本遺跡の西北西約7kmにあり，帝釈峡遺跡群[(3)]中の遺跡として広島大学考古学研究室を中心に継続発掘されている。ここでは，早期を中心に前・後・晩期の文化層が確認された他，後期の埋葬人骨が10体近く発掘された。同じ岩陰遺跡で位置も近く，また中期の遺物が確認されていない事など，本遺跡と比較的似かよった要素を有しているようで

ある。この遺跡のさらに北西には洞穴・岩陰遺跡からなる帝釈峡遺跡群が続くが，次の遺跡まではやや距離をおく。ちなみに，権現谷遺跡から帝釈川沿いの遺跡密集地域（寄倉岩陰遺跡付近）までは，約20kmである。なお，帝釈川は成羽川の上流名である。個々の遺跡についてはこ

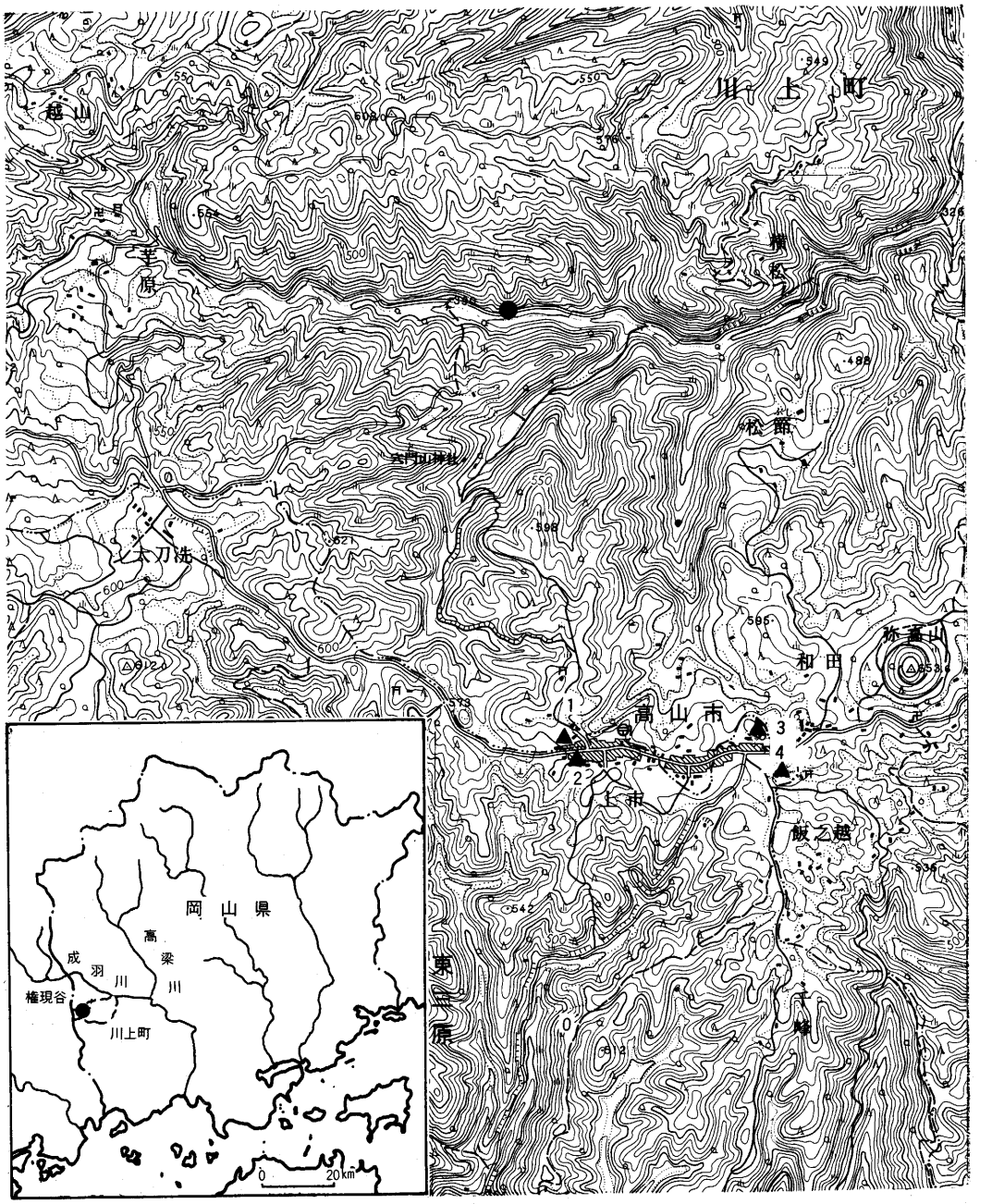



図１　権現谷遺跡周辺地形図　　(1/2.5万　地頭・備中市場)

●権現谷遺跡　　▲高山市遺物採集地点

1、北西地点　2、南西地点　3、北東地点　4、南東地点

こでは触れないので，報告書その他を参照されたい。この他，本遺跡の北東約14kmの成羽川岸にプラットホーム遺跡[(4)]が知られている。この遺跡は，開地遺跡で，後・晩期の土器片が採集されている。

以上，いくつかの周辺遺跡を示したが，本遺跡は，中国山間部成羽川水系の岩陰遺跡という点に着目すれば，広義の帝釈峡遺跡群の南東縁辺部に位置している。ところで，その南・東側に遺跡がないというわけではない。つまり，先に示したものも含めて，少ないながらも開地遺跡が点々と分布している。そして，いきつく瀬戸内海沿岸，成羽川の下流である高梁川の河口付近や笠岡湾周辺は著名な貝塚の密集地域である。本遺跡から笠岡湾までは，南へまっすぐ約27kmである。つまり，本遺跡は，瀬戸内海沿岸の遺跡群の北への拡大点，ないしはそこから帝釈峡遺跡群へ至るルート半ばに位置するものとして把える事が可能である。もっとも，本遺跡周辺をひとつの地域として考えた場合，岩陰遺跡と開地遺跡の近接は，遺跡立地の多様性の問題としても成り立ちうるであろう。しかし，先にも述べたように本地域内の遺跡は不明な点があまりにも多く，未知の遺跡の発見を含めて，詳細な検討は今後の課題である。

弥生時代以降の町内の遺跡について簡単にふれてみる。弥生・古墳時代遺跡は，町の東・中部の谷を中心に点在しており，西部では少ない。遺跡が顕著になるのは，弥生時代でも後期中頃以降のようである。原瀧山遺跡，小谷ケ市遺跡[(5)]に加え，神谷西遺跡など高原上にも遺跡が知られている。前期古墳の確認例はない。後期古墳は，地頭周辺の大杉塚古墳[(6)]・九門大塚[(7)]を初め約10基が確認されている。飛鳥～平安時代の遺跡については，小谷ケ市などで資料が得られている。中世遺跡は町内各所に分布している。遺物としては，亀山焼の存在が目立つ。町の東部では，亀山焼の甕が出土した原瀧山遺跡の他，その北方の七地で室町時代前葉の備前焼壺と，亀山焼の甕が工事中に発見された(図４・５・12)。ここは近接して五輪塔があり，埋葬に用いられたもののようである。七地には，中世後期の国吉城址もある。高山市付近でも，穴戸山神社境内で早島系土師器椀等が採集されている。また，高山市の街中では，近世の染付・備前焼・大原焼に混って亀山焼片が散布している。高山市はその名も示すようにかつて市場町であり宿場町であった。笠岡から中国山間部の東城に至る幹線街道であった東城往来の中ほどに位置し，ここから地頭に至る高山往来が分岐していた。これら中・近世遺物は，当時の高山市のそうした繁栄を物語るものであろう。

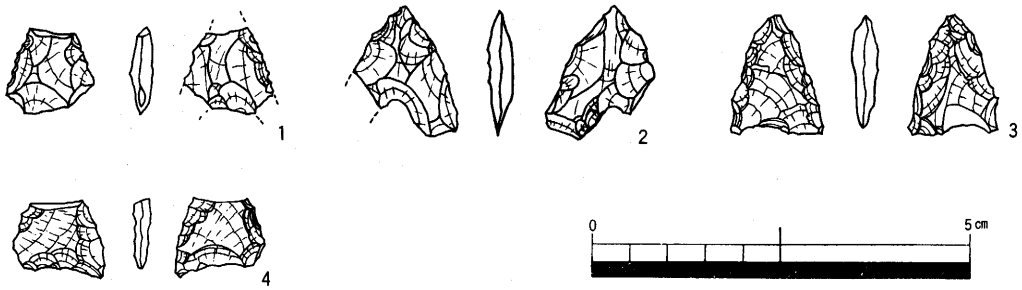
周辺遺跡採集の遺物

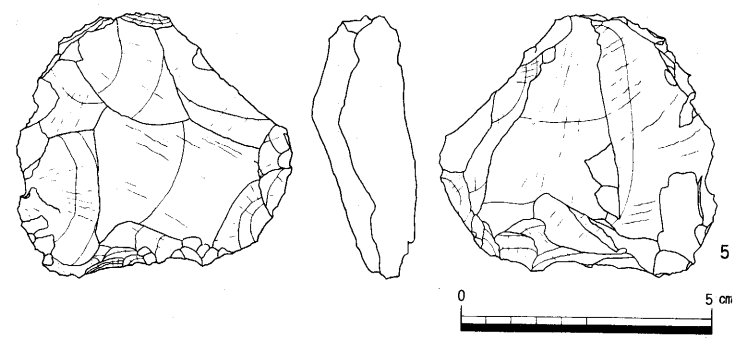
○高 山 市 付 近

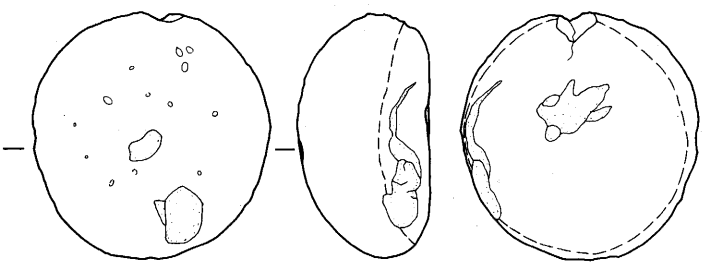
石鏃１（図２－１）　北西地点。サヌカイト製，凹基。頭部・両脚欠損。縄文時代か。

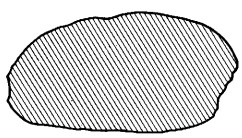
石鏃２・３・４（図２－２・３・４）　南東地点。サヌカイト製。２，４は凹基で３は平基。２は脚部が，４は頭部が欠損している。縄文時代か。

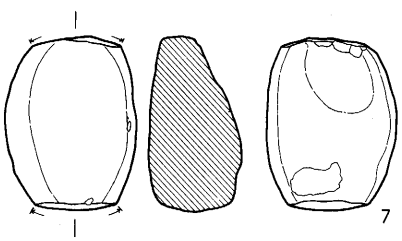
石核(？)（図２－５）　南西地点。石材はサヌカイト。周囲から規則的に剝片を取ってい





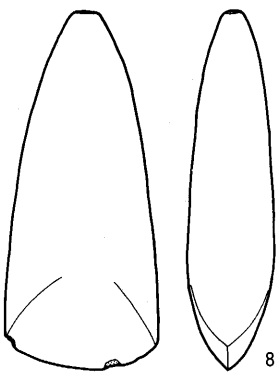



図２　周辺遺跡採集の遺物

１、高山市北西地点　　２、３、４、７同南東地点
５、同南西地点　　６、同北東地点
８、上大竹神谷北平

る。

磨り石（図２－６）　花崗岩(？)円礫を用いた磨り石でほぼ完形。全体に風化が著しいが下面は平坦で磨痕が観察される。また，上・下面には敲打による凹みが認められる。側縁部にも打痕が認められるが，使用によるものか否か不明である。

磨り石（図２－７）　安山岩製の不製円筒形に近い形状をもつ磨り石で，上下両面に磨痕をもつ。

○**上大竹神谷北平**（山室禮二氏採集，町教委保管）

磨製石斧（図２－８）　石材は玄武岩質。縄文時代（前・中期？）

○**七地蔵雲庵前**（兼高昭一氏採集）

備前焼壺（図３）　体側部に重ね焼の痕。重ね焼の影響で横断面は楕円形を呈し，焼けひずみが顕著。骨蔵器に使用されたものか。室町時代前葉。

亀山焼甕１・２（図４－１・２）　瓦質に近い。内面は，同心円タタキをナデ消す。備前焼にほぼ前後する時期のものか。

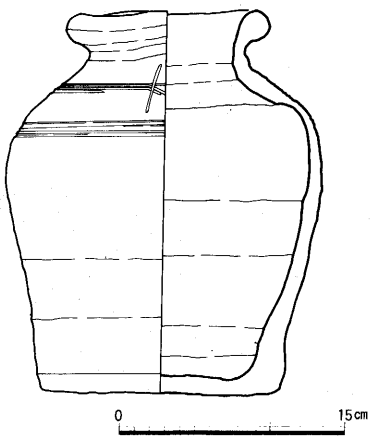



**図３　七地蔵雲庵前出土の備前焼壺**
（Ｓ＝１／５）

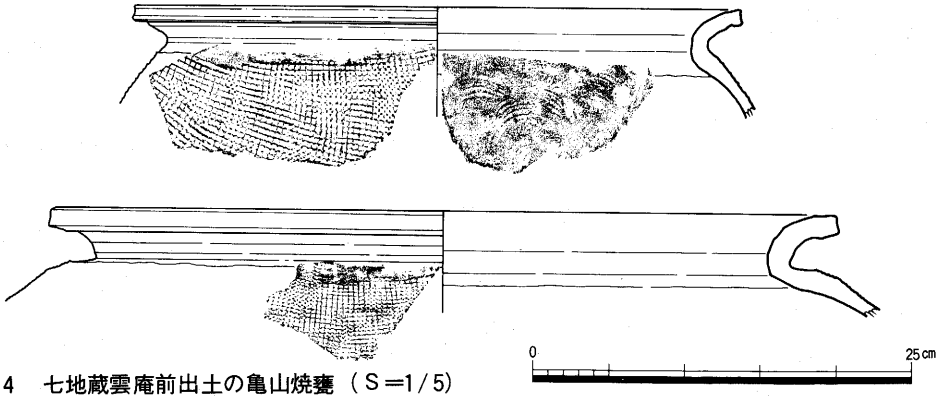



**図４　七地蔵雲庵前出土の亀山焼甕**（Ｓ＝1／5）

註

(1)　岡山大学ケイビングクラブ『川上町洞穴調査中間報告書』　1978　他

(2)　川上町教育委員会『原瀧山岩陰遺跡』1979．12

(3)　帝釈峡遺跡群発掘調査団『帝釈峡遺跡群』1976．6
広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 1978.3～1981.3

(4)　竹内明昭「成羽町小御堂遺跡」『成羽史話』1964.11

(5)　川上町教育委員会所蔵の資料がある。　(6)　(5)に同じ

(7)　岡山大学教育学部社会科教育内地域研究会『峡谷と高原の生活』1978.9

# 2. 岩陰の形状

権現谷岩陰遺跡の付近一帯は石灰岩地帯であり，本遺跡も石灰岩の岩陰を利用して形成されたものである。岩陰の前面直下すぐを流れる横松川によって浸食形成された谷底に南面して立地する本岩陰は，同川の水流による浸食によって形作られたものである（図5）。

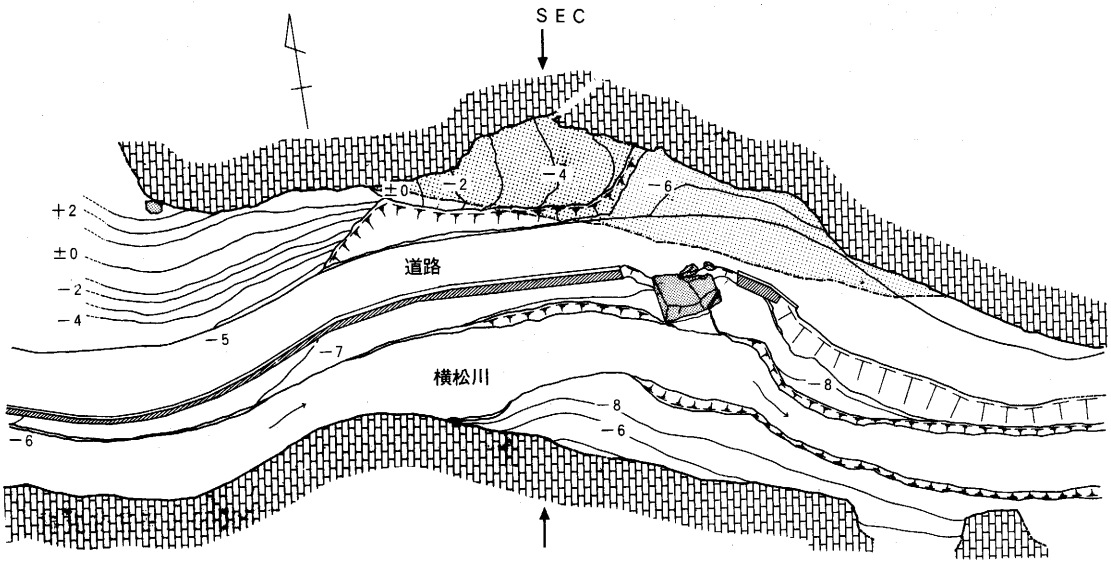



図5　権現谷岩陰遺跡地形図

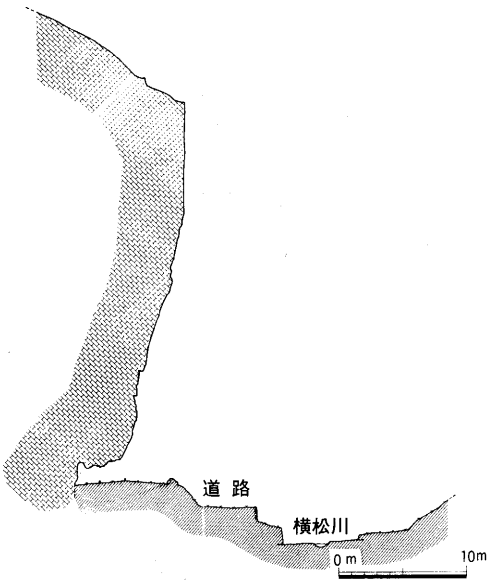



図6　岩陰の形状

横松川はわずかに蛇行しながら東流する水面幅5m前後の小河川であり，岩陰の最も奥まった部分での現地表面と川水面との比高差は約5m，岩陰内岩壁から川までの距離は7～15mである。川の対岸では山斜面あるいは岩壁に沿って川水は流れているが，水流による浸食のために岩の抉れが著しい場所も一部存在する。

岩陰より東側は高さ約10mのほぼ垂直に立つ岩壁が続き，西側は現在一部に植林をみる山斜面となって続いている。

岩陰本体は非常によく発達したもので，岩庇が二段（上部外側の岩庇を外岩庇，下部内側のそれを内岩庇と以下呼ぶ）になり，ひとつの大規模な岩陰の基部内側にさらにもうひとつの岩陰が形成されている（図６）。 外岩庇によって形成される岩陰は，現状において，幅約50m，岩陰内で現地表に岩壁が接する部位から外岩庇線までの水平距離つまり奥行きは最大約８ｍ，平均６～７ｍ，外岩庇の現地表からの高さ約30m を測る大形のものである。内岩庇内の部分を除いた岩壁は，水平面に対し約70～80度の急角度で立ち上がり，まことに量感のある絶壁状をなす。外岩庇部より以高は約60度のなだらかな傾斜となって山斜面に続く(図版一)。

しかし，この岩陰の下方，内部には，内岩庇があって，実際にはそこが居住場所と考えられ

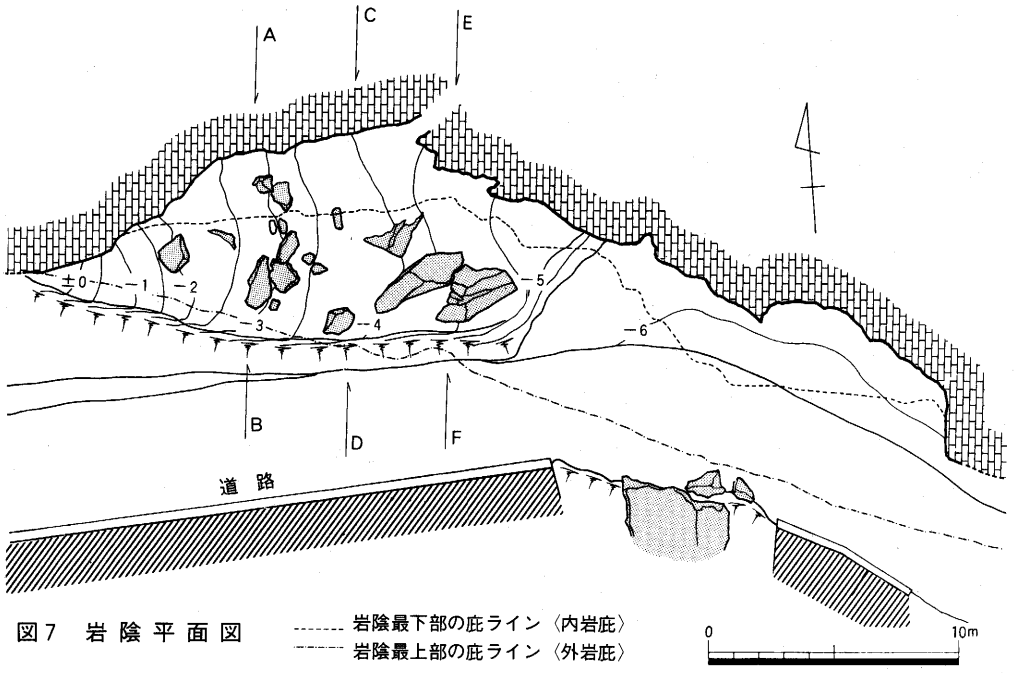



図７　岩 陰 平 面 図　　------ 岩陰最下部の庇ライン〈内岩庇〉　-·-·- 岩陰最上部の庇ライン〈外岩庇〉

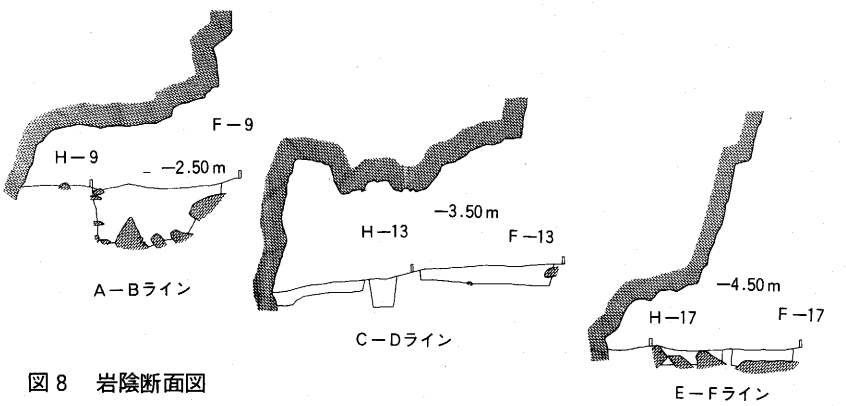



図８　岩陰断面図

る空間をつくっている（図７）。これは，幅約33m，奥行2～3.5m，現地表から内岩庇までの高さ約1.5～4mの規模の一連の岩陰である。現状では，そのほぼ中央で内岩庇の前方への張り出しがさほどない部分があり，そこを境にしてこの岩陰内を東西に二分することができる。

このうちの東半部では，岩陰内岩壁が60度前後の角度を示して地下に続く。後述する西半部に比べて現状でのこの部分の岩陰はあまり発達したものではないが，地元の人々の話によれば近年まで今以上に岩庇が前面に張り出しており，現在前面の道路の路肩の石垣を半ば壊している約５×３×２ｍ大の落盤も元は岩庇・岩壁の一部であったということである。

一方内岩庇の形成する岩陰の西半部内では，そのほぼ中央に入口幅約10m，奥行き２～３ｍ高さ約0.5～2m近くの半洞穴状を呈する部分があり，その内部ではいくらかの凹凸をもちながらも水平に近い状態の天井部が存在し，人間が自由に立て動ける空間が形成されている。なおこの岩陰西半部のほぼ中央の現地表面近くに東北東方向へ10m以上も奥に続くかろうじて人が侵入できるほどの小鐘乳洞が開口している。

本岩陰全体の形状をみた場合，この内岩庇で形成される岩陰の西半部が岩陰内で最も居住に適した形状を呈している。しかしながら内岩庇内岩陰の東半部も居住に不適当という形状ではなく，十分居住可能な空間を形成していたと考え得る。加えて高さ約30m付近にある外岩庇によっても少し位の雨雪ならば防ぐことができる。よって内岩庇内岩陰の西半部の内側は，余程のことがないかぎり，雨雪を充分避け得る環境を提供している。

岩陰前面には現在幅約４ｍの道路が岩陰に平行しかつ横松川左岸に沿って敷設されている。外岩庇で形成される岩陰全体の東側部分では岩陰にほぼ接してこの道路が走っているため，岩陰内の岩壁と川岸堤とに狭まれた地表面はほぼ平坦になっているが，これは道路敷設の際に岩陰下におそらくは堆積していたであろう土礫を除去・削平した結果である。これに対して西側部分，とりわけ内岩庇で形成される岩陰の西半部前面では大小の落盤・落石が顕著で，岩陰西側に接する山斜面から流入してきた土砂とともに堆積している。この土礫堆積物は，わずかな小段をいくつかもちながらも岩陰全体のほぼ中央部付近から西に向ってなだらかに上向傾斜しついには岩陰西端をおおい西側の山斜面に続いている。これの東西での比高差は約６ｍであるが，半洞穴状部分の中央部前面では比較的なだらかになっている。それの南端つまり土礫堆積物と道路が接する部分では西側に続く山斜面とともに道路によって削り取られており，内岩庇内岩陰西半部の中央部分では土礫堆積物上面と道路面が約２ｍの段差をもつ崖状を呈している。土礫堆積物の中央部付近での上面は内岩庇直下あたりがわずかに盛りあがり，岩陰内の岩壁付近及び道路法面に接するところではそれより20～30cmぐらい低くなっている。

現在，横松川の左岸と岩陰内岩壁との距離は７～15mを測り，川岸の護岸部分を路肩として道路がつけられているわけであるから，道路敷設以前の岩陰前面は，西方が高く東方向へなだらかに下向傾斜し南の横松川に向ってなだらかに下っていく奥行き約５～10mのテラスを形成していたものと思われる。従って，本岩陰前面において，道路敷設による旧状変更を受けることが比較的少なかったと想定されるのは内岩庇によって形成される岩陰の西半部である。

つまりこの内岩庇内岩陰西半部が，先述のように岩陰の形状からみて最も居住に適する空間を形成するとともに岩陰内土礫堆積物・岩陰前面のテラスへの近年の道路敷設等による破壊が少なく，最もよく旧状を保存されている。さらに発掘調査前に縄文土器ほかの遺物が表面採集された地点もここである。よって今回の調査の発掘区を，内岩陰によって形成される岩陰の西半部に設けた。

# 3. 発 掘 経 過

本岩陰遺跡は兼高昭一・西森裕良両氏により1978年に発見されたものであり，川上町原瀧山に所在する原瀧山岩陰遺跡の発掘調査のあとを受けて，1980年３月27日から４月５日までの10日間，近藤義郎が指導し，吉留秀敏を現場担当の長とし岡山大学法文学部考古学研究室学生が参加して発掘調査を実施した。

第２章において述べたように，岩陰の地表はいくつかのテラスを持ちながら，岩陰西端から東側に向かうゆるやかな傾斜を示しており，岩陰西端部からの土砂の流入・堆積を思わせた。一方，岩陰の形状は岩陰東半部が比較的開放性のある岩陰であるのに対し，西半部は半洞穴状をなし，西半部中央付近で最大の空間を持っている。西半部中央から東へは徐々に内岩庇が高さを増し，また内岩庇によっておおわれる部分が狭くなるのに対し，西側には半洞穴状のまま続いてゆく。したがって，遺跡の中心をなすのは居住空間として最も適していると思われる半洞穴状部分（岩陰西半部）と想定して発掘を開始した。

発掘区は岩陰を横断する軸を６～22，縦断する軸をＦ～Ｉに取り１×１ｍグリッドを設定し（図９），四班編成で作業にあたるものとした。すなわち，岩陰西半部中央奥側・Ｈ－13，Ｉ－13，Ｈ－14，Ｉ－14グリッドを１班，岩陰中央部・Ｆ－16，Ｇ－17，Ｆ－18，Ｆ－20グリッドを２班，岩陰西半部前面・Ｆ－11，Ｇ－11，Ｆ－12，Ｇ－12グリッドを３班，岩陰西端部・Ｆ－６，Ｆ－７，Ｆ－８，Ｇ－６，Ｇ－７，Ｇ－８，Ｆ－９，Ｆ－10グリッドを４班が担当した。なお，発掘時には，包含層の複雑な堆積，攪乱が予想されたため，遺物はプラン・レベル記入の後，取り上げを行ない，発掘後の細かい検討に備えたが，以下に述べるように包含層の保存状態がきわめて不良であったため，有効な結果を得ることができなかった。

発掘当初，Ｉ－13グリッドに設定された試掘壙では，地表下約20cmで縄文土器片が出土し，

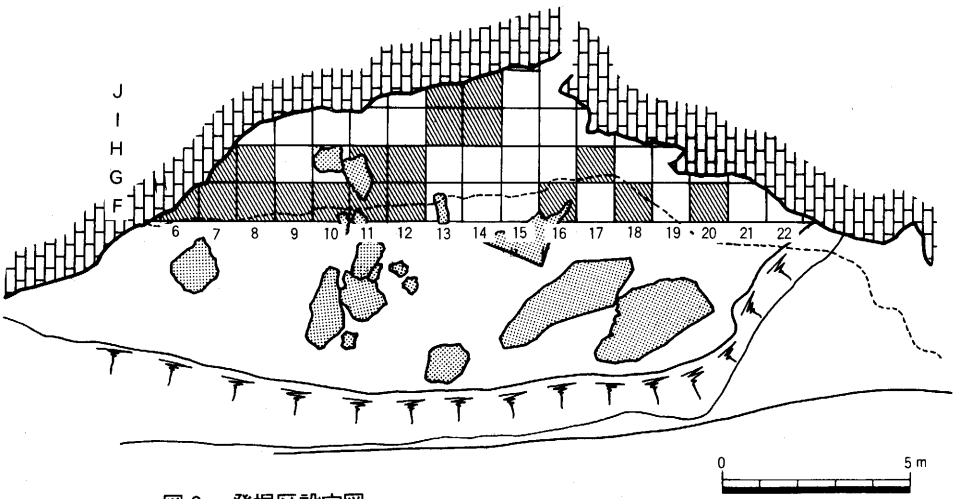



図９　発掘区設定図

また，その周辺からも数片の縄文土器片・骨片を表採しており，縄文土器包含層の浅さを思わせたが，掘り下げ開始後すぐに多数の縄文土器小片・石鏃の他チップ，フレイク・獣骨片・貝殻の出土をみた。

包含層は岩陰西半部中央部を中心に広がっており，岩陰西端部ではきわめて薄いものであった。包含層中の縄文土器は小片が多く，縄文後・晩期を中心とし，前期と考えられるものを少量含んでいた。この包含層はレンズ状・ブロック状の複雑な堆積を示しており，かつ，そこには多数の炉が掘り込まれていることが判明した。炉址は岩陰全域に分布し，石組炉１の他はすべて素掘りの炉であり，発掘区内で検出したものだけで31基を数える。当初，炉中及びその周辺から縄文土器片を検出したこともあって，これを縄文時代の遺構と考えたが，いくつかの炉中から近世の遺物が出土し，さらに炉の掘り込まれている層そのものが，近世・近代の遺物を含む流土・置土であることを確認するに及び，すべての炉が近世以降に掘り込まれたものと判断した。また，これらの炉以外に大小９基の掘り込みを検出したが，１基を除いて他はすべて炉と同様，近世に至って掘られたものであった。

縄文土器を含む流土層は岩陰西半部中央で最も厚く，また，著しい攪乱を示していたが，これは，この部分が居住に最も適した場所であったがために，縄文包含層形成後，近世・近代を中心に種々に利用されてきたためと思われる。

岩陰西半部中央では，この厚い流土層の掘り下げを続行したが，発掘期間内で純粋な縄文土器の包含層に達することは不可能であった。一方，流土層の薄かった岩陰西隅部分と岩陰中央部においては深掘りを行ない，本遺跡の基本層序を確認して今回の調査を終了した。このうち岩陰中央部の深掘り部分では，流土層下に厚い間層を挟んでサヌカイトチップを含む暗灰色土が存在しており，縄文後・晩期以前，可能性として縄文前期と考えられる包含層が存在することが明らかになった。

# 4. 遺跡の層位

## 1. 基本層序

当遺跡における基本層序は次に述べる通りである（図10）。

● Ⅰa層　黒色の表土層。厚さ10cm内外で，近・現代遺物，縄文土器，石器，フレイク・チップ，獣骨，貝殻を含む。層上面，層中で近・現代の炉址を検出している。

● Ⅰb層　黒褐色土層。厚さ10cmから20cmを計り，近・現代遺物，縄文土器，石器，フレイク・チップ，貝殻を多量に含む。また，Ⅰa層と同じく層上面，層中で近・現代の炉址を検出している。

● Ⅰc層　軟質でやや汚れた黄白色土層。厚さ10cmから25cmを計る。近・現代遺物，縄文土器，石器，フレイク・チップ，獣骨，貝殻を含む。層上面，層中で近・現代の炉址を検出している。後に述べるⅣ層と色調，土質が類似しており，非常に粗でやわらかな堆積の状態から推して，Ⅳ層土が二次堆積したものと思われる。恐らく，近・現代の当岩陰の居住者によるものであろう。

● Ⅱ層　幾分か粘質を帯びた暗褐色土層。厚さ5cmから20cm以上を計り，近・現代遺物，縄文土器，石器，フレイク・チップ，獣骨，貝殻を含むが，上層に較べその出土点数は少ない。Ⅰ層と同様，層上面，層中で近・現代の炉址を検出している。

● Ⅲ層　F—8グリッド東壁セクションで観察された，人為的な掘り込みとも思われるピット内に堆積した暗褐色の粘質土層である。上下二層（Ⅲa・Ⅲb）に区分でき，Ⅲb層からはあたかも置き並べたような状態で二個の磨り石を検出している。

● Ⅳ層　固くしまった黄白色土層。厚さは平均して15cmから20cmを計る。発掘区中央部を中心に広がっている。遺物は含んでいない。

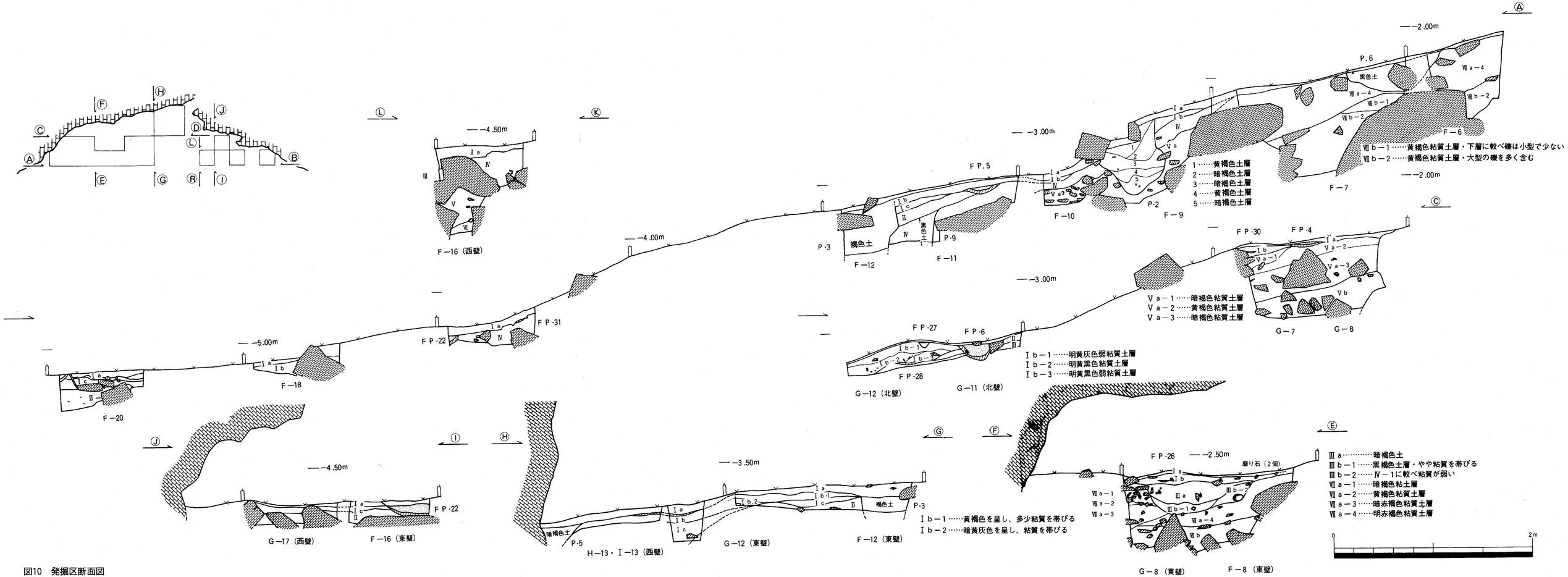
● Ⅴ層　礫を多く含む黄褐色砂層。厚さ40cmを計る。人工遺物，自然遺物等の出土はない。均質な砂質土であることから，本層は横松川の氾濫・堆積によって形成されたものと考えられる。

● Ⅵ層　暗灰色土層。サヌカイトチップ，炭片を含み，比較的安定した層の構成を示す。

● Ⅶ層　黄褐色の粘質土層。細かい角礫を多く含み，下部では巨礫が多くなる。上部は石灰分の沈着が著しい。3～4層に細分することが可能であるが，いずれの層も遺物は全く含んでいない。

## 2. 層位の検討

第3章で述べたように，深掘りを行なったのは岩陰の東西両側の一部のみであり，そこで確認した層が相互にどのような関係にあるのかは，発掘区中央部での深掘りを行なっていないため必ずしも明らかではないが，ここでは予察を含めて若干の整理を行なっておきたい。



F－16（西壁）
F－20
F－18
F P・22
F P・31
F P・5
F－12
F－11
P・3
P・9
F－10
F－9
P・2
F－7
F－6
P・6
F P・30
F P・4
G－7
G－8
F P・27
F P・6
F P・28
G－12（北壁）
G－11（北壁）
G－17（西壁）
F－16（東壁）
H－13・I－13（西壁）
G－12（東壁）
F－12（東壁）
F P・26
G－8（東壁）
F－8（東壁）
1……黄褐色土層
2……暗褐色土層
3……暗褐色土層
4……黄褐色土層
5……暗褐色土層
Ⅶb－1……黄褐色粘質土層・下層に較べ礫は小型で少ない
Ⅶb－2……黄褐色粘質土層・大型の礫を多く含む
Ⅴa－1……暗褐色粘質土層
Ⅴa－2……黄褐色粘質土層
Ⅴa－3……暗褐色粘質土層
Ⅰb－1……明黄灰色弱粘質土層
Ⅰb－2……明黄黒色粘質土層
Ⅰb－3……明黄黒色弱粘質土層
Ⅰb－1……黄褐色を呈し、多少粘質を帯びる
Ⅰb－2……暗黄灰色を呈し、粘質を帯びる
Ⅲa……暗褐色土
Ⅲb－1……黒褐色土層・やや粘質を帯びる
Ⅲb－2……Ⅳ－1に較べ粘質が弱い
Ⅶa－1……暗褐色粘土層
Ⅶa－2……黄褐色粘質土層
Ⅶa－3……暗赤褐色粘質土層
Ⅶa－4……明赤褐色粘質土層
0
2m


図10　発掘区断面図

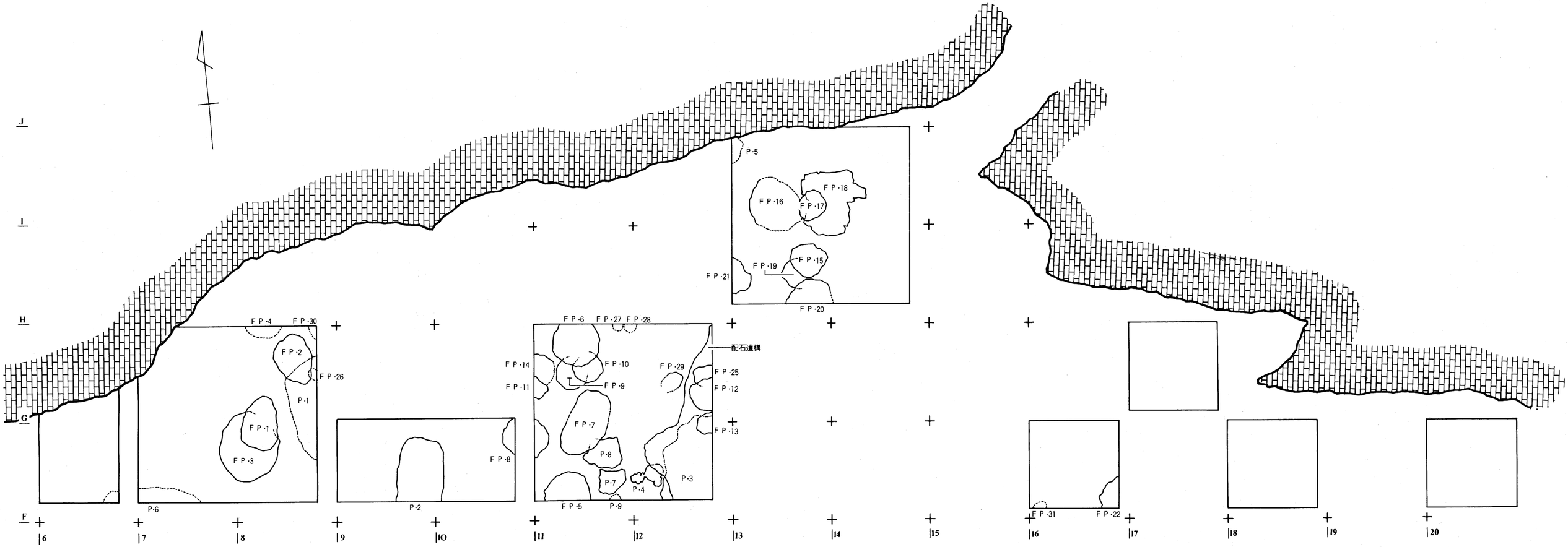

J
I
H
G
F
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
P・5
FP・18
FP・16
FP・17
FP・19
FP・15
FP・21
FP・20
FP・4
FP・30
FP・2
FP・26
P・1
FP・1
FP・3
P・6
FP・8
P・2
FP・6
FP・27
FP・28
配石遺構
FP・14
FP・10
FP・29
FP・25
FP・11
FP・9
FP・12
FP・7
FP・13
P・8
P・7
P・4
P・3
FP・5
P・9
FP・31
FP・22
0
2m

図11 遺構配置図

本遺跡の層序は先に述べた７層からなるが，それらを大別すれば，Ⅰ，Ⅱ層が流土・攪乱土層，Ⅲ層が含包層，Ⅳ，Ⅴ層が無遺物層，Ⅵ層が包含層，Ⅶ層が無遺物層とすることができる。このうち流土層，Ⅰ・Ⅱ層については，今回の調査で出土した縄文時代遺物のおよそほとんどが含まれるものであるにも関わらず，近・現代の遺物が混在しており，本来的な縄文時代の生活層とは見なしがたいものであった。Ⅰ，Ⅱ層中に検出された炉址も，近現代の岩陰の居住者によるものであろう。攪乱を受けていない包含層と呼びうるものは，Ｆ８グリッドでわずかに認められたⅢ層のみであり，他のグリッドではⅠ，Ⅱ層の下部には無遺物層・Ⅳ層が広がっている。こうしたことから考えて，縄文後・晩期を中心に包含層が形成されて後，近現代の岩陰居住者によって，炉の構築等，たび重なる改変が行なわれ，包含層の大部分が二次的攪乱を受けて現在のⅠ，Ⅱ層をなしたと考えられ，ピット状の深い部分でわずかに残ったのがⅢ層である可能性が強い。

さて，Ⅰ～Ⅶ層の関係であるが，復原的に考えれば，岩陰形成後岩陰西端部からの大規模な土砂の流入があり（Ⅶ層），その後ある時期にここが居住地として使用された（Ⅵ層）後，河川の氾濫・土砂の流入があり（Ⅳ・Ⅴ層），そののち縄文後・晩期に再び居住地として使用されたとすることができよう。

なお，Ⅵ層の時期であるが，Ⅰ～Ⅱ層に縄文後・晩期の他，前期の土器が含まれており，Ⅵ層が縄文前期以前に形成されたのか，Ⅵ層が縄文前期の層であり，一部，土器が上部の層に混入したかのいずれかであるが，今回の発掘資料中，前期の土器片の少なさを考えれば，後者の可能性も十分に考えられよう。

# 5. 遺　　構

## 1. 炉　　址

炉址は全発掘区で合計31基確認されている。攪乱や幾重もの切り合い関係のために明確な個数確認に至らなかったもの，グリッド内のほぼ全面に焼土，炭化物が散在し，個々のプランを明確にし得なかったものを考え合わせると，実際は40基をはるかに上まわる数値が予想される。

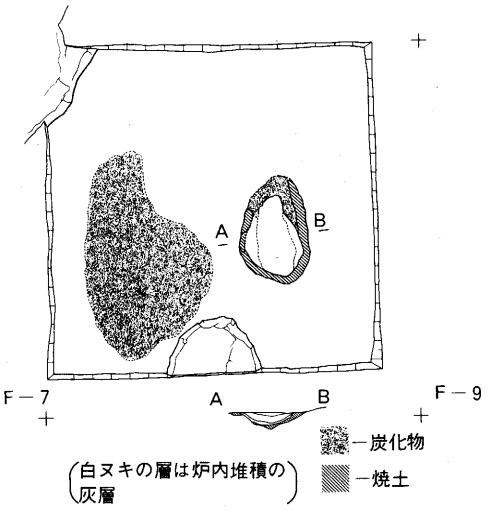



図12　F.P.－1の検出状況　S＝1/40
（Ⅰa層中）

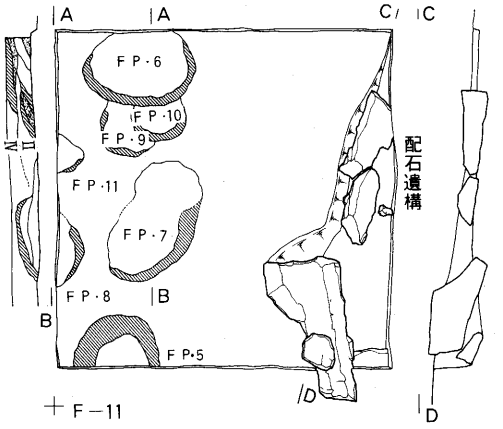



図13　F－11·12　G－11·12グリッドにおける遺構検出状況（1）
（Ⅰb層下面）　S＝1/40

炉の構造は，径40～50cm，深さ10数cm程のわずかな「くぼみ」を設けただけのものが21基，全く掘り込みのないものが9基，組石炉は1基で，その大部分はプラン確認に困難を極める貧弱なものである。組石炉をのぞく大部分の炉は，単時的な，あるいは短期間の使用で廃絶されたものと思われる。

炉の営なまれた層位は，表土層中，Ⅰ層中，Ⅱ層上面（F－8，G－8，グリッドのⅡ層の堆積のない面ではⅦ層）であり，層位，出土遺物等から，今回検出されたすべての炉は，近世以後に営まれたものと推定される。

三ケ所の発掘区で炉の集中的分布が認められる。以下各々の区ごと記述してゆく。なお記述においては，各発掘区で特に精査したものに代表させ，その他の資料は別表に代える。

また炉址は以下すべて Fire Pit（F.P.）と記す。

F·G－7·8グリッド（図12）

岩陰の西側隅の最も高まった所にある，この発掘区では6基の Fire Pit を確認している。

F.P.1は，表土層中に掘り込まれており57×40cmの惰円形プランを呈しているが，北壁側のプランは不明確で焼土の存在も認められない。炉内には三層の灰層が推積している。

F·G－11·12グリッド（図13）

前述の発掘区より，東よりに一段下がった岩陰のほぼ中央部庇直下を中心に形成されている

平坦面に設けられたこの発掘区からは14基の Fire Pit を確認している。

F. P. 6 は最終的に廃絶されるまでに二度の使用期間を経ている。初期のものがⅣ層上面を掘り込んで使用され，廃絶された後Ⅱ層の堆積期間を経て，さらに再びⅡ層を掘り込んで使用されている。初期の時点でのプランは明確ではないが，後のものは47×50cmの円形を呈し，北東部に配石を行っている。

これはⅡ層堆積期間中に，この平坦面が居住空間として利用されなかったことを示すものと思わせる。この Fire Pit と切り合い関係にあるF. P. 9，F. P. 10は，F. P. 6 の後のものが設けられる以前にF. P. 9，F. P. 10の順に使用された状況を示しているが，北側のプランは，F. P. 6 と同一である可能性が強く，F. P. 6 の 1 時的な中心部の移動であると判断する。

F. P. 6 の初期のものに 1 層の炭層，後のものに灰層と炭層，焼土と炭の層の三層の堆積が認められる。

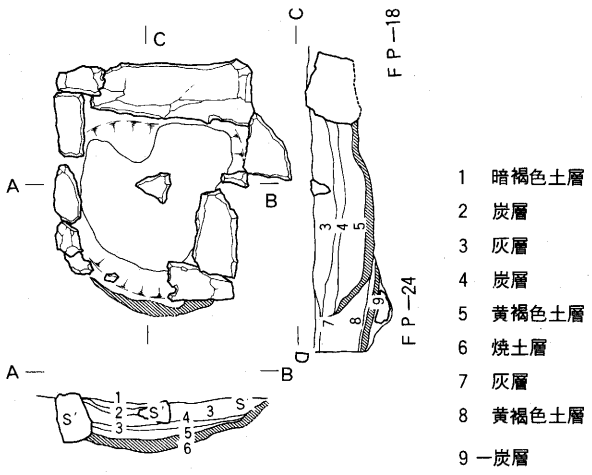



図14　ＦＰ－18（ＦＰ－24のセクション）Ｓ＝1/20
（Ｉｂ層上面）

このグリッドでは他にF. P. 7，5，8，11が同一層位に確認されているが，同時存在を認定することは現時点では不可能である。

H・I－13・14グリッド（図14）

岩陰内の最も奥まったこの地点では，焼土，炭化物の層の分布が著しく，個々の Fire Pit 検出は困難を極めたが 1 基の組石炉を含む 8 基の Fire Pit が確認された（図版四）。

Fire Pit 18はこぶし大～人頭大程度の角礫を用いた50×62cmの組石炉である。炉の南壁には配石はなく，灰をかき出すための配慮かとも推測される（セクションでそれを検証することはできなかった。）。

炉内には 2 層の灰層，一層の炭層の堆積があり，底部焼土層直上から地下タビの金具を検出した。

## 2.　Pit，その他の遺構

今回の調査では炉址の他に 8 基のピットと 1 基の配石遺構が確認されている。

いずれの遺構も土質の軟弱さによって，プランの明確な把握はできなかった。年代は縄文時代のものが 1 基，その他は炉の営なまれた近現代に相前後する時期のものと思われる。

遺構の性格が把握できたものは埋葬施設のみで，その他は今のところ不明である。

本報告の記述では，これらの遺構のうち，特に記述すべき 5 基を取り上げ，その他は別表

（表１）に代える。

Pit －１〔Ｆ－８〕（図11）（図版三）

この遺構はプラン未確認のまま掘り下げてしまいＦ－９，Ｈ－９ライン東側のセクションで確認された。Ⅶａ－１層上面から掘り込まれており確認された時点で上面の径110cm，深さ30cmを測る。ピット内は黒褐色の粘質土層（Ⅲ層）が堆積し底面南側に二点の磨り石を確認した。（二点のうち，セクションにかかっている一点は取り上げたが，他の一点は取り上げていない。）

この二点の磨り石以外に他の遺物は確認されていないが，これが縄文時代の遺物に比定されることと，ピット底面に接して確認されていることから，この遺構は縄文時代のものである可能性が高い。

Pit －２〔Ｆ－９〕（図11）

この遺構はＦ－９，Ｆ－10グリッドに設けたトレンチで確認された。今回調査したのは遺構の北半部のみであり，南半部は未発掘である。ピットの掘り込まれている層は，西側の肩がⅠｂ層から，東側の肩がⅣ層からであるが，いずれも土質が軟弱なため正確なプランは把握できなかった。ピット上面の北側に数個の円礫が，南側に二個の角礫が，このピットに伴うかのように存在するが，いずれも明らかな人為的行為と認定するには至っていない。ピット内の堆積土が下がり，その後に流入した可能性もある。

ピット底面から犬の骨が一個体分検出されており，この遺構は犬の埋葬施設であろうと考えられる。

Pit －３〔Ｆ－12〕（図11・15）

このピットはＦ－12の配石遺構の直下から検出された埋葬遺構である。図15中の×印の地点から人間の頭蓋が検出され，遺構の掘り込まれている層位（Ⅰｂ層中）等の状況から，近現代の土壙墓ではないかとの見解が強まり，この頭蓋を確認した時点で，それ以上の掘り下げは中止した。掘り肩はＦ－12グリッドの範囲内で土壙の西半部を確認するにとどめた。

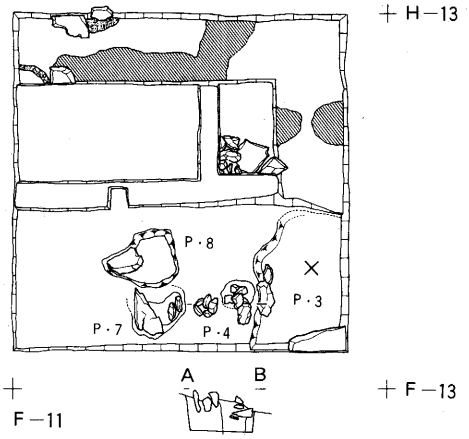



図15　Ｆ－11・12　Ｇ－11・12グリッドにおける遺構検出状況（2）Ｓ＝1/40（Ⅵ層上面）

土壙の縁辺西側に二つの角礫と，南辺に一つの大きな角礫が存在する。これらの角礫は埋葬に伴う標石かとも考えられるが，後の流入，落下によってここに存在する可能性もあり，今のところどちらとも言えない。

土壙内に三層の堆積土が認められるが，土壙埋土は，そのうち最も下の層で，その上の二層は後に埋土陥沈後堆積したものと思われる。

Pit －４（図11・15）

Ｆ－12グリッドのⅣ層上面から掘り込まれ

ている配石を伴うピットである。上面での径は30×15cmで，ピット上面に径10～20cm程の五つの角礫を配し，ピットの西側にさらに五つの角礫・円礫を直立させて円形に配置してある。

このピットの周辺からは数点，縄文時代後期に属する土器片が検出されているがピット内から遺物の検出はなく，このピットの年代，属性共に不明である。

**配石遺構**〔F—12〕(図15)

F—12東側の表土層直下で確認された。南北に三つの大きな角礫を配し，これによって地表面に段を形成している遺構である。

F—12を中心とする区域がこの配石によって作出された平坦面であるかのような状況のため，本遺構は，この区域にかつて生活空間としての利用を意図した人間によって，平坦面の形成と土砂の流出を防ぐために設けられた配石の可能性がある。しかしこの遺構が明らかに人為的行為の所産であるとする確証はない。配石に利用された角礫は岩陰の落石と石材が同一である。この遺構に明らかに伴う遺物の検出はないが，遺構の年代は，これが平坦面形成のための配石であると仮定すると，F—11・12で検出されている炉址と同時期か，相前後する時期のものであると考えられる。

## 3. 小　　結

以上，今回の調査で検出された遺構について述べてみた。Pit—1を除くすべての遺構は，近・現代のものと推定される。

今回の発掘調査中に地元の高齢な見学者の方々が，大正期，昭和初期のこの岩陰における状況を語った中に，これらの遺構の性格を知る上で多くの参考になる事項を見い出すことができた。これらの話をまとめると，

① 大正～昭和初期にかけて，この岩陰と，東側に隣接したもう一つの岩陰（現在は岩陰の南側の道路建設工事の際に埋められているが当時は，この岩陰の方が居住空間として好まれたらしい。）を，「ホイトウ」「クサリ」と呼ばれ村を追われたハンセン氏病患者，「犯罪人」等が入れ替り立ち替り居住空間として利用していた。

② 彼らは，四，五人で「共同生活」を営み，夫婦で生活する者もいた。時に居住空間の選地をめぐっていがみ会うこともあった。

各地の岩陰を季節的に移動生活する者，勝山にある同様の岩陰と相互に移動生活する者，ここに永住する者と，ケースはさまざまである。

③ 居住施設は，岩陰の庇に柱を立てかけ板を張る等して開口部を覆い，中に炉や「泥ゴタツ」を設ける等の簡単なものであった。時には付近の小洞穴を貯蔵穴や作業場にする等岩陰，洞穴相互の機能的な分類を行うこともあった。

④ 彼らの生業は主に物乞，野犬の皮や紙の原料となる草木の行商等さまざまであるが，特にこの岩陰は，古くは宿場町として栄えていた高山市に近接していることもあり，この様な生業を支える条件はかろうじて整っていたのかもしれない。

⑤ ハンセン氏病患者や浮浪者が死亡した場合，近隣の農民や自治体が，死体の身元の判明し

た者はその遺族へ届け，不明の場合は無縁ぼとけとして葬った。

①のうち，年代に関しては，これが近世まで朔り得ることは今回の出土遺物から推察される。さらに，このような人々が少なくなった戦後も農民が家畜をここへ一時的につなぎ留めることがあり，現在も近隣の農村の生活圏内にあるため，この岩陰の利用者は必ずしも浮浪者のみとは限定できない。

またこの岩陰に限らず，後のフィールド調査の結果，横松川流域には他にも生活可能な岩陰，鐘乳洞が点々と存在し，そこに炉址等が認められることから，この流域一帯が彼らの居住域として機能していた可能性も考えられる。

以上①～⑤は人々の記憶として残されているもので確たる資料とはし得ないが，今回調査した遺構の性格を推測させるに充分なものであるためここに掲げた。

近，現代の，この階層を目的とした発掘調査ではないので，これ以上の言及は成し得ないが，検出された炉址のうちの多くは彼らによって営まれた炉であり，そのうちの幾つかは「泥ゴタツ」址であり，配石遺構は彼らの生活面を作出するためのものであり，犬の埋葬遺構は皮を剝がした犬の死体を埋めたものであり，土壙墓はここで死んだハンセン氏病患者なり浮浪者なりを葬ったものである蓋然性は極めて高い。

最後に，歴史を学びつつある学生の教育をも目的の一つとした今回の発掘調査において，研究対象とした時代を越えて，社会から排除された階層の人々の生活の一端をうかがうことのできたことは，学生として非常に有意義な体験であったことを付け加え，本章の小結としたい。

## 表1　権現谷岩陰遺構

| 遺構名 | グリッド | 層位 | 備考 | 担当班 |
|---|---|---|---|---|
| Fire Pit.(炉) 1 | $F_8, G_8$ | Ⅰa層中 | | 4　班 |
| 2 | $G_8$ | 〃 | | 〃 |
| 3 | $G_7, G_8$ | Ⅴa層上面 | | 〃 |
| 4 | $F_7, F_8$ | 〃 | | 〃 |
| 5 | $F_{11}$ | Ⅱ層上面 | | 3　班 |
| 6 | $F_{12}$ | Ⅰb層上面 | 二枚の焼土層が堆積，配石を伴う，F.P. 9，10を切る | 〃 |
| 7 | $F_{11}, F_{12}$ | Ⅱ層上面 | | 〃 |
| 8 | $F_{10}, F_{11}$ | Ⅰb層上面 | | 〃 |
| 9 | $G_{11}$ | 〃 | F.P.10とF.P. 6に切られている。 | 〃 |
| 10 | $G_{11}$ | 〃 | F.P. 9を切り，F.P. 6に切られている。 | 〃 |
| 11 | $G_{11}$ | 〃 | | 〃 |
| 12 | $G_{12}$ | Ⅱ層中 | | 〃 |
| 13 | $F_{12}, G_{12}$ | 〃 | | 〃 |
| 14 | $G_{11}$ | 〃 | | 〃 |
| 15 | $H_{13}$ | Ⅰa層上面 | | 1　班 |
| 16 | $I_{13}$ | Ⅰb層上面 | | 〃 |
| 17 | $I_{13}$ | Ⅰa層中 | | 〃 |
| 18 | $I_{13}, I_{14}$ | Ⅰb層上面 | 南側一辺の配石を欠く，長方形の組石炉。底部より地下タビの金具出土 | 〃 |
| 19 | $H_{13}$ | 〃 | | 〃 |
| 20 | $H_{13}$ | 〃 | | 〃 |
| 21 | $H_{13}$ | 〃 | | 〃 |
| 22 | $F_{16}$ | Ⅲ層上面 | | 2　班 |
| 23 | $H_{13}$ | Ⅰc層下面 | F.P—15とF.P—19の下面に存在する。 | 1　班 |
| 24 | $I_{13}$ | Ⅱ層中 | F.P—18の下面に存在する。 | 〃 |
| 25 | $G_{12}$ | Ⅱ層中 | | 3　班 |
| 26 | $F_8$ | Ⅰb層中 | F—9，H—9，東壁セクション | 4　班 |
| 27 | $G_{12}$ | Ⅰb層上面 | Hライン，セクション | 3　班 |
| 28 | $G_{12}$ | Ⅲ層上面 | Hライン，セクション | 〃 |
| 29 | $G_{12}$ | Ⅱ層中 | H—7，H—9，セクション | 4　班 |
| 30 | $G_8$ | Ⅰb層中 | 〃 | 〃 |
| 31 | $F_{16}$ | Ⅲ層上面 | F—15，F—17，セクション | 2　班 |
| Pit.　1 | $F_9$ | Ⅴa層上面 | Pit底面より2点の磨石出土，縄文時代のピットである可能性がある。F—9, H—7, セクション | 4　班 |
| 2 | $F_9$ | Ⅰb層上面 | 犬の埋葬（死体廃棄）Pit | 〃 |
| 3 | $F_{12}$ | Ⅰb層中 | 人間の埋葬土壙墓 | 3　班 |
| 4 | $F_{12}$ | Ⅲ層上面 | 配石を伴う | 〃 |
| 5 | $I_{12}, I_{13}$ | Ⅰb層上面 | 12ライン，セクション | 1　班 |
| 6 | $F_7$ | Ⅴa層上面 | Fライン，セクション | 4　班 |
| 7 | $F_{11}$ | Ⅲ層上面 | | 3　班 |
| 8 | $F_{11}$ | Ⅲ層上面 | | 〃 |
| 9 | $F_{11}$ | Ⅲ層上面 | | |
| (配石遺構) | | 表土直下 | 生活面，面取りのための配石か，埋葬に伴う何らかの配石か。 | 3　班 |

# 6. 出土遺物Ⅰ　縄文土器

**1．縄文土器**　(図16～25)(図版七)

本遺跡出土の縄文土器は，3章において述べたように，以下記述するものを含め，すべてⅠ，Ⅱ層（第4章参照）から出土しており，今回の調査においては，Ⅲ層以下の層からは，一片の土器も出土しなかった。また，Ⅰ，Ⅱ層は，近代以降の攪乱が著しく，その中に包含されていた縄文土器は，二次的に動かされたものと判断して誤りない。従って，本遺跡出土資料を，その出土層位に基づき分類あるいは編年することは不可能である。また，これらの土器は小片，細片がほとんどで，分析に足るものはきわめて少ない。以下，出土資料の主なものについて記述し，当地域の編年と対照してその所属型式を判別できるものについては，それを書き加えておく。

1は鉢型土器の胴部破片で，器壁はうすく3～5㎜。外面は爪形文が横方向に少なくとも三列認められ，内面は横ナデが施される。胎土には，2㎜以下の石英を含み，色調は内外面とも暗灰褐色を呈する。

2も鉢形土器の胴部破片で，1と同様器壁はうすく，外面には三つ一単位の刺突文が少なくとも二列施されており，内面には斜め方向の条痕が施されている。胎土には，石英などを含むが極めて細粒である。色調は外面灰黒色，内面黒褐色を呈し焼成はきわめて良好である。これら1，2は縄文時代前期・羽島下層式土器と考えられるが，出土破片数はきわめて少なく，2と同一個体と考えられる42を含めて4片しか出土していない。

3は有文精製の深鉢形土器の口縁部で，突起をもつ。口縁端部はやや丸味を持たせ，RL縄文を施している。外面は横位にやや太めの二本の沈線を引き，その間にRL撚りの縄文を充填する。内面も，やはり太めの沈線を二本曲線的に引き，沈線間にはていねいなミガキを施している。またこの破片はその形状から，粘土紐の接合部分で破損したものと思われる。胎土中に白雲母片，長石粒を含み，内外面ともに暗黄褐色を呈する。

4は有文の深鉢形土器の口縁部片で，口縁端部から外面にかけ，RL縄文を施した後，口縁に平行する太めの沈線を引いている。沈線より下位の部分については，器面の荒れが著しく，調整はよくわからない。内面はナデを施している。胎土中には，長石，石英粒を含み，内外面とも赤褐色を呈する。

5は有文の深鉢形土器の小破片である。外面には，曲線あるいは直線的な沈線を描き，沈線間にはミガキを施し平滑に仕上げている。内面にも外面同様ミガキを施している。胎土中に白雲母片，長石粒を含み，内外面ともに暗黄褐色を呈する。

6は無文粗製の深鉢形土器の破片で，口縁部から頸部に相当する。別に記載したが，この破片と107は，同一個体と考えられる。口縁部は，ゆるい波状を呈し，端部には，外面側からの刺突による刻目を施している。外面は指ナデにより仕上げており，その際生じた凹凸が残ってい

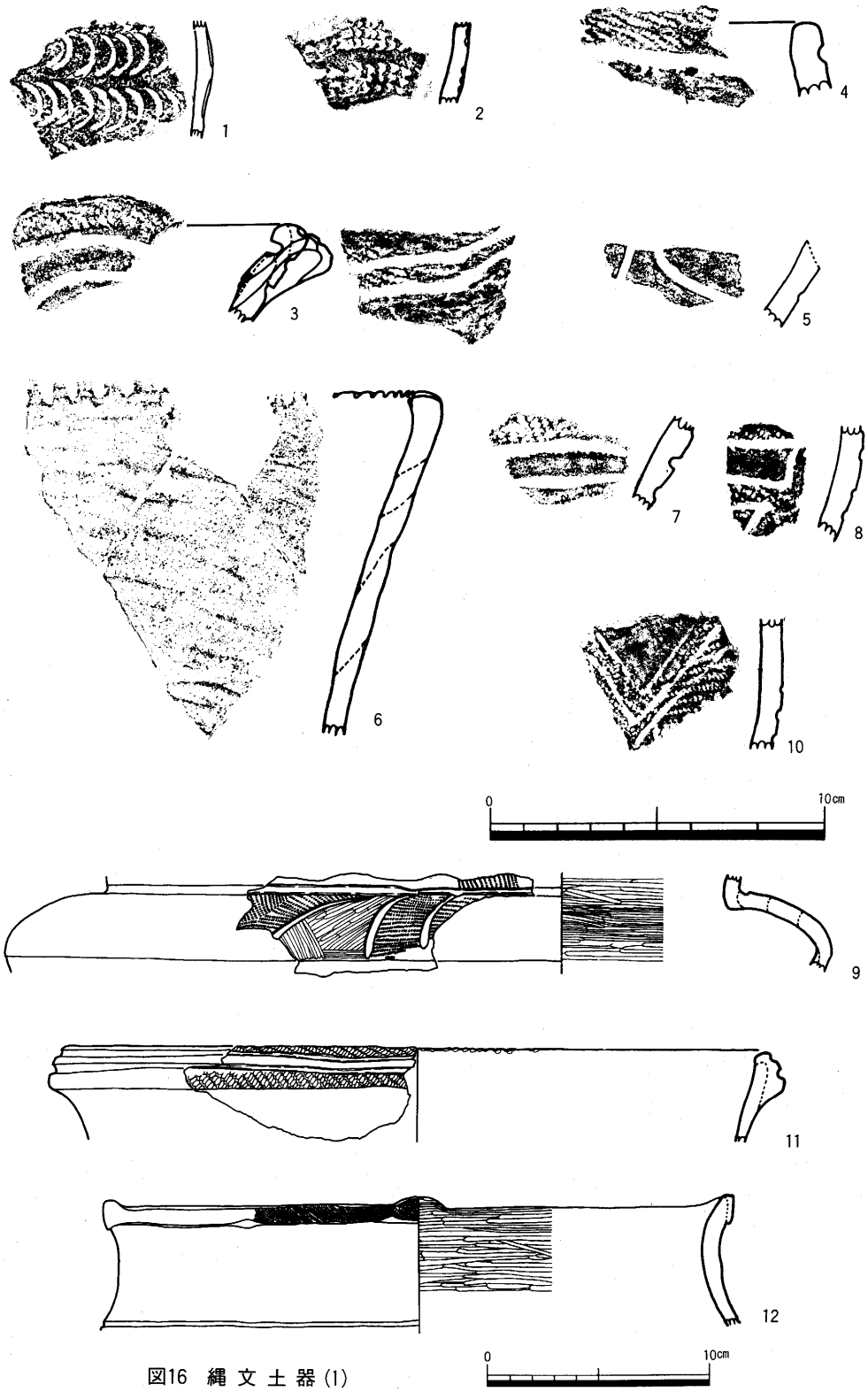



図16 縄 文 土 器 (1)

る。内面についても，同様の仕上げを行なっている。胎土中には，大粒（５～７㎜大）の砂粒，長石粒を含む。外面は褐色，内面は赤褐色を呈する。

７は有文精製の深鉢形土器の破片である。地文としてＲＬ縄文を施した後やや太めの沈線を横方向に引き，沈線で囲まれた部分の縄文を研磨により消し去って磨消縄文に仕上げている。内面についても，ていねいなヘラミガキにより仕上げをしている。胎土中に金雲母片，長石粒を含み，内外面ともに暗黄褐色を呈する。焼成は良好である。

８は有文精製の鉢形土器の破片である。外面は，沈線を直線的に引き区画を定めに後，ＲＬ縄文を充填している。無文帯となるべき部分は，ヘラミガキにより平滑にしているが，一部縄文の跡がついた部分もある。胎土中に，金雲母片を含む。外面は黄ないし暗黄褐色，内面は黒褐色を呈する。

９は有文精製の鉢形土器の頸部から胴部上半にかけての破片であるが，頸部はわずかしか残存していないため，文様構成についてはよくわからない。胴頸部の境にはかなり太めの沈線を水平に引き，その後頸部にＲＬ縄文を施している。胴部における施文順序は頸部のそれとは異なるようである。まず地文としてＲＬ縄文を施し，その後かなり太めの沈線を，斜めあるいは垂直に施し文様帯を区画する。最後に区画の一部をヘラミガキにより仕上げ，縄文を消し去っている。なお胴部の文様の範囲であるが，胴部の屈曲するあたりから上に限られるようである。

以上の３から９は，おのおのの特徴から判断して，縄文時代後期・中津式土器と考えられる。しかし，９については類例に乏しく，他の型式に属する可能性もある。また沈線の太さを重視するなら，３，４，７は，中津式の中でも古い部分に相当するとも言える。(1)

10は有文精製の鉢形土器の破片で，外面には三条の沈線を直線的に引き，その沈線間にＲＬ縄文を施しているが，一部は区画外へはみ出している。無文帯となるべき部分は，ていねいなヘラミガキを施し，平滑に仕上げている。内面も外面の無文帯同様ヘラミガキを施している。胎土中に石英粒を含み，内外面ともに黄褐色を呈する。

この様な特徴を有する本例の所属型式について少しふれておく。三本沈線の中に縄文を充填していることは先述の通りであるが，厳密には，沈線による区画と縄文は対応していない。つまり，本来縄文が充填されるべき部分の一部において縄文がなく，無文であるべき部分へ縄文がはみ出している。したがって，厳密には，福田ＫⅢ式の文様と同一とすることはできない。ここでは，福田ＫⅢ式及びその前後の時期のものとしておく。

11は有文の深鉢形土器の口縁部片である。口縁部外面は，粘土をはり加えて肥厚させており，口縁肥厚帯の上に，二条の平行する沈線を引き，ＲＬ縄文を施した後，沈線間の縄文をナデにより消し去り，無文部分を作っている。頸部外面はミガキを施した後，一部ナデにより仕上げている。内面も，頸部外面と同様の調整を施している。胎土中には，雲母片，長石粒を含み，内外面ともに暗黄褐色を呈する。

12は有文の鉢形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は粘土をはり加えて肥厚させ，部分的に丸く上方に隆起させている。口縁端部は水平な面を有する様に仕上げ，口縁

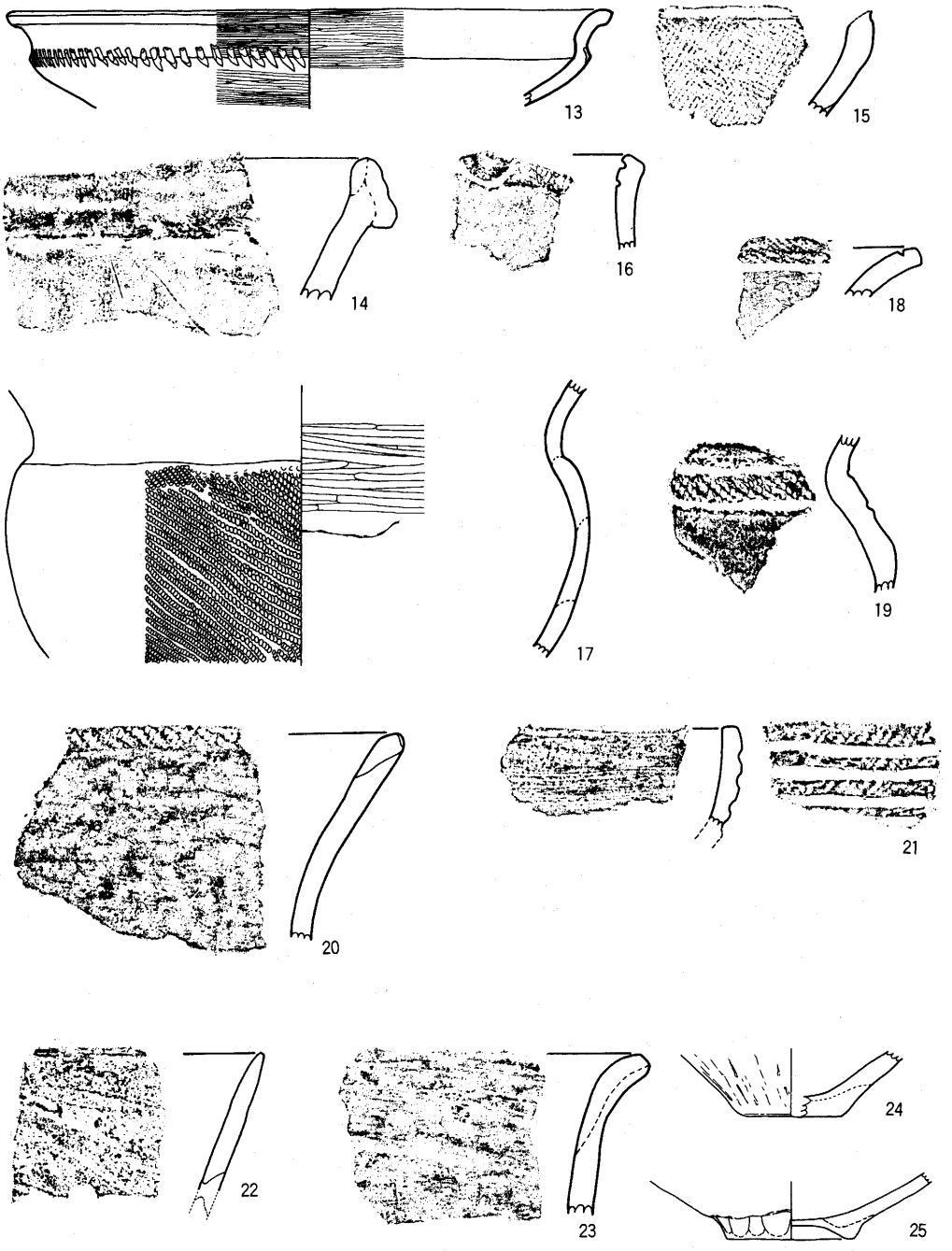



図17　縄 文 土 器 (2)

0　10cm

(13、17、24、25については S＝1／3)

肥厚帯は，ＲＬ縄文を施し，いわゆる「縁帯文」のかたちをとっている。頸部は外表面の一部が剝落しているためやや不明確であるが，ミガキを施し仕上げたと考えられる。頸部から胴部に移行する部位には，水平方向に一条の沈線を施している。内面については，原体幅が５㎜程度の工具によりミガキを施している。胎土中には，金雲母片，長石粒を含む。外面は黄褐色，内面は暗黄褐色を呈し，焼成は良好である。

13は浅鉢形土器の破片である。口縁部は，幅５㎜程度の面を有し，外反する頸部へと移行する。そして頸胴部の境で大きく屈曲し，外湾気味の胴部へとつながる。外面は，幅２～３㎜程度の原体によるミガキを施し仕上げている。頸・胴部の境には，胴部側より頸部方向へ，断面Ｕ字形の刻目をやや左傾気味に施している。内面も外面同様ミガキを施し仕上げており，光沢がある。胎土中には金母雲片，長石粒を含む。内外面ともに赤褐色を呈するが，外面の一部に黒班がある。

14は精製深鉢形土器の口縁部片で，口縁部は粘土を貼り付けて肥厚させている。内外面とも入念なナデが施され，口縁端面は二条のあらい沈線を引いたのち，ミガキを施して沈線をなかばつぶしている。２㎜以下の石英，長石粒を含み，黒褐色を呈する。

15は鉢形土器の胴部の破片である。外面は，頸部との境に沈線を引き，胴部には羽状縄文を施している。内面は非常にていねいなミガキを施しているため，光沢がある。上端はその形状から，粘土紐接合部で破損したものと考えられる。胎土中には雲母片，石英粒を含み，外面は暗灰色，内面は暗褐色を呈する。

16は鉢形土器の口縁部片である。口縁部はゆるやかに隆起させ，端部は断面三角形で稜が入るように仕上げている。外面はていねいなミガキを施し仕上げている。口縁部内側はＲＬ縄文を施し，隆起部には，半円形に沈線を引き，その中に刺突文を施している。その他の部分は，ミガキを施している。胎土中には，白雲母の微粒を多く含む。外面は黒褐色，内面は灰色を呈する。

17は，有文の深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。胴部と頸部の境はゆるい段をなし，胴部外面は，ＲＬの縄文を施し，そののち粗く部分的に縄文をナデ消している。頸部外面はヘラ状工具でナデを施しており，胴部と頸部の境付近の縄文が部分的に消されているのが目立つ。内面は，胴部の最も張る部分に炭化物が付着しておりその部位はナデ，それより下位は粗いミガキで，頸部も粗いミガキが施されている。全体的につくりは粗く仕上げられている。色調は外面赤褐色，内面黒褐色を呈し，１㎜以下の石英を含む。

以上11から17は，津雲Ａあるいは彦崎ＫＩ式と呼ばれる型式に属するものと考えられる。これらの資料の類例を求めれば，13については，広島県洗谷貝塚[(3)]，島根県タテチョウ遺跡[(4)]があげられる。12，17は，当地方においてしばしば見られる例と言える。[(2)]

18は有文の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁端部及び口縁内面上部にＬＲの縄文を施し，そののち内面に鋭い沈線を施している。内外面ともにミガキを施しており，胎土には0.5㎜以下の石英，３㎜以下の砂粒がみられる。色調は，内外面とも明黄褐色を呈する。

19は有文鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。頸胴部の境でくの字に屈曲し，胴

部へと続く。胴部上半には，横方向にＲＬ縄文を施した磨消縄文帯がめぐる。また胴部中ほどにも斜め方向に文様帯がめぐっていたようであるが，破片の端部に沈線がわずかに残っているだけで，文様帯の構成等は不明である。外面の無文部はナデ，内面はヘラミガキを施し仕上げている。内外面ともに暗褐色を呈し，焼成良好である。胎土中には，金雲母片，長石粒を含む。なお，この破片は頸胴部境の屈曲の度合いや，文様帯のあり方が，愛媛県平城貝塚の報告[5]において第一群とされた土器に近似しており，それら第一群の土器と近い時期の所産と考えられる。

20は有文の深鉢形土器の口縁部から頸部の破片で，頸部から口縁部にかけゆるく外反する。頸部は内外面とも横方向のミガキを施しており，内面，口縁部付近はナデを施している。口縁端部にはミガキののちＲＬの縄文を施している。色調は，外面は黄褐色，内面は暗褐色を呈する。胎土には，1㎜以下の石英・黒雲母を含む。

21は有文の鉢形土器の口縁部である。口縁部は丸く仕上げており，波状口縁状を呈するというよりも，ゆるい丘状突起をもつもののように思われるが，破片が小さいため定かではない。外面はＬＲの縄文を施し，そののち少なくとも四本の横位沈線を施している。口縁端はナデを施し，内面は，上部に横ナデののち下部に条痕を施している。胎土には1㎜以下の黒雲母がみられる。色調は外面暗褐色，内面黄褐色を呈する。

以上の18，19，20，21は，その特徴から，彦崎ＫⅡ（竹原）式に属するものと考えられる。

但し19については先述の通りである。17は笠岡市大殿洲遺跡[6]でも縄文を施したのち，沈線を加えずにすり消されている例がみられる。17の場合，すり消し方が雑で，頸部と胴部の境は明確な沈線をもって区画せず，ゆるやかな段をもって区画していることからも，新しい要素と考えられこの型式に入れた。21に類似した資料は，彦崎貝塚[7]においても出土している。

22は粗製無文の深鉢形土器の口縁部破片で，端部は尖りぎみに作られている。胴部には直径約8㎜の補修孔がみられ，外面から穿孔している。外面は左上がりの雑な条痕を施し，内面にはナデ，口縁端部もナデがみられる。胎土には1㎜以下の石英，1㎜程度の角閃石（？）がみられる。色調は，外面は暗黄褐色，内面は乳色を呈する。

23は無文の鉢形土器の口縁部破片である。口縁部はゆるやかに外反し，端部はやや肥厚しながら丸く仕上げられている。外面は凹凸をつぶすような横方向のミガキが施され，口縁部外反部には横方向ケズリがみられる。口縁端部はヘラ状工具でナデたようである。内面は横方向のミガキがみられる。胎土には1㎜以下の石英，3㎜以下の砂粒を含む。色調は外面が黄褐色，内面が淡灰色を呈する。

24は鉢形土器の底部であるが，内外面とも磨滅が著しい。外面は下から上へのケズリがみられ，内面調整はナデであろう。胎土には1㎜以下の石英がみられ，また1㎜～5㎜の砂粒を多量に含む。外面明黄褐色，内面暗褐色を呈する。

25は，鉢形土器の底部破片である。底部から斜め上方に立ち上る器壁は7㎜前後である。外

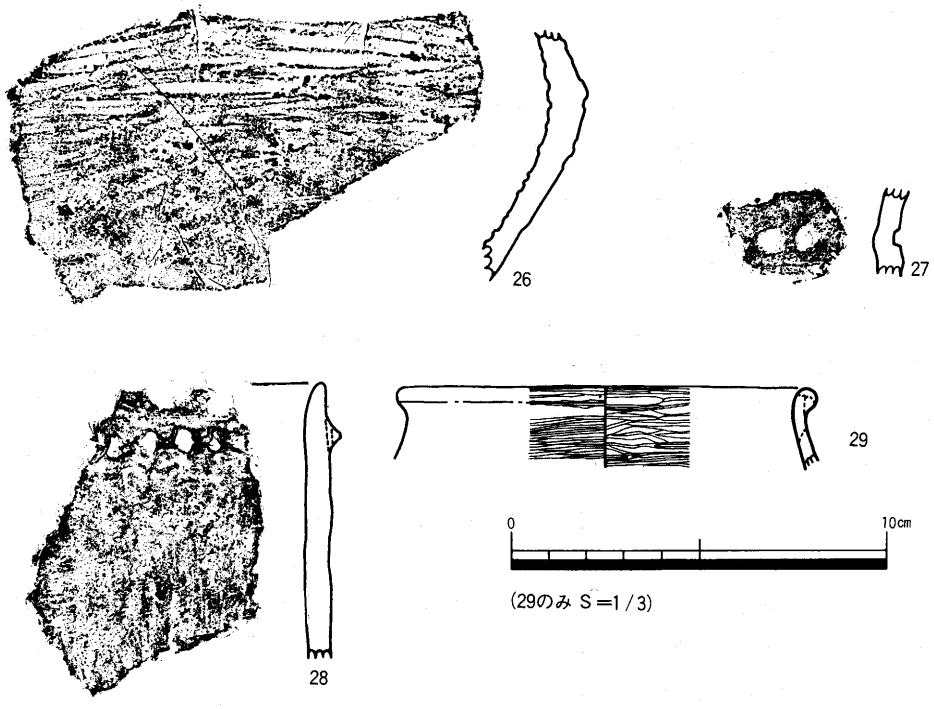



図18　縄 文 土 器 (3)

面は底部を指頭押圧によって成形したのちにあらいナデを施しており，内面は粗いミガキがみられる。胎土には１mm以下の黒雲母が目立つ。色調は外面黒褐色，内面暗～黒褐色を呈する。

26は，粗製の深鉢形土器の破片である。頸，胴部の境に相当すると思われる部分で屈曲する。外面は，屈曲部のやや下まで横方向に二枚貝（Ａ種）条痕を施し，以下はナデによる仕上げを行ったと思われる。内面も横方向に二枚貝（Ａ種）条痕を施し仕上げている。外面，内面ともに暗灰褐色を呈し，胎土中に，雲母片，長石粒を含む。

以上22～26はそのそれぞれの特徴から，後期の所産と考えられる。

27は，有文の深鉢形土器の頸部から胴部へ移行する部分の小破片である。外面には，横一列に右方向からの刺突文が施されており，そのため内面はコブ状に突出している。内外面とも横ナデがみられる。胎土には１mm以下の石英，２mm以下の砂粒がみられる。色調は外面灰白色，内面暗灰色を呈する。

28は深鉢形土器の口縁部破片である。この土器は，頸部と胴部との境に屈曲点をもつものではなく，口縁部からゆるやかに底部に至る形態をとるものと考えられる。口縁部はわずかに外反させて端部は尖りぎみに仕上げている。なお，口縁部の残存がよくないため，口縁部に刻み目があるかどうかは確認できない。口縁端部よりやや下った所には，断面三角形の突帯を貼りつけ，その上を棒状工具でていねいに押圧して刻み目を施している。外面はあらい縦方向のケ

ズリが施され，口縁部内面には横ナデが施されている。胎土には，３mm以下の石英がみられる。色調は外面黄褐色，内面暗褐色を呈し，外面には黒班がみられる。

29は壺形土器の口縁部破片と推定されるものであり，保存はきわめてよい。口縁は内傾して立ち上がり，粘土を貼りつけて丸く仕上げている。内外面ともに横方向のミガキが施されるが，内面の方がやや雑にみがかれている。器壁はうすく５～６mm，口径は17cmである。胎土には，２mm以下の石英，黒雲母を含む。色調は内外面とも暗黄褐色を呈し，ミガキのため光沢をもつ。焼成はきわめて良好である。

以上の27，28，29は，縄文晩期と考えられるものである。このうち，28は突帯その他の特徴から，晩期・黒土ＢⅡ式に属すると思われる。29については類例も少なく，現状で判断することは困難である。

以上１から29が本遺跡出縄文土器のうちの主なものである。この他に図19～25に掲載した資料があり，それらをあわせて整理した結果について簡単に触れておきたい。

まず出土資料の大半を占めるのが後期の土器である。そのうちでも中津式，津雲Ａ（彦崎ＫⅠ）式に属するものが多く，次いで彦崎ＫⅡ（竹原）式が多い。福田ＫⅡ式に属する例はほとんどなく，宮滝（福田ＫⅢ）式に属する例は出土していない。

後期に次いで出土資料の多いのが晩期であるが，後期に比べてはるかに少ない。先述の如く黒土ＢⅡ式に属する例は出土しているが，岩田式に属する例は出土していない。また，頸胴部の境にＤ字形の刺突文を施した例も出土しているが，細片であり所属型式を限定できない。その他前期に属する例が数片出土したが，早期，中期と考えられるものは出土しなかった。

註

(1) 沈線の太さについては，今村啓爾氏が中津式細分にあたり新古を表わす特徴の一つとして指摘され，泉拓良氏も同様のことを述べておられる。
今村啓爾「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』第63巻第２号　1977.
泉拓良「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』１　日本原始　小学館　1979

(2) 津雲Ａ式と彦崎ＫⅠ式の具体的な型式内容，相違点が明確でない為，両方の型式名を併用した。

(3) 『洗谷貝塚』　福山市教育委員会ほか　1976．49頁№179

(4) 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書－Ⅰ－』　島根県教育委員会　1979．17頁№21

(5) 鎌木義昌，西田栄「伊豫平城貝塚」『瀬戸内考古学』　創刊号　瀬戸内考古学会1957.

(6) 間壁忠彦，間壁葭子，藤田憲司「笠岡市大殿洲の縄文時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第12号　1976　87頁№15

(7) 池葉須藤樹「岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告」　1971

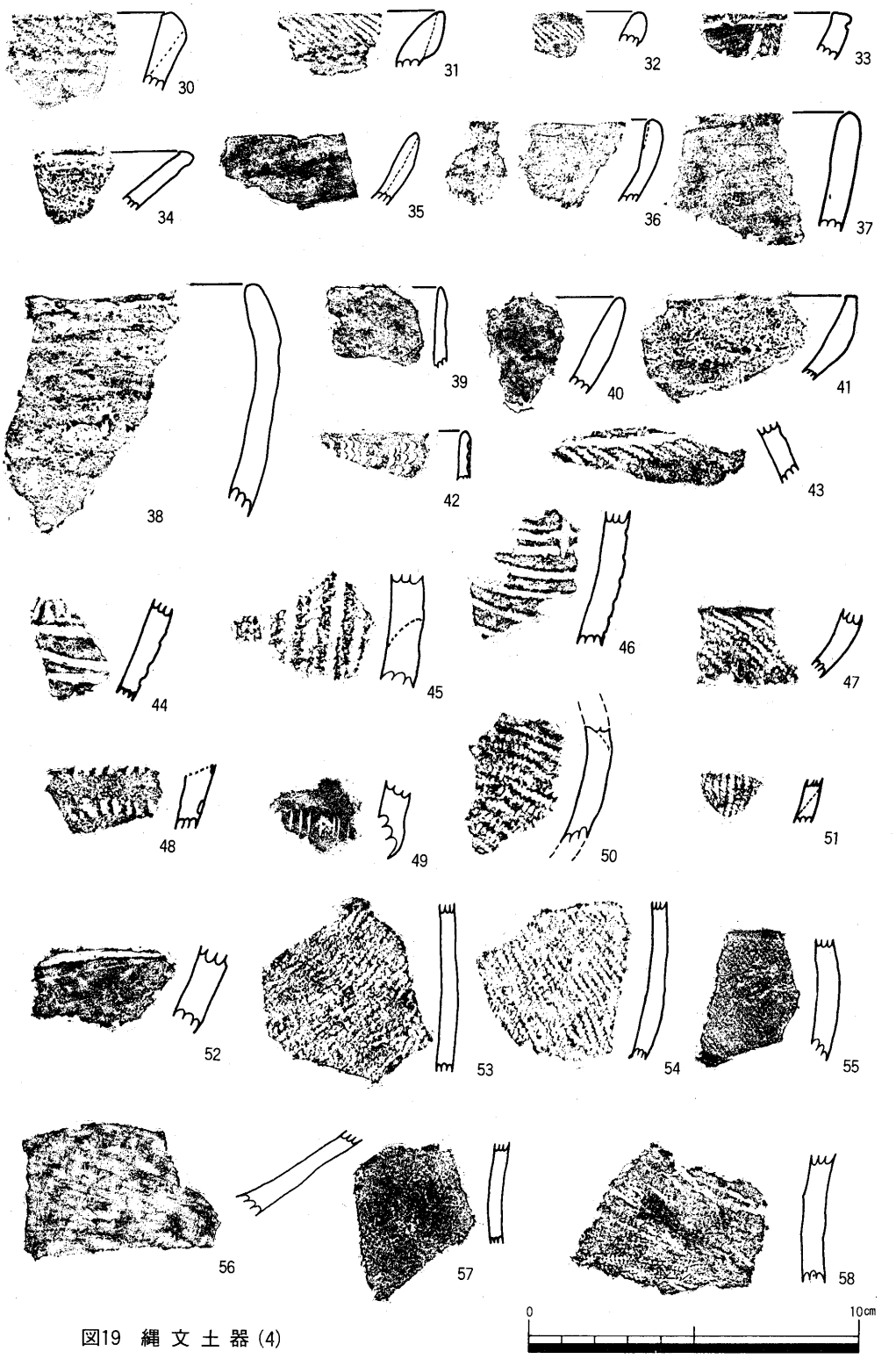

30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
10cm

図19　縄 文 土 器 (4)

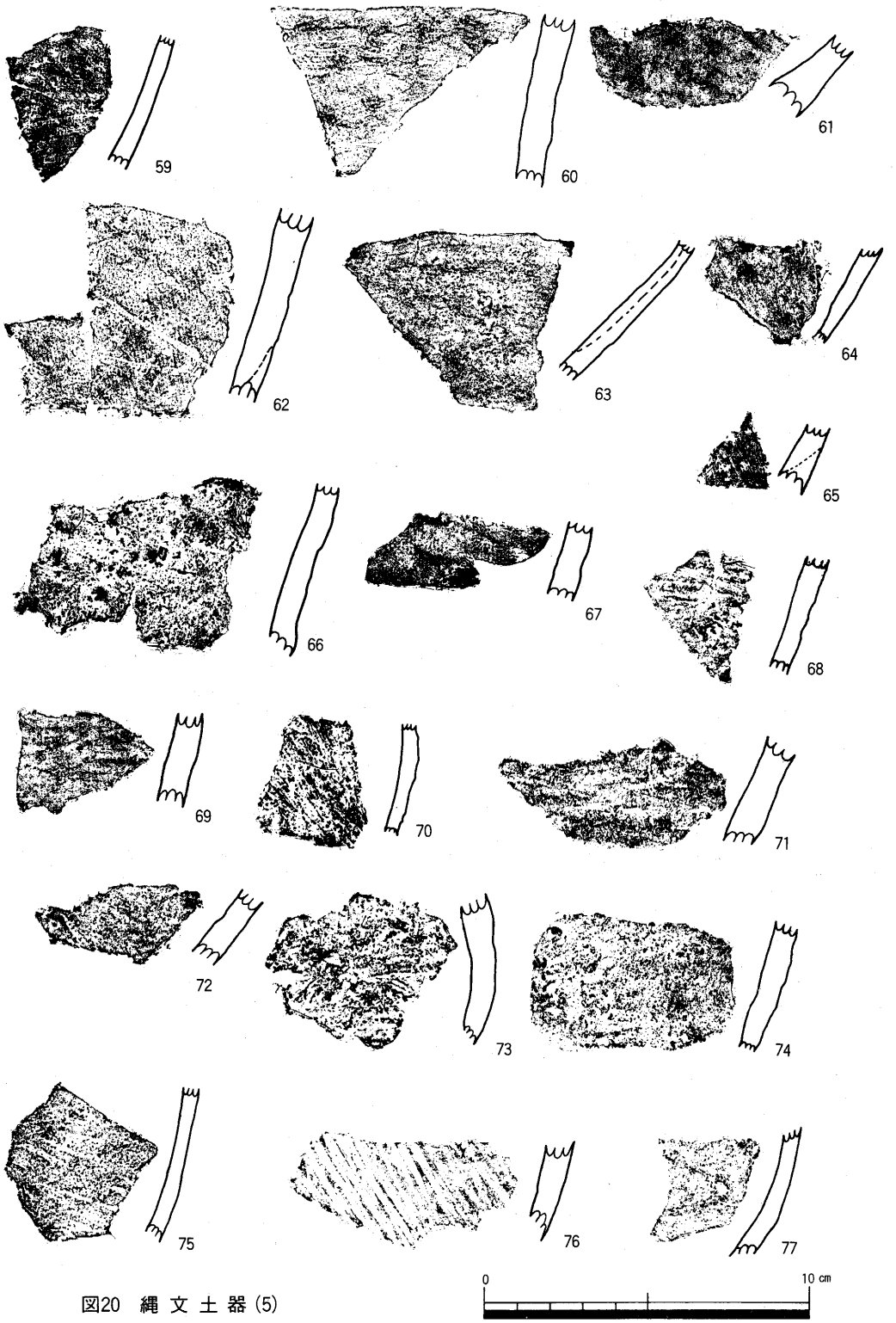



図20　縄 文 土 器 (5)

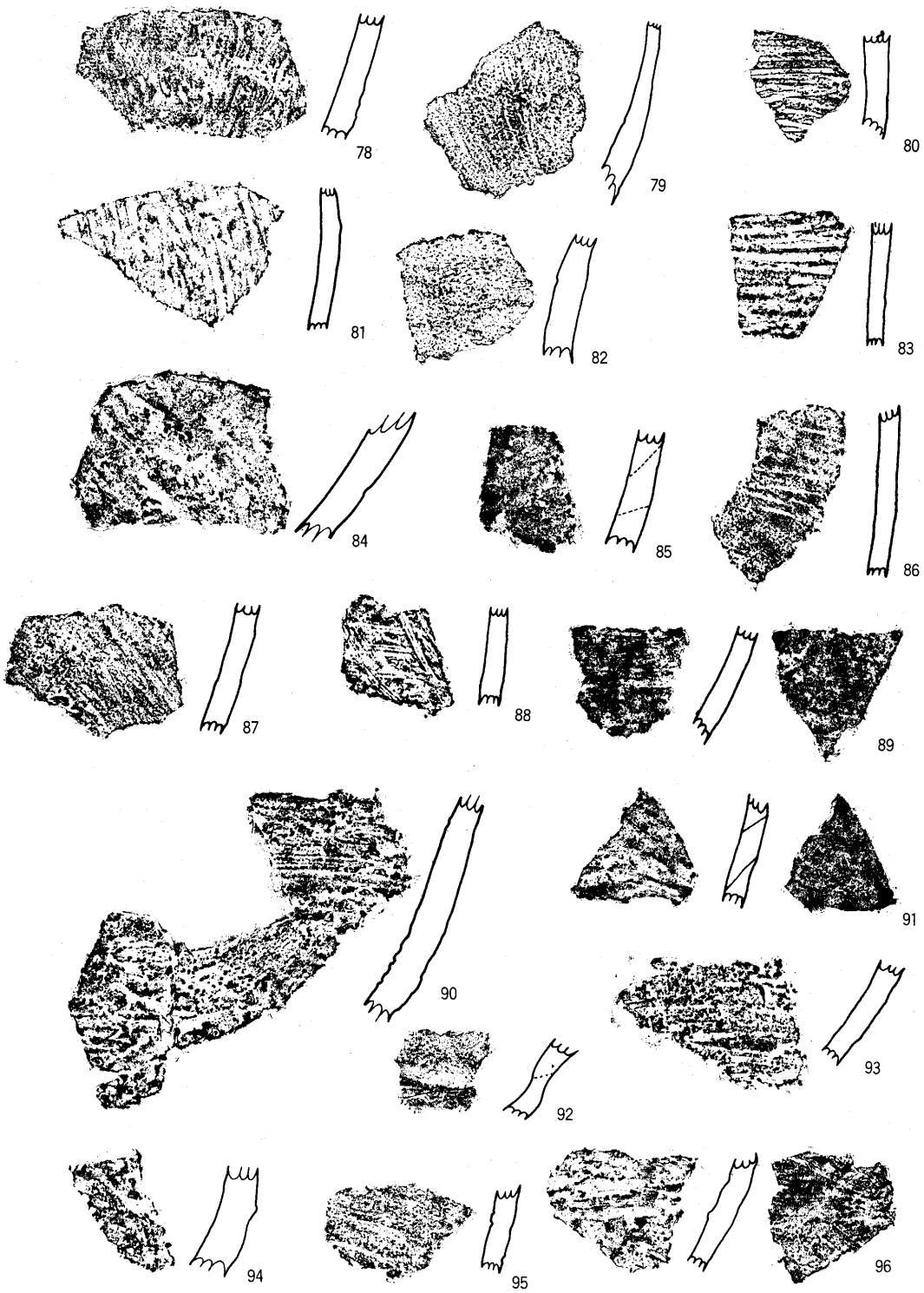



図21　縄 文 土 器 (6)

0　10 cm

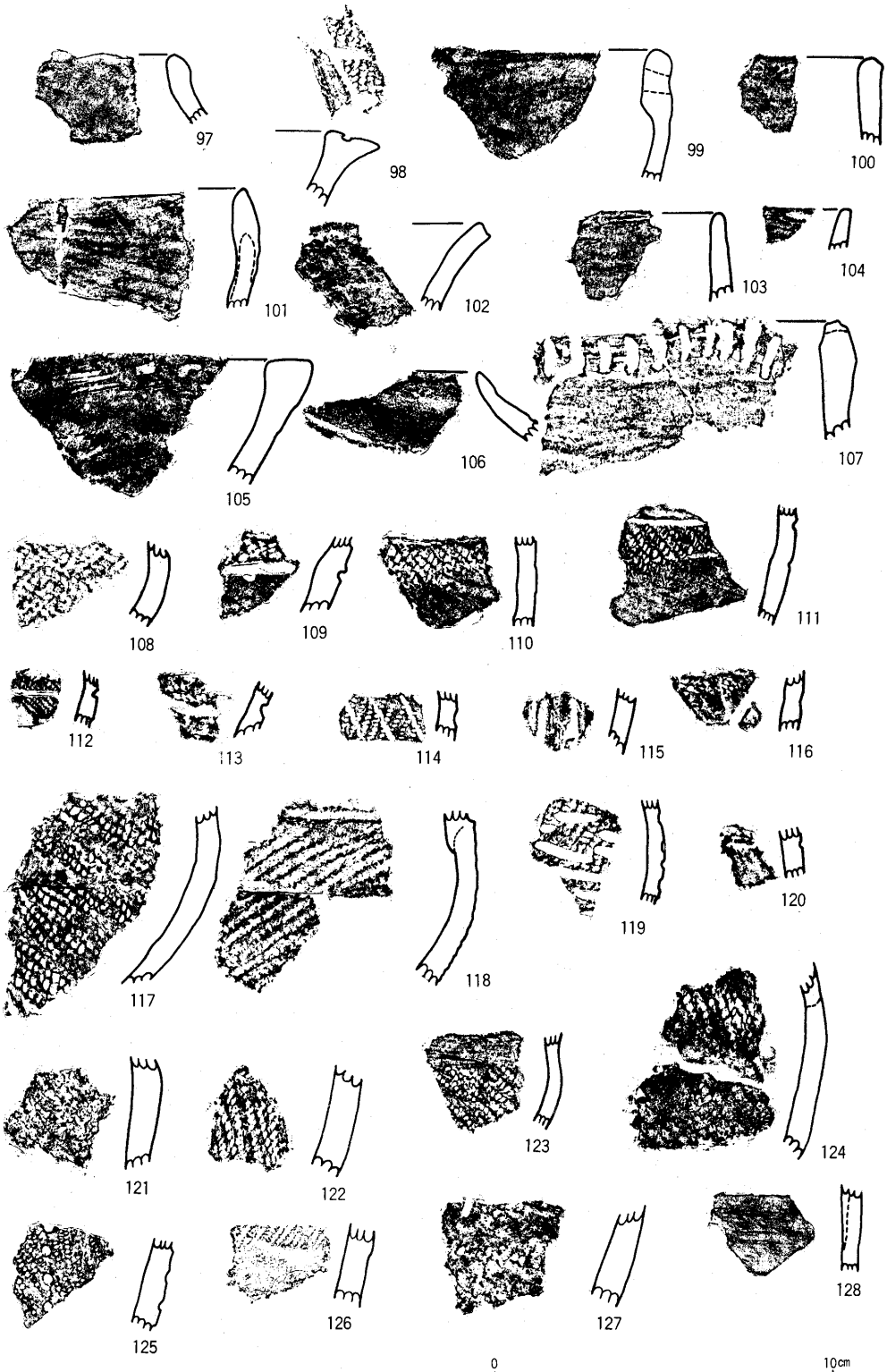

97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10cm

図22　縄 文 土 器 (7)

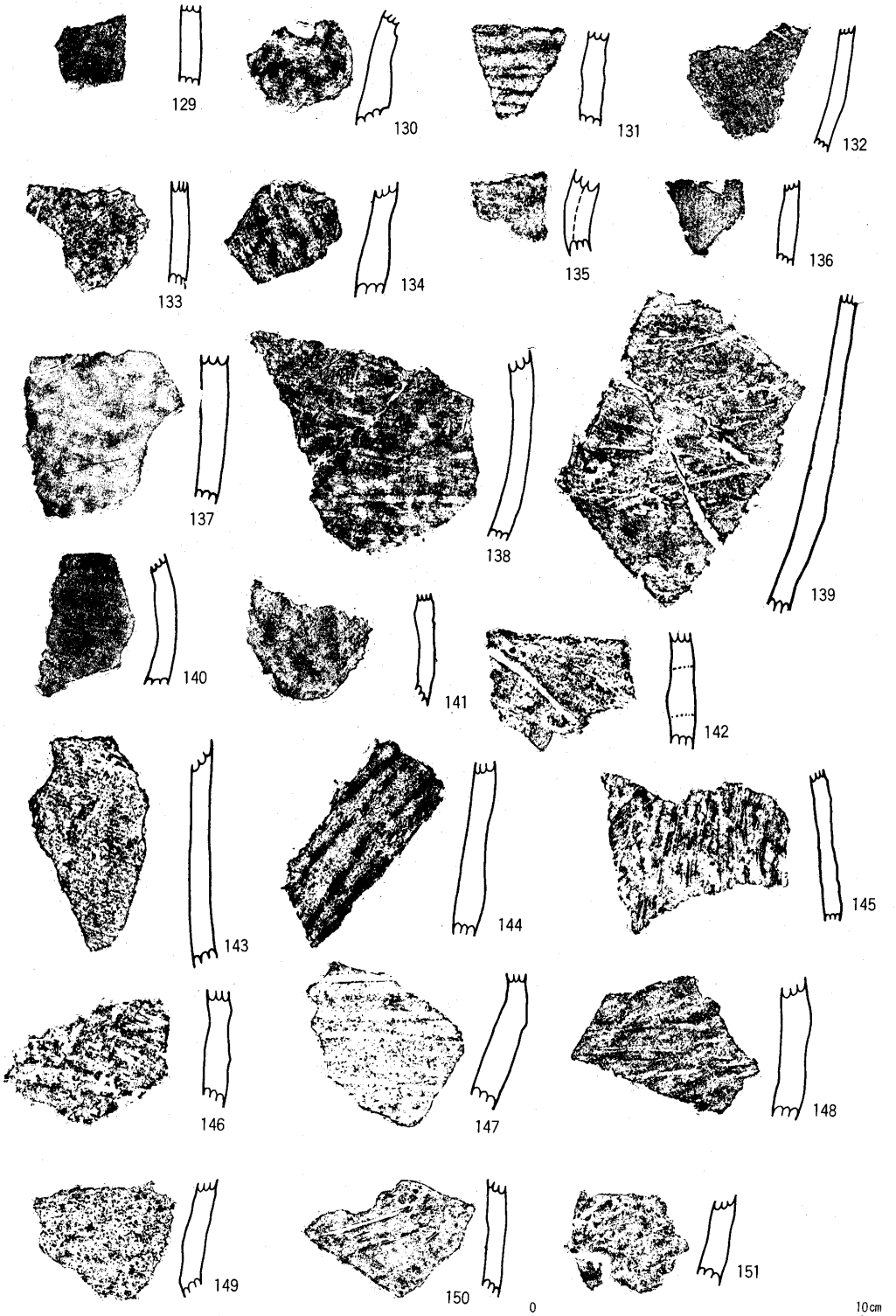

129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
0
10cm

図23　縄 文 土 器 (8)

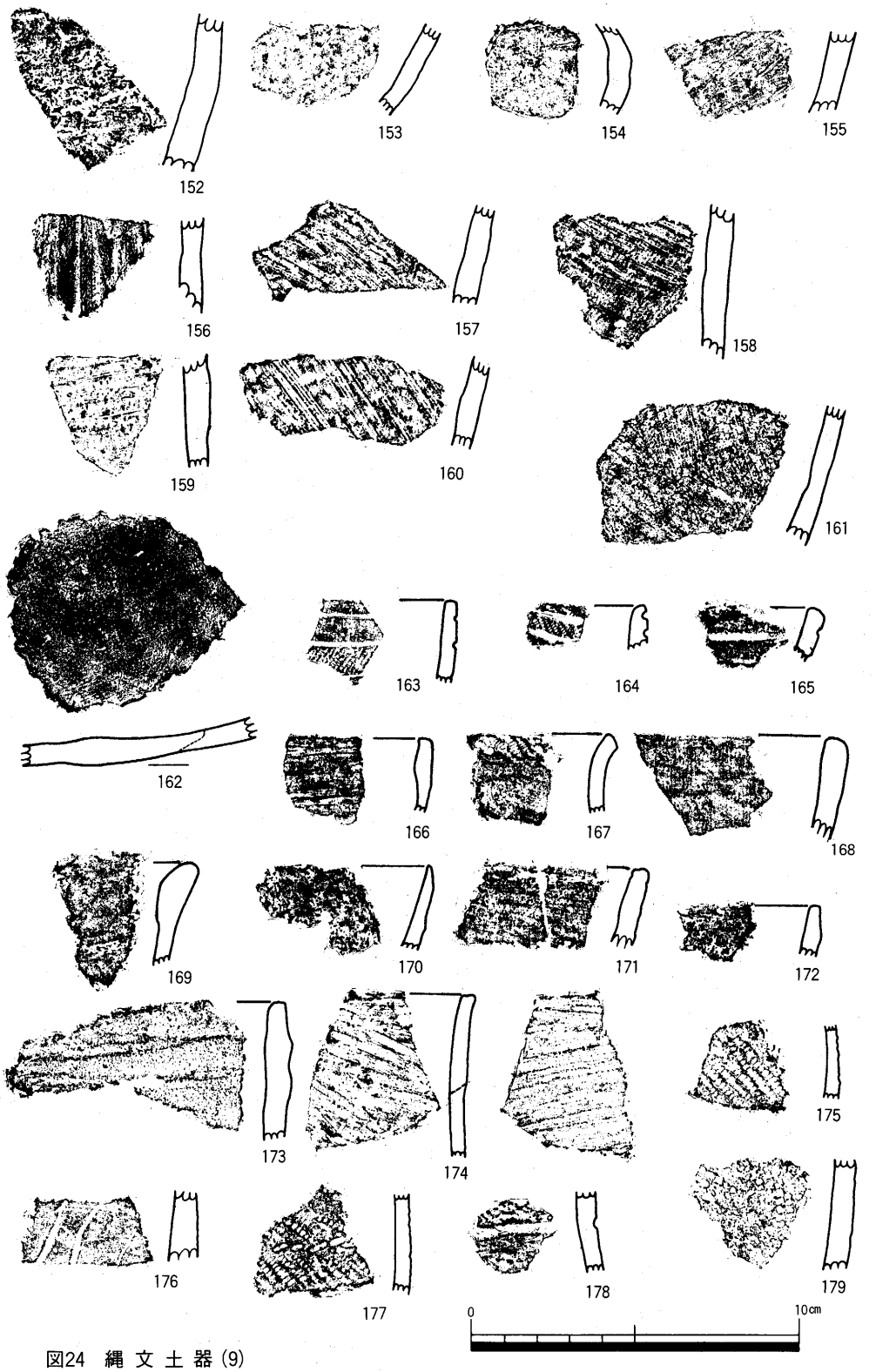

152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
10cm

図24　縄 文 土 器 (9)

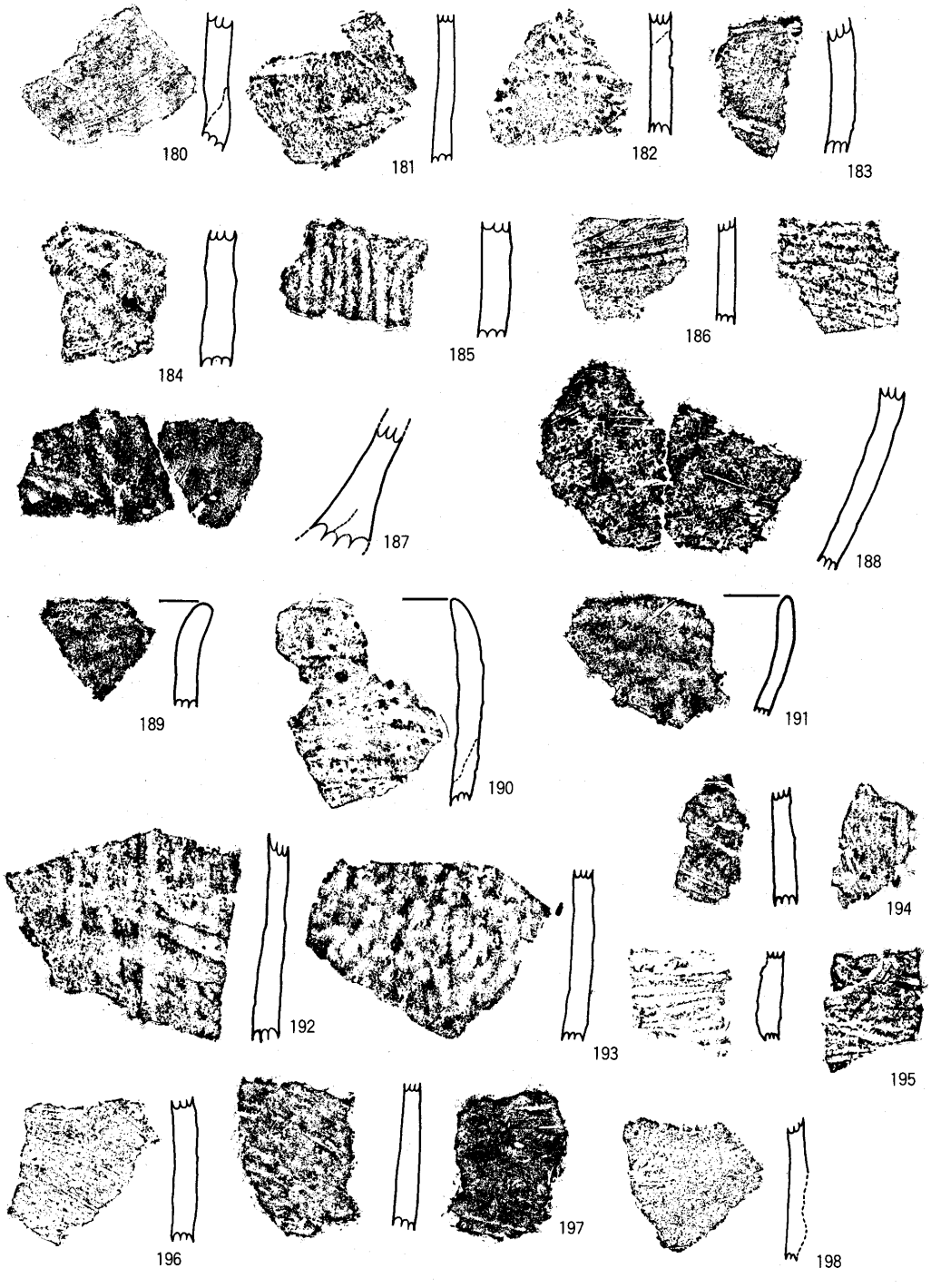



図25　縄 文 土 器 (10)

0　10cm

# 表2　土器観察表

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 30 | F－20 | 4mm以下の砂粒含む。 | 外－淡灰黒色<br>内－淡黄褐色 | 内外面とも横方向のミガキ。口縁部には（RL）の縄文が施してある。 | 口縁、黒班あり。 |
| 31 | F－20 | 2mm以下の砂粒含む。 | 外－灰黒色<br>内－淡灰黒色 | 口縁肥厚部にはRL縄文を施す。内面は粗いヘラミガキ。 | 口縁、竹原式。 |
| 32 | F－20 | 1mm以下の砂粒含む。 | 外－淡灰黒色<br>内－淡灰黒色 | 外－口縁下にナデ。口縁部に縄文（RL）<br>内－ミガキ。 | 口縁。 |
| 33 | F－16 | 1mm大の砂粒、(白雲母片等）含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－縄文を沈線で区画し、他の部分にミガキを施し消し去る。磨消縄文。<br>内－ヘラミガキ（原体幅2mm)。 | 口縁。 |
| 34 | G－17 | 1.5mm大の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－ミガキ。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 35 | F－20 | 1mm以下の黒雲母含む。 | 外－淡灰黒色<br>内－淡灰黒色 | 外－ミガキ。<br>内－ミガキ。 | 口縁。 |
| 36 | | 2mm以下の砂粒含む。1mm以下の石英少量含む。 | 外－灰黒色 | 外－横位の粗いミガキか？ | 口縁。 |
| 37 | F－20 | 2mm以下の石英、砂粒含む。 | 外－淡灰褐色<br>内－淡灰褐色 | 外－横位の粗いナデ。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 38 | G－17 | 4mm大の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－黄褐色 | 外－ナデ。<br>内－条痕ののちナデ。 | 口縁、石灰付着。 |
| 39 | F－20 | 2mm以下の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－淡褐色 | 外－横位の粗いナデ。<br>内－B種条痕。 | 口縁。 |
| 40 | F－18 | 2mm以下の砂粒含む。 | 外－暗黄褐色<br>内－赤褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 41 | G－17 | 1.5mm大の砂粒、金雲母片を含む。 | 外－暗灰色<br>内－暗灰色 | 外－ヨコナデ。<br>内－ヨコナデ。 | 口縁、石灰付着。 |
| 42 | G－17 | 砂粒ほとんど含まない．良質の粘土。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－D字形を呈する半截竹管の押し引きによる刺突文（三段)。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 43 | G－17 | 5mm大の砂粒含む。白雲母片含む。 | 外－暗黄褐色<br>内－赤褐色 | 外－横位沈線ののち縄文（RL）<br>内－ナデ。 | 石灰付着が著しい。 |
| 44 | F－18 | 1mm以下の黒雲母長石、石英含む。 | 外－暗黄褐色<br>内－明灰黒色 | 外－沈線ののちナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 45 | G－17 | 1.5mm大の砂粒含む。白雲母片を含む。 | 外－暗黄褐色<br>内－暗灰褐色 | 外－縄文（RL)。<br>内－ナデ。 | |
| 46 | F－18 | 1mm以下の砂粒含む。黒雲母含む。 | 外－赤褐色<br>内－明灰黒色 | 外－沈線（横方向ののち、縦の沈線を施している)。<br>内－ナデ。 | |
| 47 | F－20 | 2mm以下の砂粒(長石等）含む。 | 外－淡黄褐色<br>内－灰黒色 | 外－縄文（RL）ののち、ところどころにナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 48 | F－18 | ほとんど砂粒は見られない。 | 外－暗灰黒色<br>内－暗灰黒色 | 外－上段は右方向から、下段は押し引きによる刺突文。<br>内－ナデ。上部において、粘土帯のつぎ目で剝離。 | |
| 49 | F－16 | 1.5mm大の砂粒(長石、石英等)含む。 | 外－黄褐色<br>内－黄褐色 | 外－きざみ目。ナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 50 | G－17 | 1.5mm大の砂粒含む。白雲母片含む。 | 外－暗赤褐色<br>内－暗赤褐色 | 外－縄文（RL)。<br>内－ナデ。 | |
| 51 | F－18 | 1mm以下の石英．黒雲母含む。 | 外－赤褐色<br>内－灰黒色 | 外－縄文（RL)。<br>内－ミガキ。 | |
| 52 | F－20 | 5mm以下の石英含む。 | 外－淡灰褐色<br>内－赤褐色 | 外－沈線、その下部ナデ。<br>内－粗いナデ。 | |
| 53 | G－17 | 1mm大の砂粒（長石粒、雲母片等)含む。 | 外－黄褐色<br>内黄褐色 | 外－縄文（LR)。<br>内－横位のナデ。 | 焼成が極めて良好。 |
| 54 | G－17 | 2mm大の砂粒を含む。 | 外－暗灰褐色<br>内－暗褐色 | 外－縄文（RL)。<br>内－横位ナデ。 | |
| 55 | G－17 | 1mm大の砂粒（白雲母片等）含む。 | 外－黄褐色<br>内－灰褐色 | 外－研磨。<br>内－研磨。 | |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 56 | F－20 | 1mm以下の砂粒含む。 | 外－黄褐色<br>内－淡灰色～明黄褐色 | 外－ヘラミガキ（斜位）。<br>内－ヘラミガキ（斜位）。 | |
| 57 | G－17 | 2.5mm大の砂粒(白雲母片等）含む。 | 外－暗褐色<br>内－灰褐色 | 外－ナデ。<br>内－ヘラミガキ(？) | |
| 58 | F－18 | 3mm以下の砂粒含む。1mm以下の石英含む。 | 外－明灰黒色<br>内－淡黄乳色 | 外－条痕の後ナデ、下部には縄文（LR）。<br>内－荒いナデ。 | |
| 59 | F－16 | 1mm以下の微砂粒雲母片含む。 | 外－暗褐色<br>内－暗褐色 | 外－研磨。<br>内－研磨。 | |
| 60 | F－18 | 4mm以下の砂粒含む。1mm以下の石英含む。 | 外－灰黒色<br>内－明褐色 | 外－ミガキ。<br>内－ケズリののち、一部ミガキ。 | |
| 61 | F－18 | 2mm以下の砂粒含む。 | 外－明黄灰色<br>内－灰黒色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ、下部に指頭圧痕あり。 | 底部付近。 |
| 62 | F－18 | 5mm以下の砂粒含む。 | 外－明黄褐色～灰黒色<br>内－明黄褐色～灰黒色 | 外－ヘラケズリののちミガキ。<br>内－外面と同様。 | 黒斑あり。60と同一個体の可能性あり。 |
| 63 | F－20 | 1mm以下の長石．ほとんど砂粒はみられない。 | 外－明黄褐色～灰黒色<br>内－灰黒色 | 外－研磨。<br>内－研磨。 | |
| 64 | F－18 | 3mm以下の砂粒含む。 | 外－灰黒色<br>内－明黄褐色 | 外－縦方向のミガキ。<br>内－ナデののち粗いミガキ。 | |
| 65 | F－18 | 1～3mmの砂粒含む。 | 外－淡黒褐色<br>内－淡黄褐色 | 外－ヘラケズリ。<br>内－ヘラケズリののちミガキ。 | 60、62と同一個体の可能性あり。 |
| 66 | G－17 | 4mm大の砂粒。金雲母片含む。 | 外－暗褐色<br>内－暗褐色 | 外－粗いナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 67 | F－16 | 2mm大の砂粒。雲母片含む。 | 外－黄褐色<br>内－黒褐色 | 外－ミガキ。<br>内－ミガキ。 | |
| 68 | F－20 | 2mm以下の砂粒含む。 | 外－淡黄褐色<br>内－赤褐色 | 外－$C_2$種条痕ののちナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 69 | F－18 | 3mm以下の砂粒含む。2mm以下の石 | 外－暗赤褐色<br>内－黄褐色 | 外－粗いミガキ。<br>内－条痕ののちナデ、そののち粗いミガキ。 | |
| 70 | G－17 | 1mm大の砂粒、(金雲母片等）含む。 | 外－暗褐色<br>内－灰褐色 | 外－B種条痕<br>内－ナデ。 | |
| 71 | F－20 | 2mm以下の砂粒(石英等）を含む。 | 外－赤黄褐色<br>内－赤黄褐色 | 外－条痕ののちミガキ。<br>内－ナデ。 | |
| 72 | F－20 | 3mm以下の砂粒(石英等）を含む。 | 外－淡黄褐色<br>内－赤褐色 | 外－ナデ（粗い）。<br>内－ナデ。 | |
| 73 | G－17 | 1mm大の砂粒含む。白雲母片含む。 | 外－黄褐色<br>内－暗黄褐色 | 外－粗いナデ。<br>内－ナデ。 | 接合。 |
| 74 | F－16 | 1mm大の砂粒．石英、長石含む。 | 外－黄褐色<br>内－黒色 | 外－A種条痕。<br>内－A種条痕。 | |
| 75 | G－17 | 1mm以下の砂粒．雲母片、石英粒含む。 | 外－暗赤褐色<br>内－暗褐色 | 外－A種条痕ののちミガキ（？）。<br>内－ナデ。 | 保存状態良好。 |
| 76 | F－18 | 4mm以下の石英．長石含む。 | 外－淡黒褐色<br>内－淡黄褐色 | 外－A種条痕。<br>内－ナデ。 | |
| 77 | F－20 | 5mm以下の砂粒．1mm以下の石英含む。 | 外－赤褐色<br>内－赤褐色 | 外－右上り斜位のケズリ。<br>内－ナデ。 | |
| 78 | F－18 | 5mm以下の砂粒含む。2mm以下の石英含む。 | 外－淡黄褐色<br>内－淡明灰色 | 外－B種条痕ののちナデ。<br>内－B種条痕ののちナデ。 | |
| 79 | G－17 | 1mm程度の砂粒．(金雲母片等)含む。 | 外－黒褐色<br>内－暗褐色 | 外－A種条痕ののちナデ。<br>内－A種条痕ののちナデ。 | |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 80 | G－17 | 2mm大の砂粒含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰褐色 | 外－A種条痕。<br>内－A種条痕ののち部分的に指ケズリ。 | |
| 81 | G－17 | 2mm大の砂粒.(金雲母片等)含む。 | 外－黄褐色<br>内－暗褐色 | 外－B種条痕。<br>内－ナデ。 | |
| 82 | G－17 | 1.5mm大の砂粒を含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－ナデののち部分的にC種条痕。<br>内－$C_2$種条痕。 | |
| 83 | G－17 | 1mm大の砂粒.(白雲母片等)含む。 | 外－暗褐色<br>内－赤褐色 | 外－B種条痕。<br>内－$C_1$種条痕。 | |
| 84 | F－20 | 3mm以下の砂粒.<br>2mm以下の石英.長石含む。 | 外－明黄褐色<br>内－明黄褐色 | 外－粗いナデ. 指ケズリ。<br>内－ナデ。 | |
| 85 | F－18 | 3mm以下の砂粒.<br>1mm以下の石英.黒雲母片等含む。 | 外－黄灰色<br>内－明灰黒色 | 外－ケズリ。<br>内－ナデ。 | |
| 86 | G－17 | 2mm大の砂粒.(白雲母片等)含む。 | 外－黄褐色<br>内－灰褐色 | 外－A種条痕ののちナデ。<br>内－ミガキ。 | |
| 87 | F－20 | 2mm以下の砂粒(石英、黒雲母等)含む。 | 外－淡黄褐色<br>内－淡灰黒色 | 外－$C_2$種条痕。<br>内－ナデ。 | |
| 88 | G－17 | 1.5mm大の砂粒含む。 | 外－黄褐色<br>内－黒褐色 | 外－$B_2$種条痕（横方向ののち斜め方向)。<br>内－粗いミガキ。 | |
| 89 | F－20 | 2mm以下の砂粒(石英等）含む。 | 外－灰黒色<br>内－灰黒色 | 外－ナデ。<br>内－$C_1$種条痕。 | |
| 90 | F－20 | 2mm以下の砂粒(石英等）含む。 | 外－赤褐色<br>内－灰黒色 | 外－粗いナデを施し、部分的にA種. $C_1$種条痕を加える。<br>内－A種条痕ののち、$C_2$種条痕。 | 内面下部には炭化物付着。 |
| 91 | F－20 | 2mm以下の砂粒(石英等）含む。 | 外－赤褐色<br>内－明灰黒色 | 外－粒いナデ。<br>内－$C_2$種条痕。 | |
| 92 | F－20 | 3mm以下の砂粒(石英等）含む。 | 外－黄褐色<br>内－不明 | 外－ヘラミガキ。<br>内－ヘラミガキ。 | 黒班あり。 |
| 93 | G－17 | 1mm大の砂粒（金雲母片）含む。 | 外－暗赤褐色<br>内－赤褐色 | 外－粗いナデ。<br>内－ナデ。 | 黒班あり。 |
| 94 | G－17 | 2mm大の砂粒（金雲母片）含む。 | 外－黄褐色<br>内－黄褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 95 | F－18 | 2mm以下の砂粒(石英等）含む。 | 外－黒褐色<br>内－明黄褐色 | 外－条痕。<br>内－不明。 | |
| 96 | F－20 | 3mm以下の砂粒含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰褐色 | 外－$C_1$種条痕。<br>内－$C_1$種条痕。 | |
| 97 | I－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 口縁端部にわずかにミガキの痕跡が認められるが、保存不良の為、他の部分は調整不明。 | 口縁。 |
| 98 | I－13 | 2～3mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>口縁端部内－淡褐色 | 口縁端面－縄文（RL）を施した後、沈線を施し、磨消縄文帯をなす。無文部はミガキを施す。<br>外－条痕ののち、粗いナデ。<br>内－横位のナデ。 | 口縁。 |
| 99 | H－13 | 1mm以下の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－暗褐色 | 外面及び口縁端部－ミガキ。<br>内－肥厚部はミガキ、その下部はナデ。<br>破片左端、肥厚部中ほどに、径6mm弱の焼成前穿孔がある。 | 口縁。 |
| 100 | H－13 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－淡暗褐色<br>内－淡褐色 | 口縁端部－横位のヘラミガキ。<br>外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | 口縁。 |
| 101 | I－14 | 3～5mm程度の砂粒含む。 | 外－明褐色<br>内－明褐色 | 外－B種条痕ののちナデ。<br>内－粗いナデ、部分的にミガキ。 | 口縁（波状)。 |
| 102 | H－13 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－明褐色<br>内－明褐色 | 外－部分的に粗いナデ。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 103 | I－14 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－粗いミガキ。<br>内－粗いミガキ。 | 口縁。 |
| 104 | I－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－横位のB種条痕（？)。<br>内－横位のナデ。 | 口縁。 |
| 105 | I－14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－灰黄色<br>内－灰黄色 | 外－ミガキ。<br>内－ミガキ。 | 口縁。 |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 106 | H－14 | 2mm程度の砂粒(長石、雲母、石英等)含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | 口縁。 |
| 107 | H－14 | 2～3mmの砂粒(石英等)含む。 | 外－褐色<br>内－明褐色 | 口縁端部－$C_1$種条痕による調整を行ったのち、上方から刻目を施す。<br>外－ナデ。<br>内－横の$C_2$種条痕、のち粗いナデ。 | (I－14と接合。<br>口縁。) |
| 108 | H－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－縄文（RL）ののち、上部へラミガキ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 109 | H－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－灰褐色 | 外－縄文（RL）ののち、沈線を施し、さらに下半部へラミガキ。<br>内－横位へラミガキ。 | |
| 110 | I－14 | 1mm以下の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－横位のナデ、沈線ののち、縄文（RL）を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 111 | H－13 | 2～3mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－暗褐色 | 外－へラミガキののち、沈線を施し、そののち縄文（RL）を施す。<br>内－横位の$C_2$種条痕、そののち一部をナデ消している。 | |
| 112 | H・I－13・14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－横位の平行沈線を施したのち、縄文（RL）を施す。<br>内－横位のへラミガキ。 | |
| 113 | H－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－縄文（RL）ののち、沈線を施す。<br>内－ナデ。 | |
| 114 | H－13 | 1mm程度の砂粒(雲母等)含む。 | 外－明褐色<br>内－褐色 | 外－左上りの斜位の平行沈線を施したのち、縄文（RL）を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 115 | H－14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－灰黄色<br>内－灰色 | 外－右上りのA種条痕。<br>内－横位の条痕。 | |
| 116 | I－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－横位のナデを施したのち、縦位の沈線を施し、そののち、縄文（RL）を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 117 | I－13 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）。<br>内－破片上部に横位へラミガキ、そののち下部横位のナデ。 | |
| 118 | H・I－13・14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰褐色 | 外－縄文（LR）ののち、沈線を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 119 | I－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）ののち、短い沈線を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 120 | H・I－13・14 | 1mm以下の細砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－斜方のB種条痕ののち、沈線を施す。<br>内－横位のナデ。 | |
| 121 | I－14 | 1mm以下の砂粒を多量に含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒色 | 外－やや乱雑な縄文（RL）。<br>内－横位のナデ。 | |
| 122 | H－14 | 2mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－明黄褐色<br>内－明褐色 | 外－縄文（RL）。<br>内－ナデ。 | |
| 123 | I－14 | 1mm以下の砂粒を少量含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－粗いミガキを施したのち、縄文（RL）を施す。<br>内－粗いミガキ。 | |
| 124 | I－14 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）。<br>内－横位のナデ。 | |
| 125 | I－14 | 1～2mmの砂粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－灰白色 | 外－縄文（RL）を施したのち、径3mm程度の円形刺突文を縦に並べて施す。<br>内－上方には横位のミガキ。 | |
| 126 | I－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－黒色 | 外－上方には、縄文（LR）を施し、下半部はナデを施す。<br>内－横位のへラミガキ。 | |
| 127 | I－14 | 1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）。<br>内－ナデ。 | 外－石灰の付着。<br>内－炭化物の付着。 |
| 128 | H－14 | 2mm以下の砂粒(雲母等)含む。 | 外－淡黄灰褐色<br>内－淡黄褐色 | 外－ミガキ。<br>内－ミガキ。 | |
| 129 | H－14 | 1～2mm程度の砂粒（金雲母片等）含む。 | 外－暗褐色<br>内－暗褐色 | 外－横位のへラミガキ。<br>内－横位のへラミガキ。 | |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 130 | Ⅰ－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－ヘラミガキ及び、二条の沈線。<br>内－横位のヘラミガキ。 | |
| 131 | Ⅰ表採 | 1mm程度の砂粒(石英、長石、雲母)含む。 | 外－褐色<br>内－明褐色 | 外－横位の軽いナデに近い。<br>内－横位のナデ。 | |
| 132 | Ⅰ－14 | 1mm程度の砂粒(石英、雲母等)含む。 | 外－暗褐色<br>内－黒色 | 外－横位のミガキ。<br>内－横位のミガキ。 | |
| 133 | Ⅰ－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－黒色 | 外－横位のナデ。<br>内－ヘラミガキののち、横位のナデ。 | |
| 134 | Ⅰ－14 | 4～5mm程度の砂粒を少量含む。 | 外－明黄褐色<br>内－明黄褐色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 135 | Ⅰ－14 | 2mm以下の砂粒(雲母等) 含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰黒色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 136 | Ⅰ－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－褐色 | 外－横位のヘラミガキ。<br>内－横位のヘラミガキ。 | |
| 137 | Ⅰ－14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－明褐色 | 外－ミガキ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 138 | Ⅰ－14 | 2～3mm程度の砂粒少量、1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰褐色 | 外－横位のA種条痕を施した後、ナデ消している。<br>内－横位のミガキ。 | |
| 139 | Ⅰ－14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－斜位の粗いナデののち、部分的にミガキ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 140 | Ⅰ－14 | 1mm程度の砂粒(長石等) 含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 内外面ともに、横位のヘラミガキ、内は外に比べ粗い。 | 黒班あり。 |
| 141 | H－13 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－暗灰色<br>内－淡褐色 | 外－粒いナデ仕上げのまま。<br>内－横位のA種条痕、のちナデ。 | |
| 142 | H－14 | 2～3mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－左上り斜位の軽いケズリ。<br>内－ナデ（？)。 | |
| 143 | Ⅰ－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－赤褐色<br>内－赤褐色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | 内面は石灰の付着が著しい。 |
| 144 | Ⅰ－13 | 1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－暗褐色<br>内－明褐色 | 外－斜位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 145 | H・Ⅰ－13・14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－明褐色<br>内－暗褐色 | 外－縦位のB種条痕。<br>内－横位のナデ。 | |
| 146 | Ⅰ－14 | 3～4mm程度の砂粒少量と1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－暗褐色<br>内－淡明褐色 | 外－横位のケズリ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 147 | Ⅰ－13 | 1～2mm程度の砂粒（石英、長石、雲母等）含む。 | 外－灰黄色<br>内－暗黒色 | 外－ナデ。<br>内－横位のB種条痕。 | |
| 148 | Ⅰ－13 | 1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－灰褐色<br>内－灰褐色 | 外－左上りの斜位のミガキ。<br>内－ナデ。 | |
| 149 | H－13 | 2mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－暗褐色<br>内－褐色 | 外－横位の粗いナデ。<br>内－不明。 | |
| 150 | H－13 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－暗褐色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 151 | Ⅰ－14 | 2mm程度の砂粒(長石等) 含む。 | 外－褐色<br>内－赤褐色 | 外－横位のナデ、指頭圧痕（指紋）が観察できる。<br>内－横位のナデ。 | |
| 152 | Ⅰ－14 | 2mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－明褐色<br>内－明褐色 | 外－横位の粗いナデ。<br>内－横位のナデ。 | |
| 153 | H－14W | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－褐色 | 外－横位のナデ。<br>内－ヘラミガキ状の単位をもつB種条痕。 | |
| 154 | Ⅰ－14 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－灰黄色<br>内－淡赤褐色 | 外－不明。<br>内－横位のナデ。 | 外面磨滅が著しく観察不能。 |
| 155 | Ⅰ－14 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－褐色<br>内－黒色 | 外－横位の$C_2$種条痕。<br>内－ナデ（？)。 | 内面炭化物付着の為観察不能。 |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 156 | I－13 | 1mm程度の砂粒(長石、石英、雲母等)含む。 | 外－赤褐色<br>内－黒色 | 外－縦位のB種条痕。<br>内－横位のB種条痕。 | |
| 157 | I－14 | 1mm程度の砂粒(黒雲母等) 含む。 | 外－灰白色<br>内－灰白色 | 外－左上りの斜位の$C_2$種条痕。<br>内－横位のミガキ。 | |
| 158 | I－14 | 3～4mm程度の砂粒少量と、1～2mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－赤褐色<br>内－赤褐色 | 外－横位の$C_2$種条痕に近い。<br>内－横位のB種条痕。 | |
| 159 | | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－明褐色<br>内－黒褐色 | 外－縦位のB種条痕。<br>内－横位のナデ。 | |
| 160 | I－14 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－明黄褐色<br>内－灰黄色 | 外－斜めの$C_1$種条痕。<br>内－縦位の$C_1$種条痕。 | |
| 161 | I－14 | 1mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－明褐色<br>内－灰白色 | 外－左上りの斜位の$C_2$種条痕、のち縦位の$C_2$種条痕を施す。<br>内－斜位のB種条痕．のち横位のB種条痕を施す。 | |
| 162 | I－14 | 1mm程度の砂粒(長石、雲母等)含む。 | 外－暗褐色<br>内－暗褐色 | 外－ヘラミガキ。<br>内－ヘラミガキ。 | |
| 163 | F－11 | 0.3mm以下の砂粒含む。 | 外－暗灰色<br>内－暗灰色 | 外－口縁部より4mm、7mm、8mmの間隔で横方向に三本の沈線が入り、縄文（LR）帯、無文帯が交互にめぐる。<br>口縁－ミガキ。<br>内－ミガキ。 | |
| 164 | F－12 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）ののち4mm幅の平行な沈線が横方向に入る。<br>内－ミガキ。 | 口縁。<br>外面の縄文内にベンガラ付着。 |
| 165 | G－11 | 0.5mm程度の砂粒と1mm程度の石英含む。 | 外－淡褐色<br>内－淡褐色 | 外－ナデののち、約7mm幅の横方向の沈線が2本はしる。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 166 | F－11 | 1mm以下の砂粒と0.1mm程度の雲母片含む。 | 外－黒色<br>内－黒色 | 外－$C_1$種条痕ののちナデ。<br>内－$C_1$種条痕ののちナデ。<br>口縁－おそらくB種条痕ののちナデ。 | 口縁。<br>口縁部に石灰付着。 |
| 167 | G－12 | 0.1～0.5mmの砂粒（雲母片）含む。 | 外－赤褐色<br>内－赤褐色 | 外－端部に縄文（RL）を施す。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 168 | F－12 | 1mm程度の砂粒(黒雲母片）含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－ミガキ。<br>内－ミガキ。<br>口縁－ミガキ。 | 口縁。<br>約1cm幅粘土紐を接合している様子 |
| 169 | G－12 | 0.5mm程度の砂粒と0.1mm程度の雲母片含む。 | 外－淡褐色<br>内－淡褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | 口縁。 |
| 170 | F－11 | 1～2mm程度の砂粒と、0.1mm程度の雲母片含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。<br>口縁－ナデ。 | 口縁。<br>F11－133 } 接合<br>G12－W5 } 接合 |
| 171 | F－11 | 1～2mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－条痕（種別不明）ののちナデ。<br>内－ナデ。 | 口縁。<br>F11－38 } 接合<br>F11－41 } 接合 |
| 172 | F－12 | 1mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－暗褐色 | 外－ナデ。<br>内－B種条痕。<br>口縁－B種条痕。 | 口縁。 |
| 173 | 表採 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－淡褐色<br>内－灰黄色 | 外－横位のナデ。<br>内－横位のナデ。 | 口縁。 |
| 174 | F－12 | 1mm程度の石英粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－明褐色 | 外－B種条痕（左上－左下)。<br>内－B種条痕（右上－左下)。 | 口縁。 |
| 175 | F－11 | 0.5mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－縄文（RL)。<br>内－ミガキ。 | |
| 176 | F－11 | 1mm程度の砂粒(石英等）含む。 | 外－赤褐色<br>内－暗褐色 | 外－ナデののち沈線（右上－左下）が3本ほぼ平行に入る間隔は左側が約6mm、右側は14mm。<br>内－ナデ。 | |

| 挿図番号 | 出土グリッド | 胎土 | 色調 | 調整 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 177 | F－11 | 0.5～1mmの砂粒含む。 | 外－暗褐色<br>内－黒色 | 外－縄文（RL）に結び目を作って施文。<br>内－ヘラミガキ。 | 写真。 |
| 178 | G－11 | | 外－<br>内－ | 外－B種条痕ののち沈線を施し、軽くナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 179 | F－11 | 0.5mm程度の砂粒含む。 | 外－赤褐色<br>内－暗褐色 | 外－ナデののち縄文（RL）。<br>内－ナデ。 | |
| 180 | G－11 | 1～2mm程度の砂粒(0.1mm程度雲母片）含む。<br>（石英粒も含んでいるもよう） | 外－暗灰色<br>内－暗灰色 | 外－不明。<br>内－ナデ。 | 外面に石灰付着著しい。<br>G11－20<br>G11－12 接合 |
| 181 | F－11 | 2mm以下の砂粒(石英、雲母片等）含む。 | 外－褐色<br>内－暗灰色 | 外－粗いナデ。<br>内－ナデ（左上－右下)。 | F11－34<br>F12－30 接合 |
| 182 | F－12 | 1mm程度の砂粒(雲母片等）含む。 | 外－灰褐色<br>内－暗褐色 | 外－ケズリのちナデ。<br>内－ナデ。 | 外面に石灰付着。 |
| 183 | G－12 | 1mm程度の砂粒(金雲母片等）含む。 | 外－褐色<br>内－灰白色(?) | 外－ケズリ（右→左）ののち部分的にタテナデ。<br>内－不明。 | 内面に石灰の付着著しい。 |
| 184 | 表採 | 1.5mm程度の砂粒含む。 | 外－灰白色<br>内－灰白色 | | 石灰付着の為、観察不能。 |
| 185 | 表採 | 2mm程度の砂粒含む。 | 外－赤褐色<br>内－灰黒色 | 外－縦方向の条痕。<br>内－横位のナデ。 | |
| 186 | F－11 | 0.5～1mm程度の砂粒（0.1mm程度の雲母片）含む。 | 外－暗灰色<br>内－褐色 | 外－横方向のB種条痕ののち下半部に左上から右下への同じ原体によるB種条痕。<br>内－横方向のB種条痕ののち上半部の一部に右上から左下への同じ原体によるB種条痕。 | 内外面とも同じ原体による。 |
| 187 | F－12 | 1～2mm程度の砂粒と、雲母片含む。 | 外－上部は暗褐色で下部は淡褐色<br>内－暗褐色 | 外－縦方向と思われるミガキ．一部に指頭圧痕と思われるものがある。<br>内－ナデ。 | 底部片。<br>F12－53<br>F12－44 接合 |
| 188 | 表採 | 2mm程度の砂粒を多量に含む。 | 外－灰白色<br>内－灰黒色 | 外－横位の軽いケズリ。<br>内－横位のナデ。 | 繊維土器の可能性あり。 |
| 189 | F－9 | 1mm前後の砂粒含む。 | 外－灰白色<br>内－灰白色 | 外－横ナデ。<br>内－横ナデ。 | |
| 190 | F－10 | 2～3mm程度の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－褐色 | 外－整形は粗く、幅11mm程度のものでナデている。<br>内－ナデ。 | F10－12<br>F10－14 接合 |
| 191 | E－21 | 0.5～1mm程度の粒含む。 | 外－灰黄色<br>内－灰黄色 | 外－様のA種条痕、のちナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 192 | F－9 | 1mm未満の砂粒む。（雲母あり） | 外－褐色<br>内－淡褐色 | 外－7mm幅のナデ。<br>内－ナデ。 | F9－15<br>F9－16 接合 |
| 193 | F－9 | 6mm程度の砂粒(雲母、石英等）を含む。 | 外－黒褐色<br>内－灰白色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 194 | F－9 | 1mm前後の砂粒含む。 | 外－黒褐色<br>内－褐色 | 外－粗いナデ。<br>内－$C_1$種条痕。 | |
| 195 | F－7 | 1mm前後の砂粒含む。（雲母混入） | 外－黒褐色<br>内－黒褐色 | 外－A種条痕を施したのち、ナデ消している。<br>内－A種条痕。 | |
| 196 | F－10 | 5mm程度の砂粒(雲母片等）を含む。 | 外－褐色<br>内－褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | |
| 197 | | 0.5mm程度の砂粒と、0.1mm程度の雲母片含む。 | 外－褐色<br>内－暗黒色 | 外－B種条痕（左上－右下)。<br>内－横位のB種条痕。 | |
| 198 | F－10 | 1mm未満の砂粒含む（雲母あり)。 | 外－黒褐色<br>内－淡褐色 | 外－ナデ。<br>内－ナデ。 | |

## 2．出土縄文土器の検討

本遺跡出土の縄文土器は，その多くが細片であり，また出土状況も決して良好とは言えない。従って，本遺跡出土資料に基づいた土器の型式学的研究は，困難な状況であると思われる。

当地方の縄文土器の研究は，その編年大綱が早く発表されたにもかかわらず，以後各型式の具体的内容が十分解明されないまま現在に至っている。[(1)]しかし，最近このような状況が，少しづつ変わってきたようにも思える。特に後期，晩期土器の研究においては文様の変遷，器面調整等についての細かな観察に基づき，型式内容の再検討及び編年の細分が行なわれている。[(2)]

以上のような本遺跡出土資料の性格と，最近の研究状況を考慮しつつ，資料整理の過程で気付いたことを述べて，土器のまとめとしたい。

本遺跡出土資料の大半は，縄文時代後期，晩期の所産と考えられる。そして，それらの中で主なものについては本章第１項で取り上げ，やや詳しく記述した。その結果，宮滝（福田KⅢ？）式に属するものは見られないこと，後期に属する資料が晩期のそれよりも量的に多いことが判明した。ただし，先述のような遺跡の状況のため，その結果のみから，本岩陰の利用された期間を云々することは困難である。

次に，土器の器面調整の過程で生じた，条痕について述べる。この条痕は，主に粗製土器に施されるが，古くからその原体について言及されてきた。そして現在でも一般に，「二枚貝」によるものと，「巻貝」によるものの二種が存在すると言われている。しかし，本遺跡出土資料中には，それら二種と同時にそれら以外の原体を用いたと思われる[(3)]条痕が存在する。そこで整理の過程において，条痕を以下のＡからＣの三種に分類した。なお，条痕を細かく見ると，一単位の中に複数の凹凸が存在する。ここでは断面の形状が，突出して山状をなす部分を凸部，くぼんで溝状をなす部分を凹部と呼ぶ。また土器製作に通有の手法であるナデ技法は，それにより生じる条線の太さ，深さ等により条痕と呼ばれるものと明確に区別できるので，今回の対象からは除外した。以下各種条痕について説明する（図版九，３）。

Ａ種条痕は，従来「二枚貝条痕」と呼ばれてきたものに相当する。凹部，凸部ともに断面の形状は，長方形ないし台形を呈する。凹部と凸部の幅は，凹部幅の方が広く，また凹部内には，基本的に条線は観察できない。この種の条痕は従来「二枚貝条痕」とされてきたが，すべての二枚貝がこのような特徴を持つ条痕を生み出すとは考えられず，恐らく，サルボウ，ハイガイ等 Anadara 属と言われる限られた種類の貝を用いたと思われる。

Ｂ種条痕は，従来「巻貝条痕」と言われてきたものに相当する。断面の形状は，凹部はゆるいＵ字形を示し，相接するゆるいＵ字形凹部との接点が凸部となる。従って凹部と凸部の幅は，凹部の方がはるかに広い。また，この種の特徴は，凹部の中に更に細かな数条の条線が見えることである。以上のような特徴から，Ｂ種条痕の原体が，小形の巻貝であったことは確実である。

上記の二種以外の条痕をＣ種条痕とした。このＣ種条痕は，凹部凸部の幅，深さ，描かれた

条線のカーブ等を考慮して，次の二種に細分した。

図版九，3-3を$C_1$種条痕とした。弥生土器等に顕著である刷手目に近く，A種条痕と比べ，凹部，凸部ともにその幅は狭い。また，B種条痕に見られたような，凹部が更に数条の条線によって画されることもない。針葉樹材による刷毛目にちかいと言える。更に土器に残された痕跡から判断して，原体は比較的堅い材質のものであったと想定される。

図版九，3-4は$C_2$種条痕としたものの一例である。A種・B種条痕と比較した場合の相違点は，$C_1$種の場合と同様であるが，凹部凸部間の幅は$C_1$種条痕文よりも更に狭い。つまり，条線一本一本が細く，単位幅当たりの条線数が多い。またこの$C_2$種条痕の特徴として，条線の描くカーブが比較的ゆるやかで，土器面に残る圧痕も浅いことが挙げられる。原体をつきとめることはできなかった。

ところで，縄文土器に見られる刷毛目類似の調整痕については，横山浩一氏の研究[(4)]に詳しい。その中で横山氏は，主に粗製土器の外面に見られる刷毛目類似の調整痕を「細密条痕」として取り上げられた。横山氏が細密条痕とされた調整痕を実見する機会を得ず明言はできないが，本章で$C_1$種条痕としたものがそれに該当すると思われる。

また$C_2$種条痕については，先述の如く具体的な原体まで追求することはできなかった。しかし，A，B，$C_1$種条痕のように，堅い原体を予想することは難しい。条線を器面に残すことは，指ナデによっても可能であり，植物の葉あるいは茎をたばねたものでも可能であろう。今後検討して行きたい。

以上条痕をAから$C_2$の4種に分類したが，これは本遺跡出土資料のみを対象とした分類結果であり，今後他遺跡における出土資料をも含めた考察が必要なことは言うまでもない。最近文様のモチーフを中心に，土器から見た地域間の交流に関する議論が盛んであるが[(5)]文様のみならず調整等についても同様な研究が必要であろう。特に山間部に立地する遺跡の資料[(6)]と，海浜部に立地する遺跡の資料の比較はその一つの課題といえよう。

次に，本遺跡出土資料の中でも比較的破片が大きく，原形の推定できた深鉢について述べたい。深鉢と一言で称しても多様であり，以下で取り上げるものは，そのうちの一類と考えられる。本遺跡出土資料と他遺跡出土の類例を示したのが図26である。1は広島県洗谷貝塚出土例である。肥厚させた口縁部の外面に縄文を施したもので，隆起部を有する。頸部は強く外反し，胴部上方には沈線[(7)]により区画した縄文帯がめぐる。また隆起部から下方の頸部にかけ，縦方向の縄文帯が垂下し，胴部の縄文帯へとつながる。2，4は本遺跡出土資料であり，特徴については先に記した（第1項参照)。3は岡山県大殿洲遺跡出土資料[(8)]である。(口縁部を肥厚させ，隆起部を有する。口縁部外面には縄文を施し，頸部は強く外反する。頸胴部の境には横方向の沈線がめぐり，胴部には全面に縄文を施している。恐らく羽状縄文であろう。5も大殿洲遺跡出土資料であるが，口縁部を若干肥厚させ外面に縄文を施しているようである。6，7はともに岡山県広江・浜遺跡出土資料である。6はわずかに肥厚させた口縁部の外面に縄文を施す。頸部は外反し，ゆるやかなカーブを描き[(9)]，縄文を施した胴部へと移行する。底部は丸底

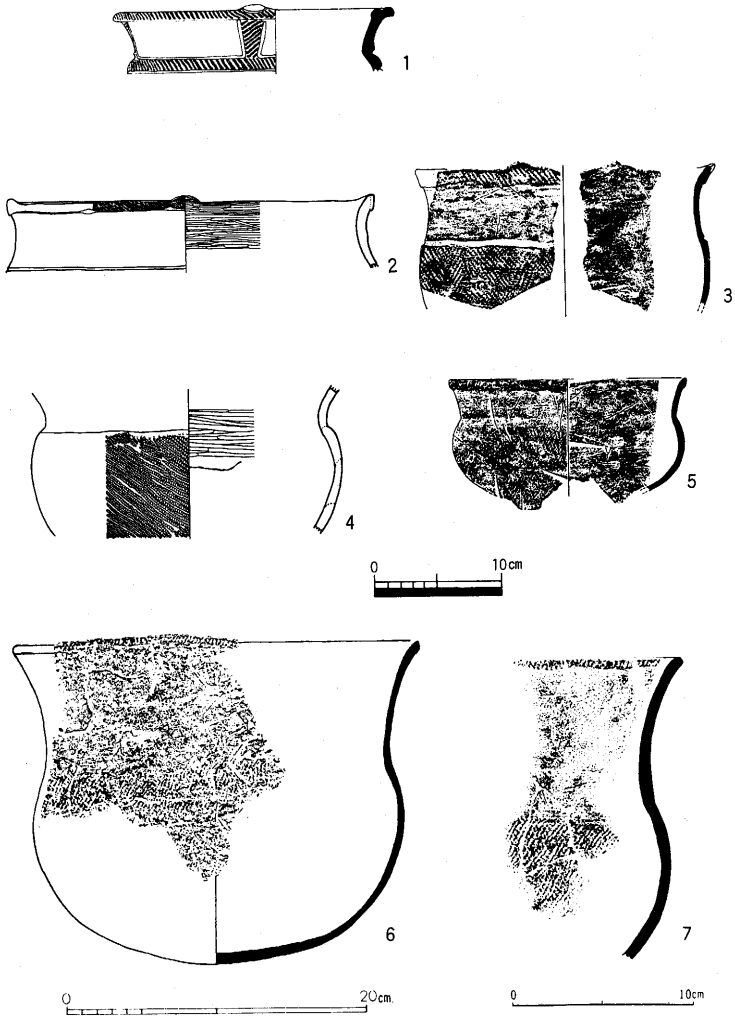



図26　深鉢形土器の分類

である。7は口縁部の肥厚が見られず，頸部が長いことが特徴であり，他は6と同様と思われる。

以上のことから，本類の主な特徴をまとめると次のようになる。1)肥厚させた口縁部の外面に縄文を施す。2)外反する無文の頸部を有する。3)頸部と胴部を縄文帯，沈線，段等により区分する。4)胴部には全面に縄文を施す。これらの特徴から上記1から7を，一つの類としてまとめることは可能であろう。そしてこれらの中でも，2と3，4と5，6と7が互いに非常に類似しており，一括可能と考えられる。今，1を含め仮りにそれぞれA(1)，B(2・3)，C(4・5)，D(6・7)とする。AとBは，口縁部の肥厚の程度，あるいは隆起部を持つことで共通する。BとCは，沈線と段の違いこそあれ，頸部と胴部を明瞭に区分することで共通する。更にCとDは，口縁部が平縁で，かつ肥厚の度合いが低いことで共通する。これらの点から本類は，A⇌B⇌C⇌Dの方向の変遷をたどったと考えられる。従来からBについては津雲

A式，Dについては彦崎KⅡ式として時間的位置付けがなされてきており，洗谷貝塚において[8]AとDが層位を異に出土し，Aが時間的に新しいとされている[9]。また間壁忠彦氏によれば，彦崎KⅡ式においてそれまで優勢であったRL縄文に代わり，LR縄文が優勢になることが説かれている[10]。とすれば本類は，A→B→C→Dの変遷が考えられるが，それは，層位的事実，一括資料等[11]により検証されなくてはならない。しかし，そのような良好な遺存状況を示す遺跡の発掘例に乏しく，今回は十分な検証ができなかった。

かって中部瀬戸内地方は，西日本縄文土器研究のイニシアチブをとってきた。そのことは，現行の型式名のほとんどが岡山県に所在する遺跡の名を冠したものであることからも窺える。しかしその後良好な遺存状況を示す遺跡にも恵まれず，研究は停滞気味である。既出資料の再検討を含め，各型式の具体的内容（特に器種構成），おのおのの器種の変遷を究明することが急務である。

註

(1) 三森定男　「先史時代の西部日本(下)」『人類學・先史學講座』第二巻　1938　あるいは，山内清男氏が原始文化第三回研究会で発表されたと聞く。

(2) 後期だけに限っても次のような研究がある。

泉拓良　「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』1　日本原始　小学館　1979

同　「北白川上層式土器の細分－京都大学教養部構内AO24区出土の縄文土器を中心に－」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度　京都大学埋蔵文化財センター　1980

同　「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4　縄文土器Ⅱ　雄山閣　1981

同　「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』　第3巻　後期　講談社　1981

丹治康明　「宮滝式再考」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』藤井祐介君を偲ぶ会　1980

間壁忠彦　「縄文後期彦崎KⅡ(竹原)式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号1980

(3) 『湖西線関係遺跡報告書』　図版編　図版45　滋賀県教育委員会

山本昭，泉本知秀，福岡澄男　「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」『大阪文化誌』第2巻　第1号　図版6　1976

(4) 横山浩一　「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』　通巻24号　1979

(5) 福田貝塚出土の福田KⅡ式に属する土器にA種条痕文が見られる。「六　倉敷市の主な遺跡（福田貝塚）」『倉敷の古代』　倉敷考古館　1972　P48

(6) (2)泉拓良論文など。

(7) 『洗谷貝塚』　福山市教育委員会，洗谷貝塚発掘調査団，福山市文化財協会　1976

(8) 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「笠岡市大殿洲の縄文時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』

第12号　1976

(9)　間壁忠彦・間壁葭子　「倉敷市広江浜遺跡調査概報」『倉敷考古館研究集報』第２号1966,
間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣　「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』
第14号　1979

(10)　(7)文献に同じ

(11)　(2)間壁論文

# 7．出土遺物Ⅱ　石器・骨角器

## 1．石　器・骨角器（図版八）

今回の調査において，表採，発掘取上げ，水洗等合わせて700点の石器・石片と骨角器1点が出土した。これらのうち398点（59%）を水洗により摘出している。

**石鏃**（図27・28）

石鏃は全部で40点出土した。このうち1点の黒曜石製石鏃34を除き，すべて石材はサヌカイトである。ほとんどが水洗または攪乱ピット内より一括してとりあげられたものである。また，欠損しているものが多いのも当遺跡の特徴である。完形のものはわずかに9点にすぎない。

6・16・28・33・40は平基石鏃である。6・28・33は基部のみ残存であるが，断面が分厚く，かなり長い石鏃であったようだ。16はそれにくらべるとうすく，正三角形に近い平面形をしている。40は加工が片面にかたよっており，また剝離面を大きく残しているので未製品の可能性もある。

9は唯一の円基石鏃である。先端を欠いているので，先端が尖っていたかどうかは不明である。片面にかなり大きな剝離面を残している。

1・2・4・7・13・14・15・18・20・22・23・24・25・26・27・30・32・34・35・36は凹基石鏃である。2・4・15・24・25・27・30・32・34・35・36は基部の抉りが浅く，平面形が鋭角の二等辺三角形のものである。基部の両端は鋭く尖っている。加工はこまかいものが多い。断面形では中央から基部にかけての部分が最も分厚くなっている。欠損は，先端及び基部両端の尖った部分が多い。この形態のもののなかに唯一の黒曜石製石鏃34を含む。

14・18・20は，平面形が正三角形に近いものである。基部両端はまるくなっている。また18は完形では最小のものである。

1・7・13・22・23・26は，側縁の内彎するものである。1・7・23・26は，剝離面を大きく残しているが，未製品ではない。1の側縁は内彎するというよりむしろ抉りを入れているといったほうがいいだろう。その他のものは側縁を内彎させたため，先端が細く尖っている。26は上半が折損し，側縁が内彎するかどうかは不明であるが，7と類似しているので，この類型にいれた。

残りは基部が脚状となっているものである。3・8・17・21・29は脚端の尖るものである。また，側縁は外彎する。

10・12・19・37・38は脚端のまるくなるものである。12の片脚は，欠損後二次加工をうけたものと思われる。当初よりの片脚石鏃とも考えられるが，両側縁のラインのそろっていないことと，切り合い関係ではもう一方の脚部作成後剝離していることから，欠損後の二次加工と判断した。19は脚先端は尖っているが，同じ類型にいれた。

39は平面形が正三角形に近いものである。脚先端は尖っていたようだが，前述のものにくら

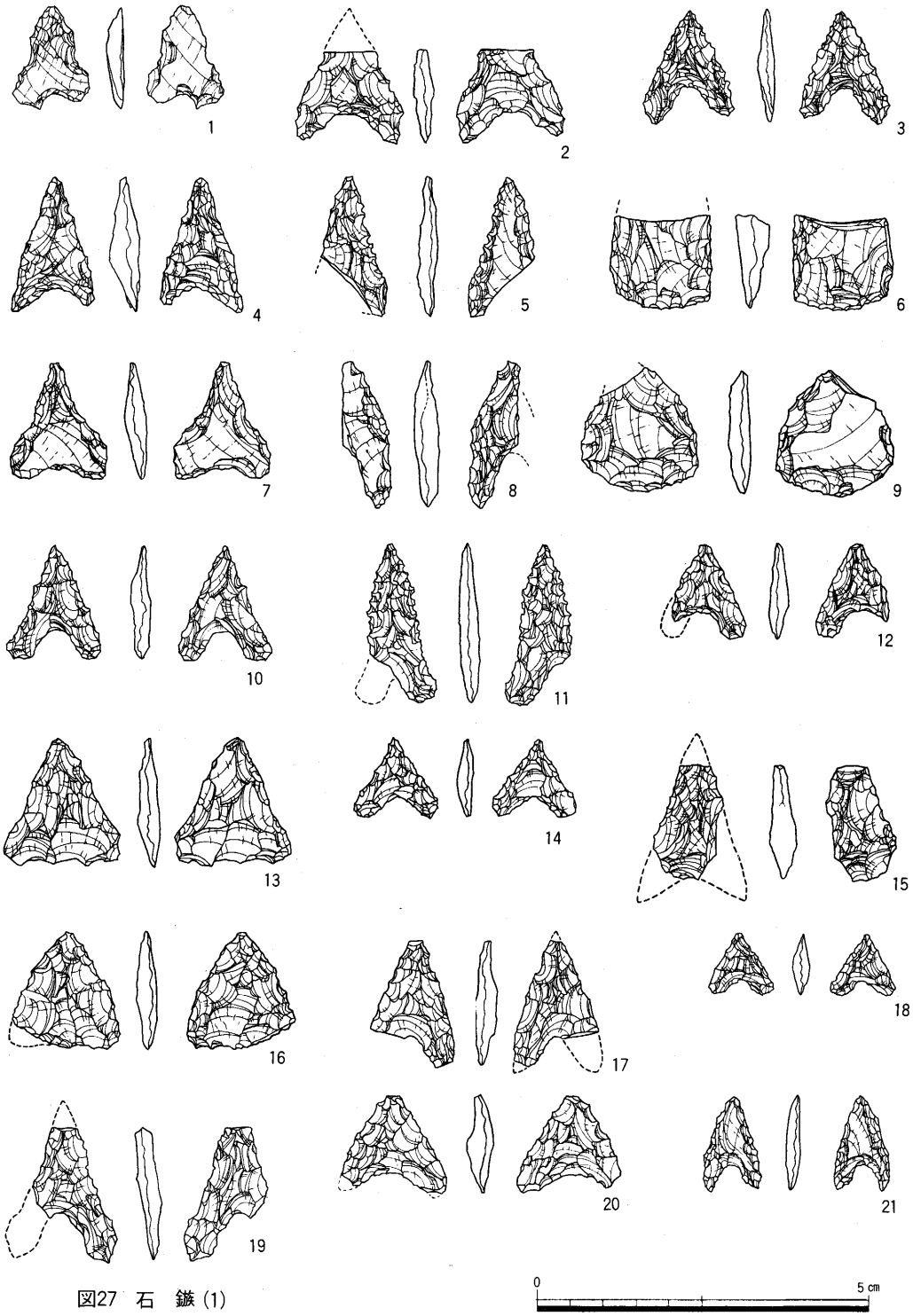



図27　石　鏃 (1)

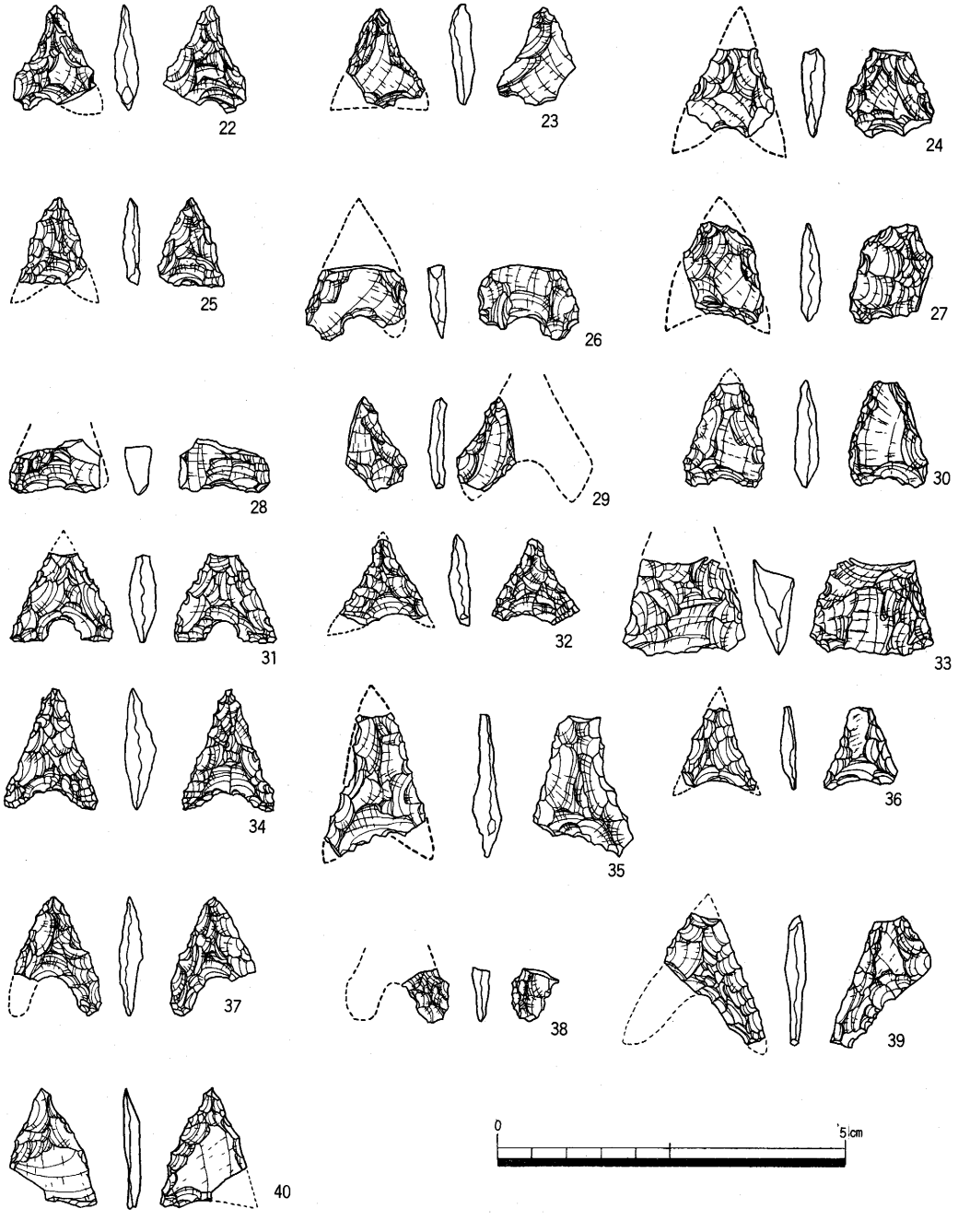



図28　石　鏃(2)

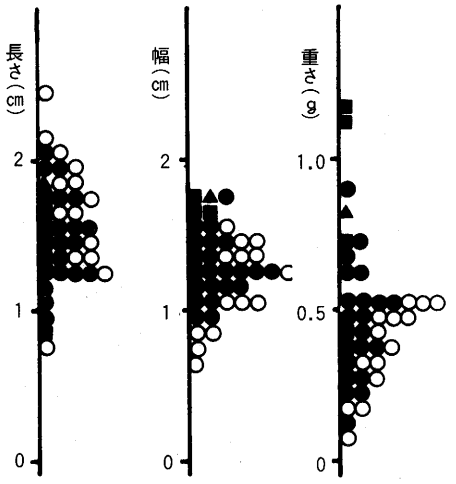



図29　石鏃の長さ・幅・重さについての頻度分布図

■A：平基石鏃
▲B：円基石鏃
●C：凹基石鏃
○D：脚状基部をもつ石鏃

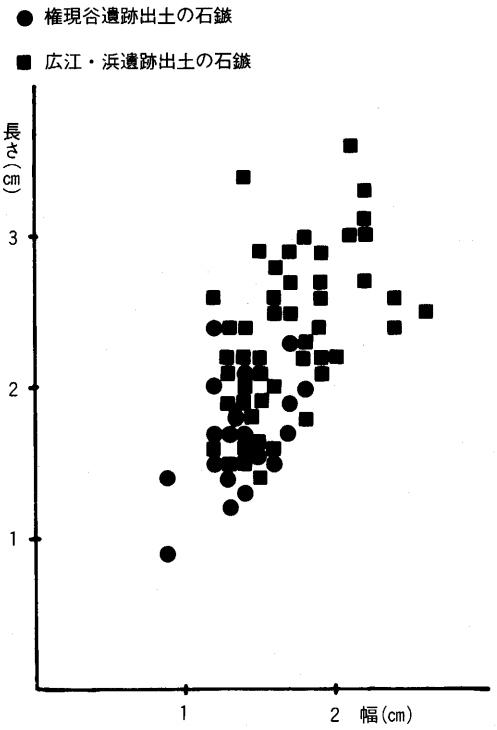



図30　石鏃長幅相関図

べると基部の抉りが深い。

31は，縄文時代早期によくみられる鍬形鏃と類似している。しかし，縄文時代早期の鍬形鏃とくらべると加工が粗く，基部の抉りも浅く，石鏃自体の大きさも小さいようである。

5・11は細長く，側縁の鋸歯状の著しいものである。5は，基部の形状不明であるが，側縁の形状が11と類似するので同じ類型にいれた。

これらの石鏃についての観察表（表3）および長さ，幅，重さのそれぞれについての出土頻度分布グラフ（図29）をあげておく。ここでは平基石鏃をA，円基石鏃をB，凹基石鏃をC，脚状基部をもつ石鏃をDとしてグラフを作った。このグラフで見るかぎりでは，各形態の特徴というものがはっきりしないようであるが，平基石鏃は大きく破損しているにもかかわらず重いものが多いようであり，脚状基部をもつ石鏃は細長く，かつ軽いようである。しかし，これらの各形態をはっきり区別する必要のあるほどの差はないようである。

次にこの観察表をもとに石鏃の長さと幅との関係について見ていく。図30は，倉敷市広江・浜遺跡出土の石鏃と当遺跡の石鏃との長幅相関図である。ただし，欠損したものが多いため，およその復元のできるもの(註)についてのみ復元をおこないその数値を利用した。またここでは資料数の関係もあり，形態については無視した。図30をみるとわかるように当遺跡の石鏃は，広江・浜遺跡出土の石鏃にくらべ長さ・幅ともにかなり小さい。この大きさの差については，供給される石材の量的な差にもとづくという考え方や，狩猟対象獣の違いによるという考え方などが考えられる。これらのいずれがこの差の原因であったのか，あるいは他に原因があったの

かということについてはとりあえずここではふれないでおく。

註

間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣　1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号　をもとにした。当遺跡の石鏃で時期の確実にわかるものはないが，出土土器や石鏃の形状などから，比較資料として広江・浜遺跡の石鏃をとりあげた。

**スクレイパー**（図31）

スクレイパーは全部で4点出土した。すべてサヌカイト製である。いずれも刃部の長さ5cm程度の小形のものである。

1は欠損しているが，刃部を2ケ所にもつ片刃のものである。刃部はほぼ直交するような位置にある。

2も欠損しているが刃部を2ケ所にもつものである。この刃部は1と異なりほぼ平行する位置にあり，両刃である。

3は刃部がわずかに内彎する両刃のものである。刃部に対応する側に背潰しのような加工がある。

4は片刃のものである。刃部は外彎している。

**その他の石器**（図31）

すべてサヌカイト製である。明らかに二次加工をうけ，定形的な石器を作製した，あるいは作製しようとしていたと考えられるが，用途も，その石器の名称も不明のため，ここではその他の石器としてまとめておくが，これらはすべて別々の種類の石器であると考えられる。

5は石錐に似た形をしている。しかし加工のない面が一面あり，ここは折損したものではないかと考えられる。そして他の面の加工の状態も石核にたいするような剝離をおこなっており凹凸がはげしい。そのため石錐とするには粗製でありすぎると考えられる。

6は最初石鏃の脚部かとも考えられたが，剝片自体が非常にうすく，石鏃の一部とは考えにくいようである。またスクレイパーとするにもうすすぎて不適当なようである。

7は中央に抉り状のくびれをもつもので完形のものである。うすい剝片から作られており剝離面を大きく残している。

8は一見凹基石鏃の未製品のような形をしている。しかし剝片の厚さからみてこの剝片より石鏃を作るのは不可能と思われる。大きな抉りをもつ他の石器と考えたほうがよいであろう。抉りの部分以外は折損したと考えられる。

**楔形石器及びその削片**（図32）

本遺跡から出土した石器・石片のうち，以下の特徴を備えたものを，楔形石器として分類した。

- 概して四辺形を呈し，その相対する二縁辺（以下，上下両縁辺という）からほぼ平行に剝離痕が入る。
- 上下両縁辺付近には，細かい砕片の剝落した痕が多く認められ，それらはしばしば階段状

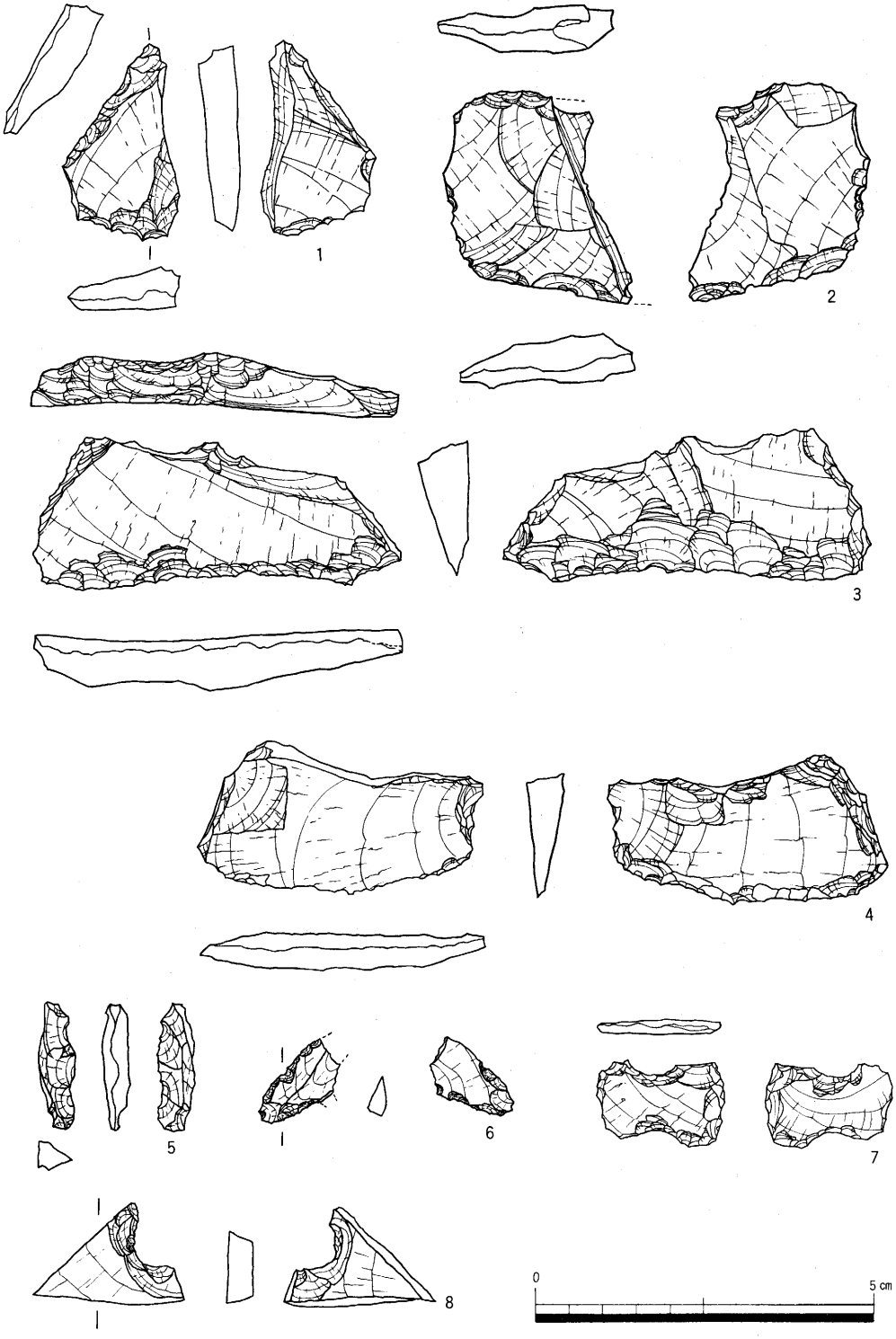



図31　スクレイパー・その他の石器

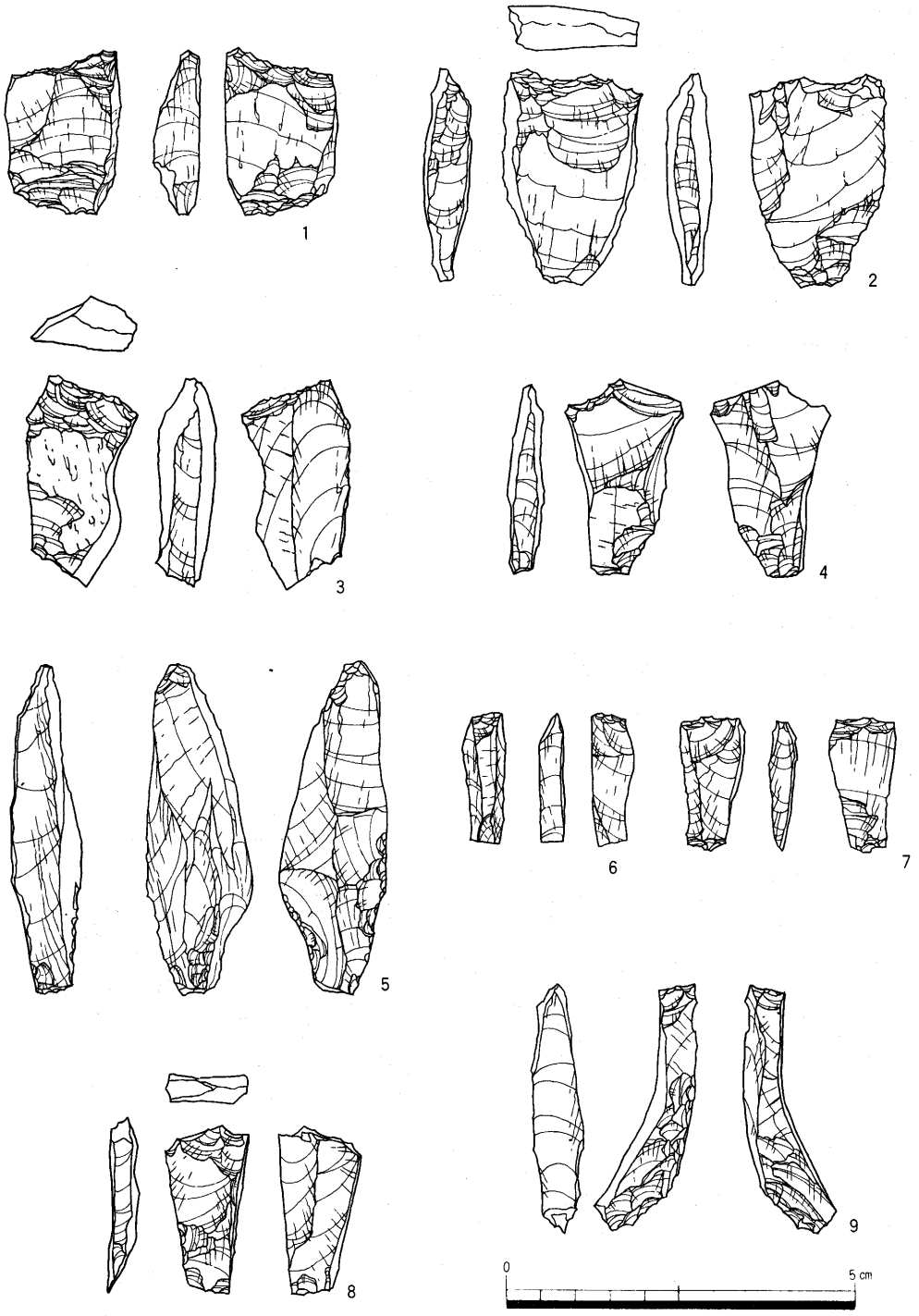



図32 楔 形 石 器（1～4）・その削片（5～9）

を呈す。

● 上下両縁辺には，敲打によると考えられる「つぶれ」が見られる。

● たび重なる敲打により側縁に裁断面を生じたものもみられる。

以上の点により，4点の楔形石器（図32，1～4）及び5点の楔形石器の削片（図32，5～9）を抽出した。これらは長さがおよそ2㎝～5㎝前後で，概して小形である。削片のうち，5と8は楔形石器から剝落した後，その裁断面から再び加工を加えている。

**石核**（図33）

石核は5点出土した。1・3・4は一見楔形石器に類似しているが，打点部に敲打によるつぶれがなく，両面にみられる剝離面も，意識的に剝ぎとられたと判断できるため石核とした。これらの石核の共通の特色として次の点があげられる。

第一に，非常に小形なことである（図34）。即ち，石核は全てが長さ3㎝前後，幅2㎝前後

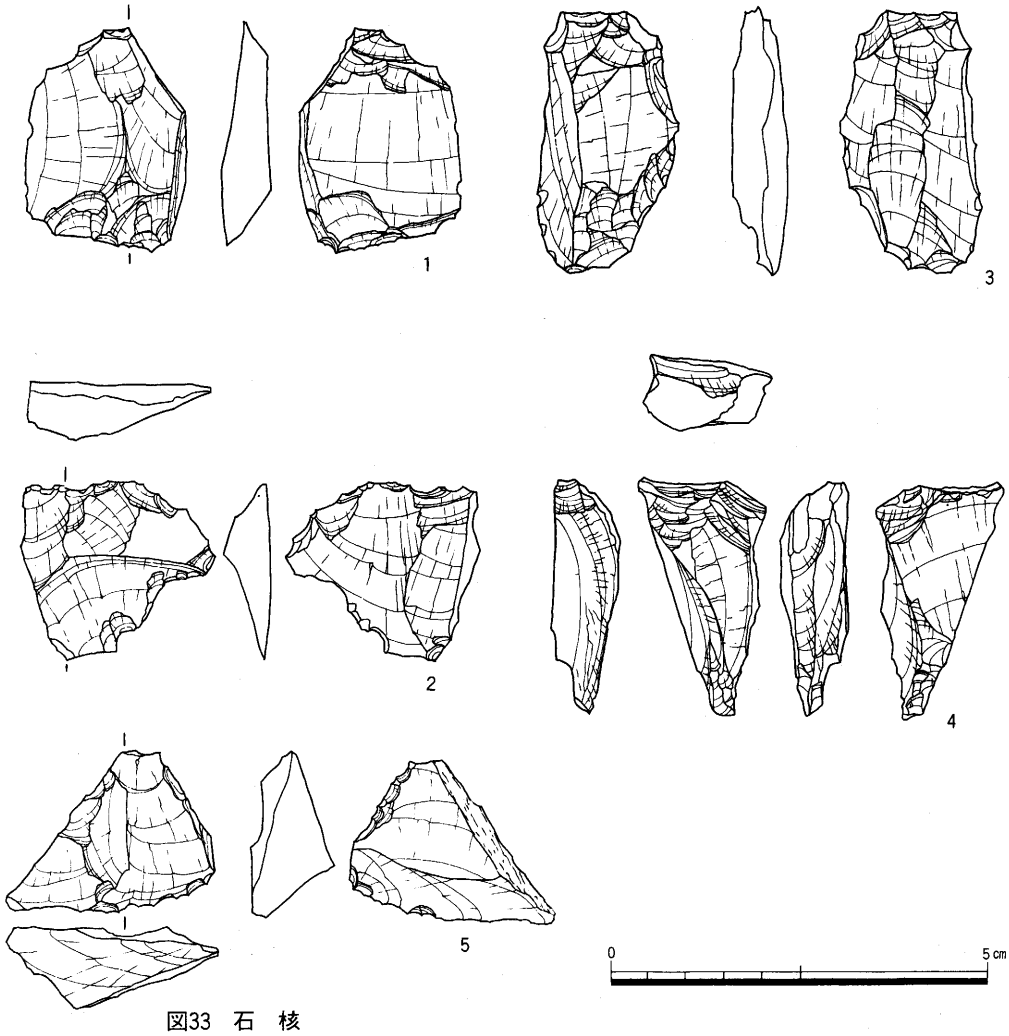



図33　石　核

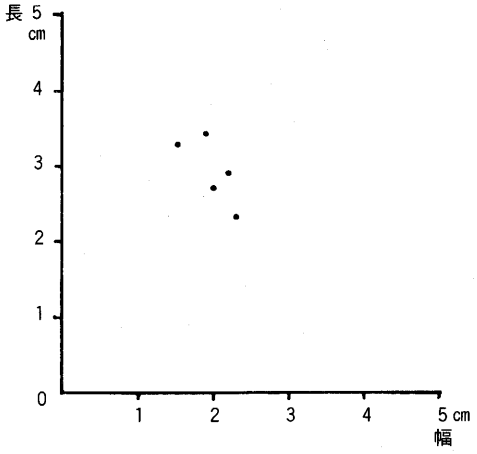



図34　石核長幅相関図

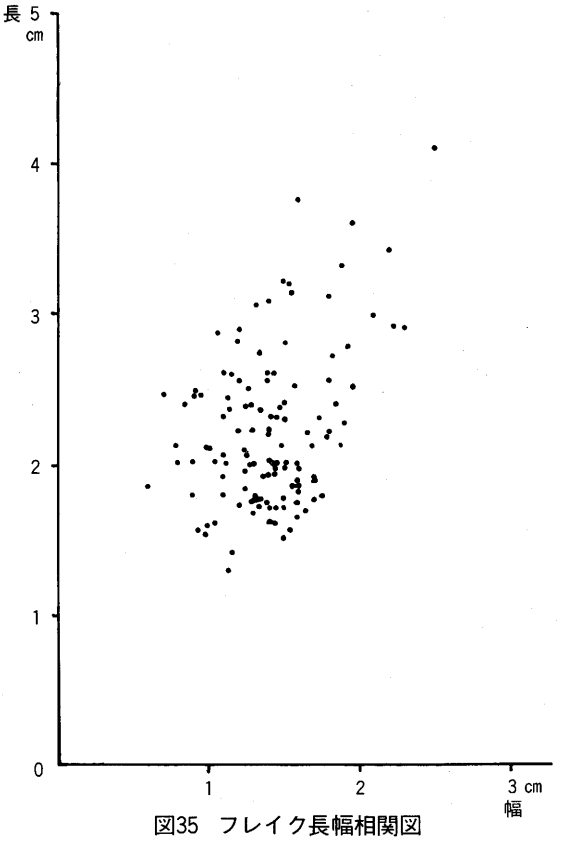



図35　フレイク長幅相関図

で，ほとんど剥片が取りつくされてしまった残核といってよいものである。

第二に，技術面では，一定の剥片剥離技術がみられないことをあげておく。残核を観察する限りでは，特定の平坦な打面を設けた例もなく，おそらくは目的の剥片を剥離するための適当な面を選択し，そこを剥ぎ取るために最も適した面を打面として剥片剥離を行なうというような方法で，くりかえし剥片を剥離していったと考えられる。

**フレイク・チップ**（図36～44）

本遺跡においてフレイク・チップあわせて629点が出土した。その大半は水洗により検出したものである。フレイク・チップの識別については，基本的には意図的に剥ぎ取られた剥片をフレイク，それに伴って剥落した砕片をチップという認識に基づいたが，現実にはそれを見分けるのは困難であり，最終的には剥片の大きさに基づかざるを得なかった。その大きさは，およそ石器に加工可能な大きさとして，15mm程度以上のものをフレイクとして135点抽出し，その全てを図化した。これらのフレイクに見られる特徴を以下にあげてみたい。

まず二次加工を加えたフレイクが非常に多いことがあげられる。明らかな二次加工が認められる剥片が91点，刃こぼれ状のわずかな二次剥離痕が認められるもの14点で，それらを合わせるとフレイク総数のおよそ83%にものぼる。同時期，同地域の比較材料がないため何ともいえないが，かなりの高率であることは確かであろう。それらの二次加工剥片が何らかの道具と

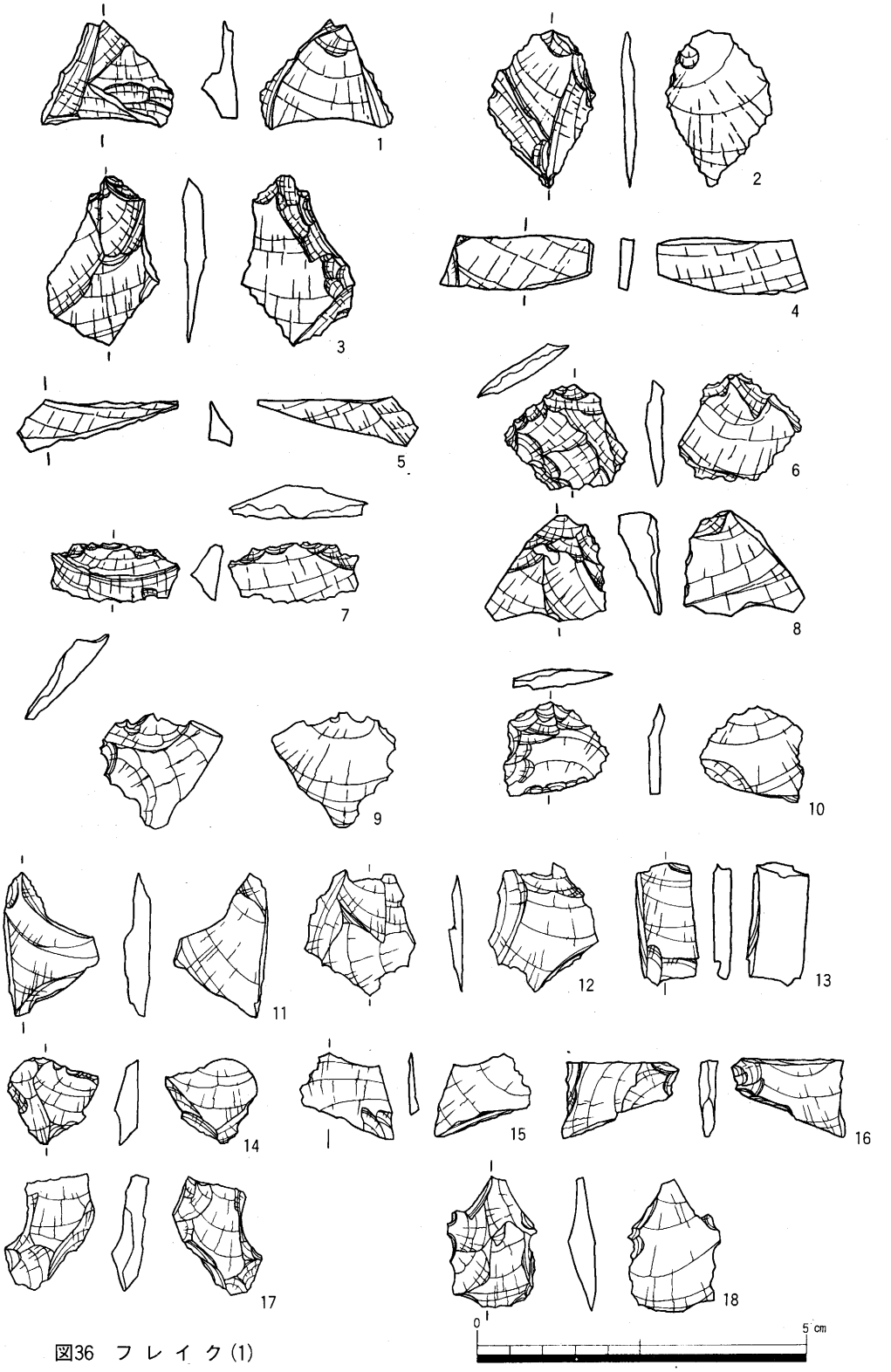



図36　フレイク(1)

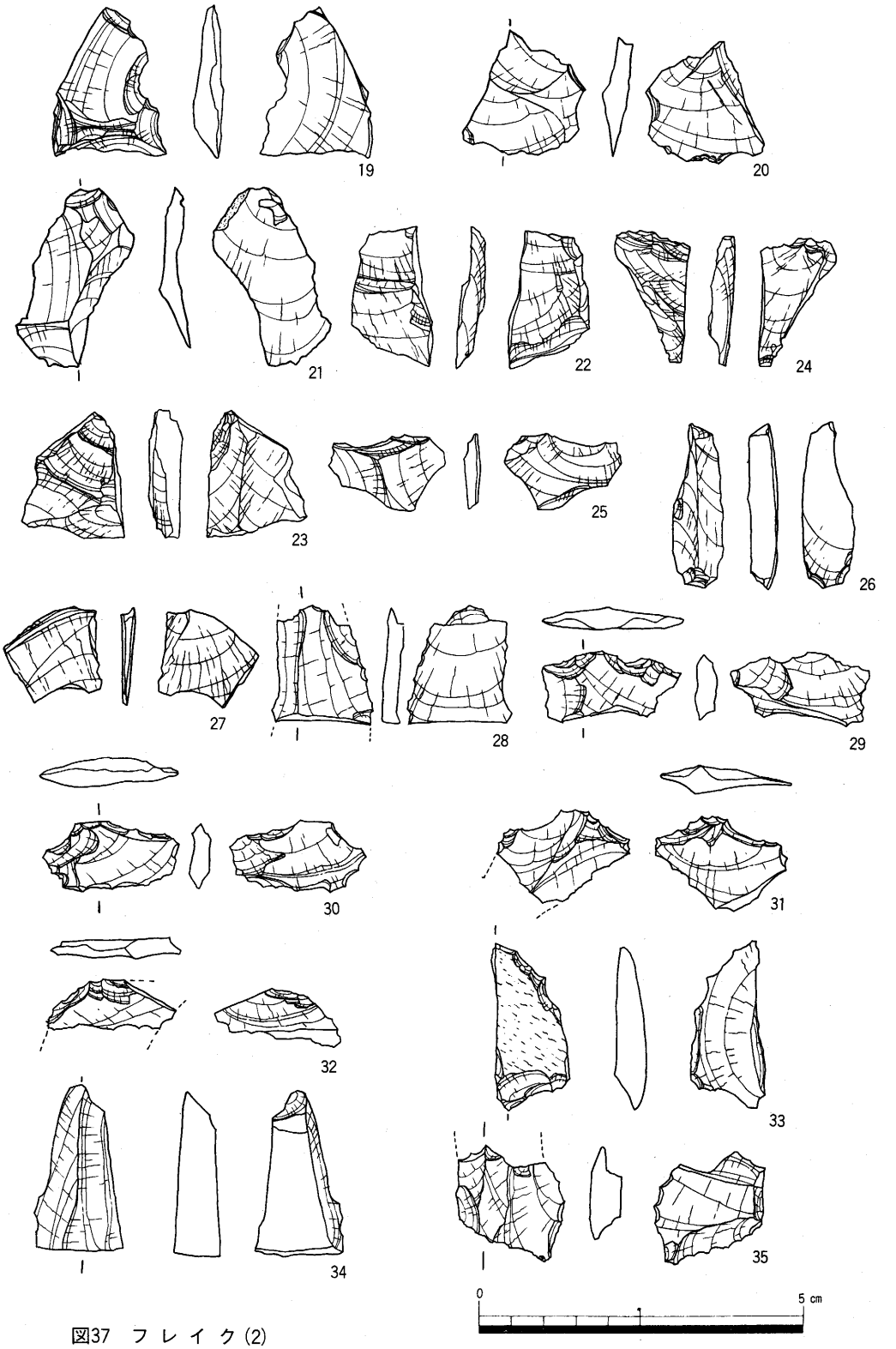



図37　フレイク(2)

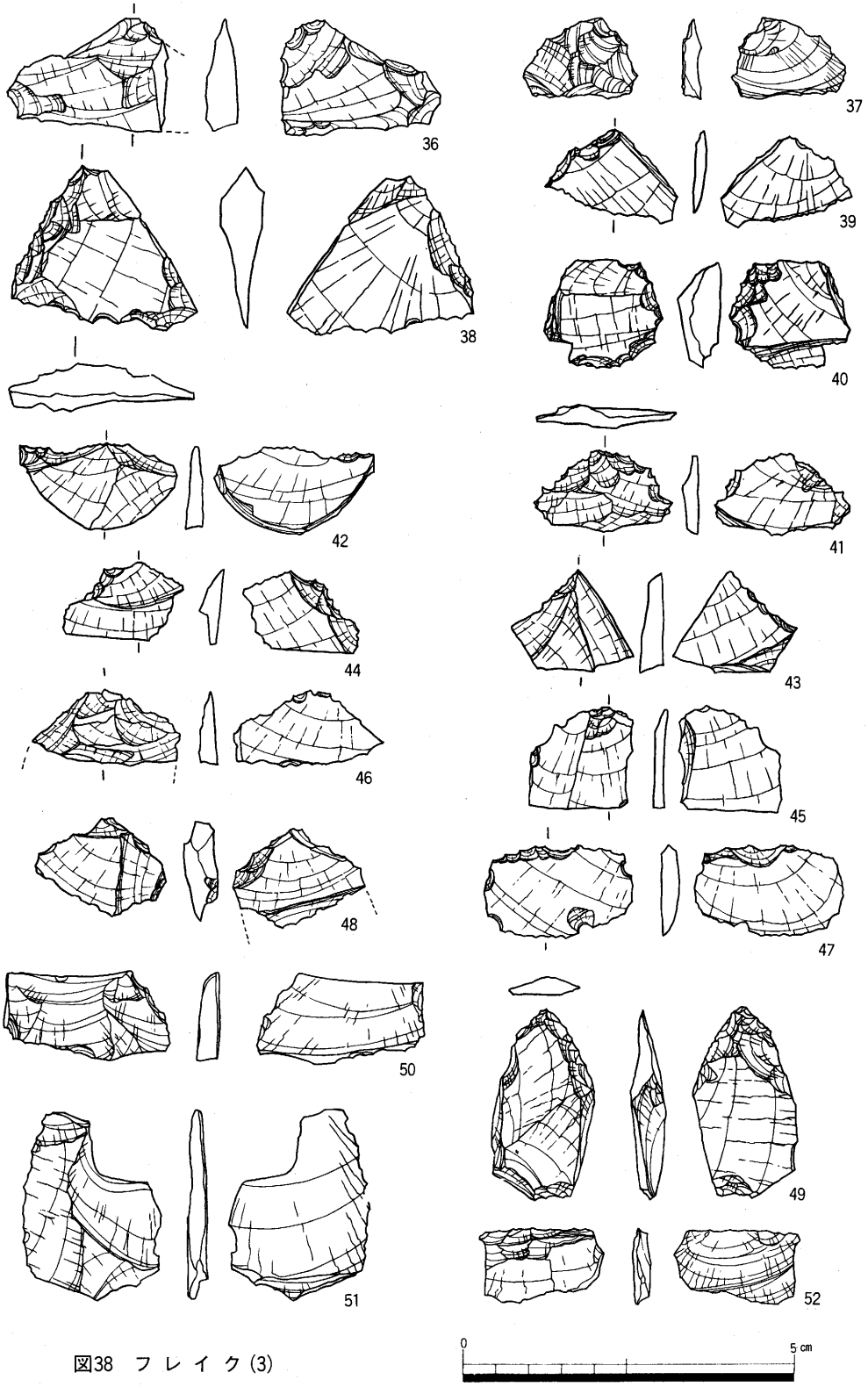



図38　フレイク(3)

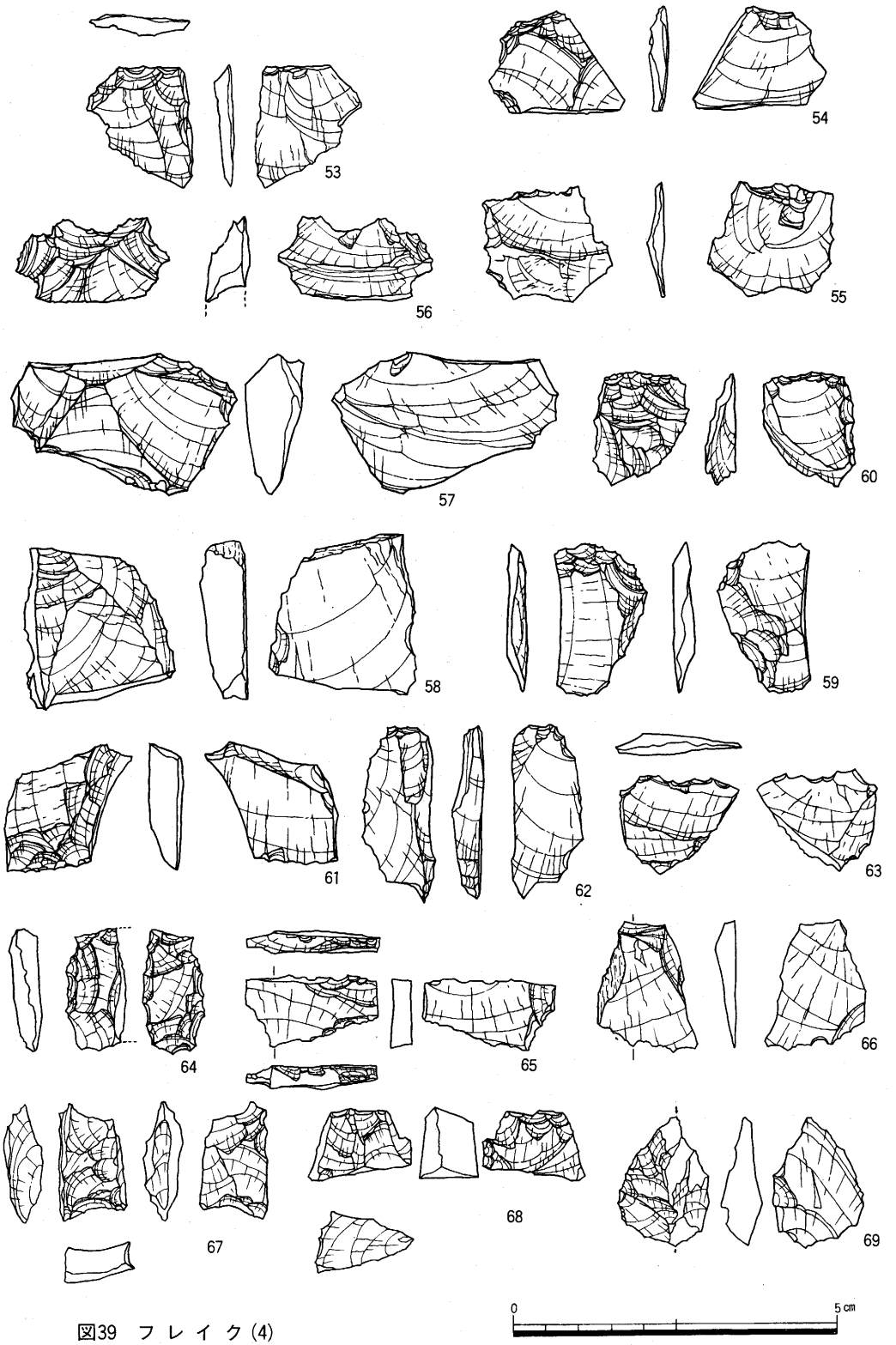



図39　フレイク(4)

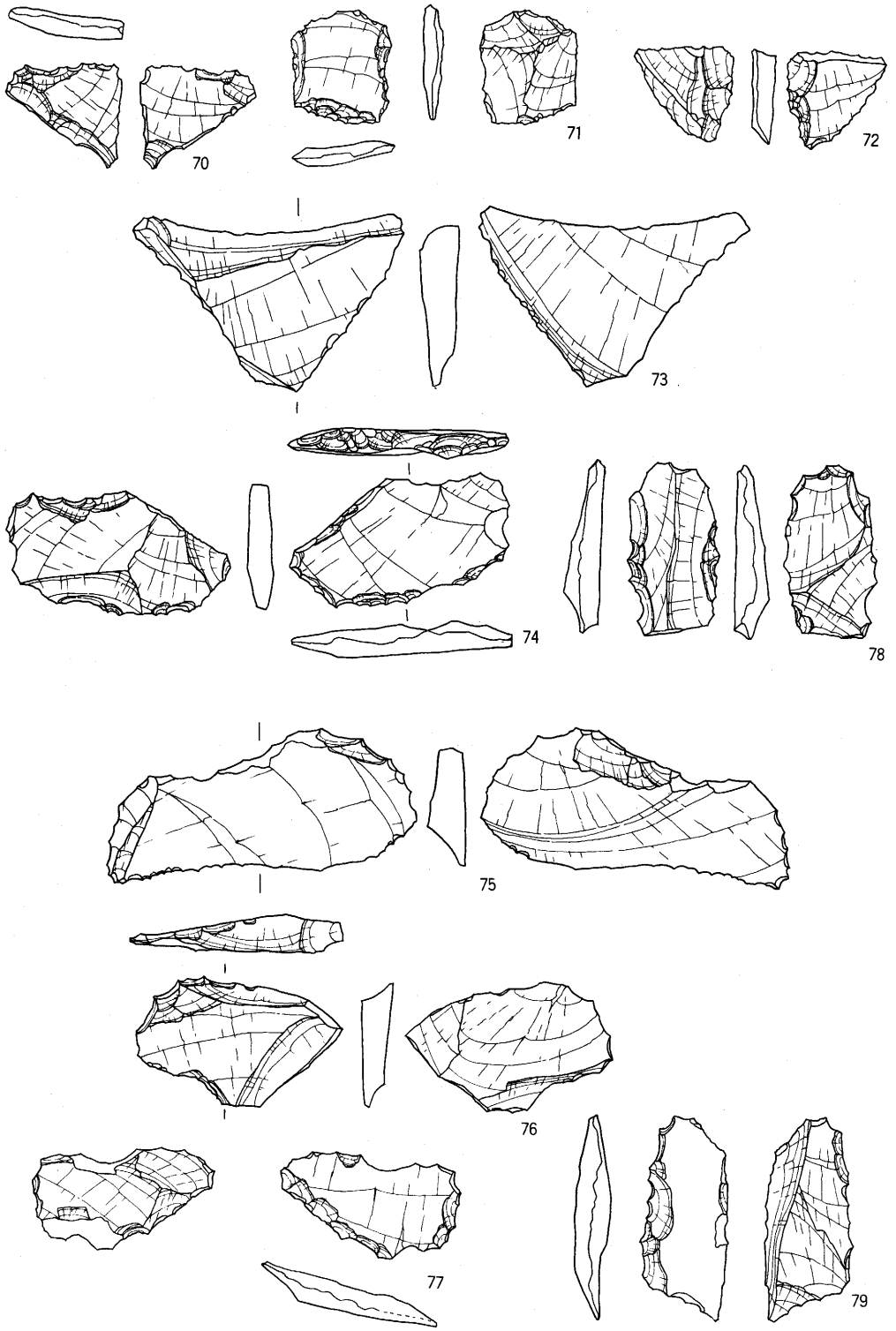



図40　フレイク(5)

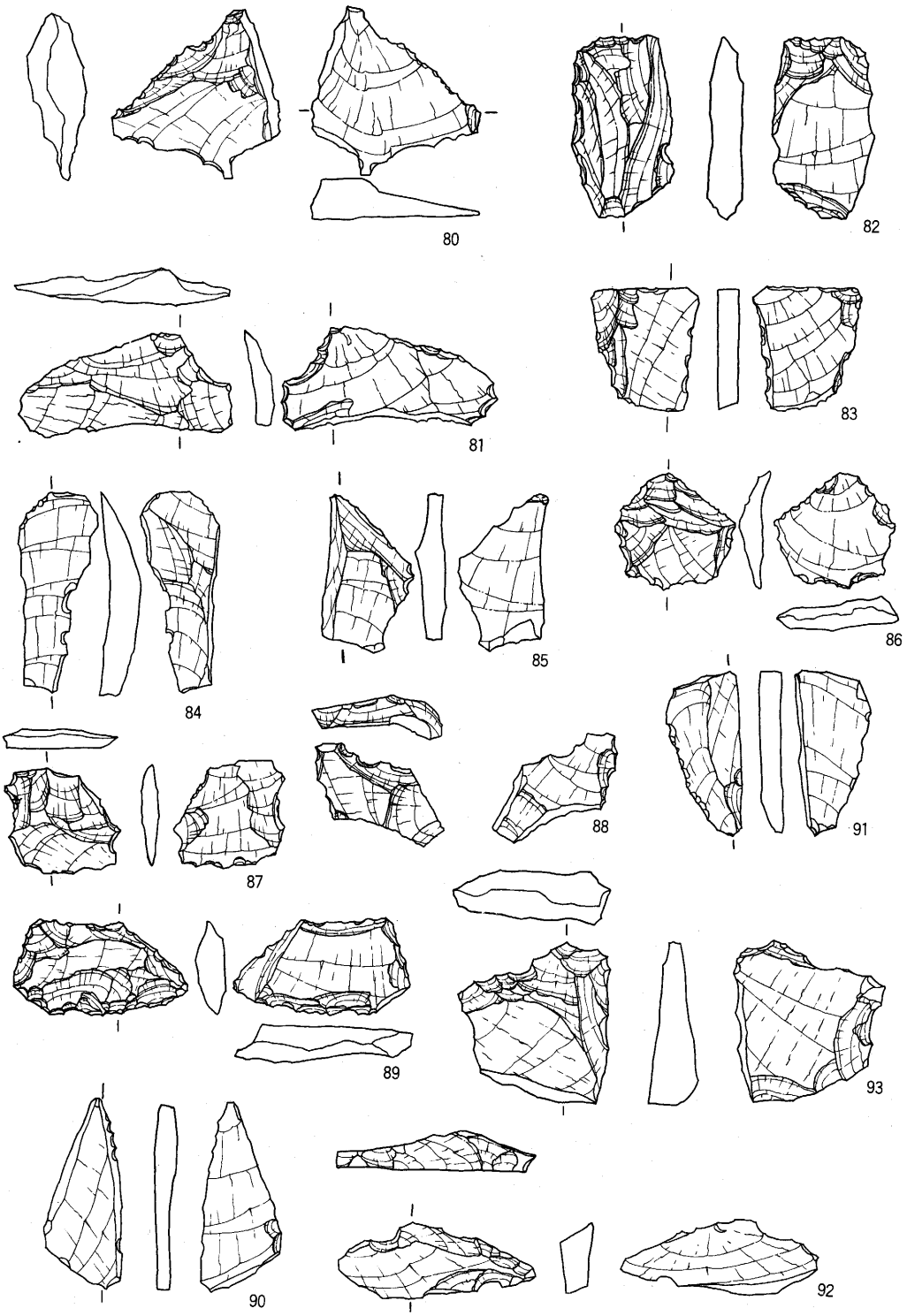



図41　フレイク(6)

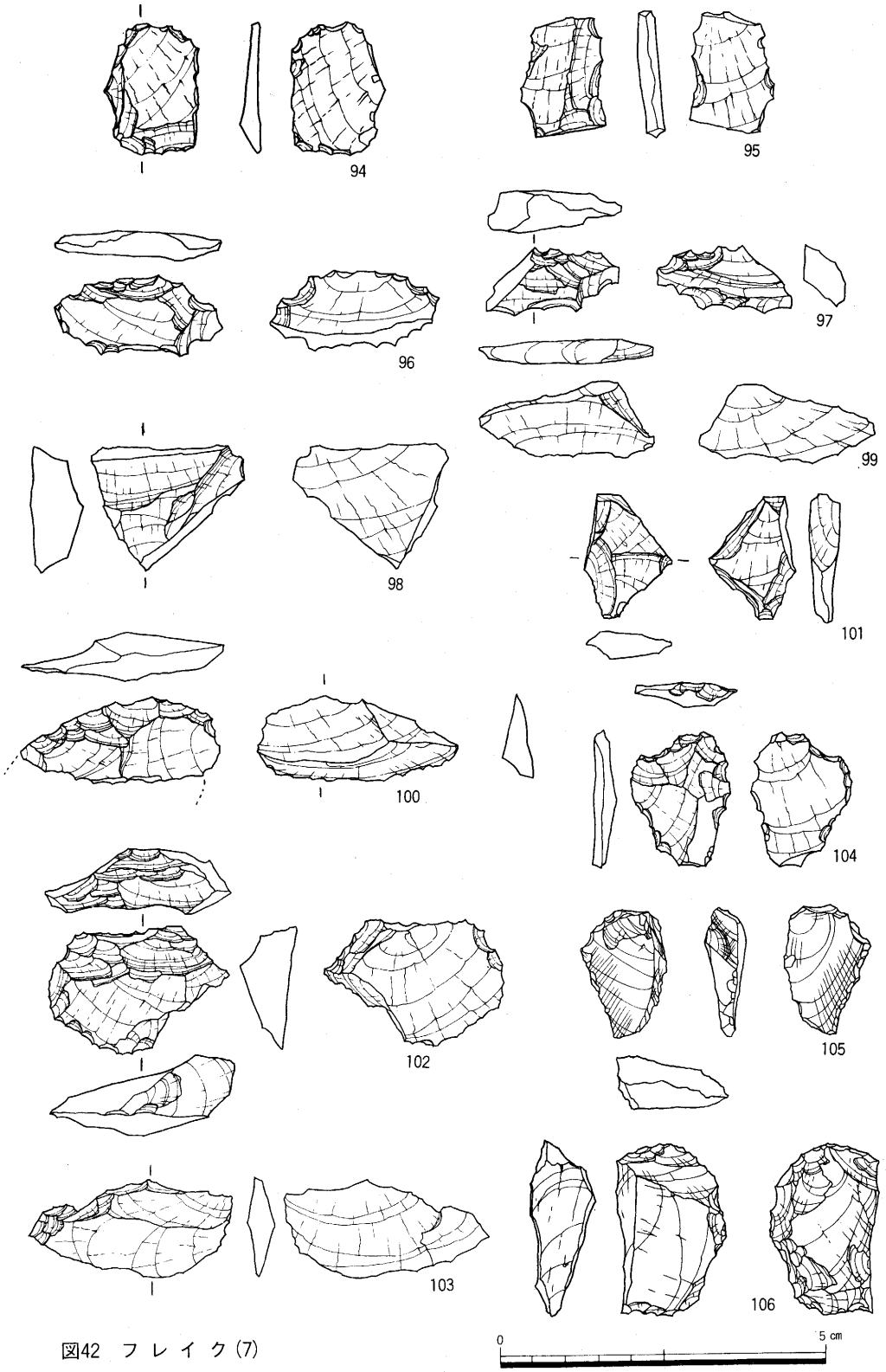



図42　フレイク(7)

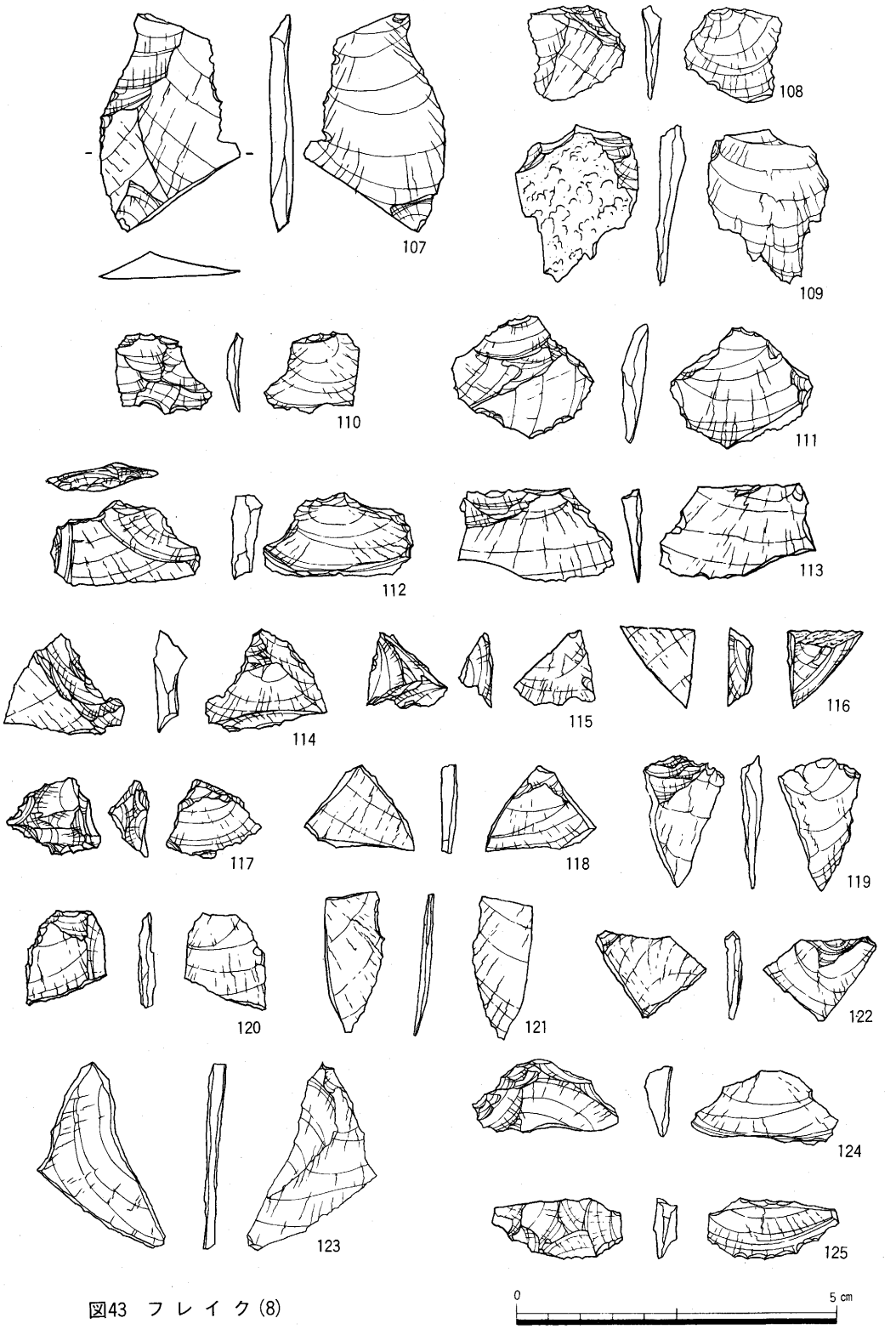

107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
0
5 cm

図43　フレイク(8)

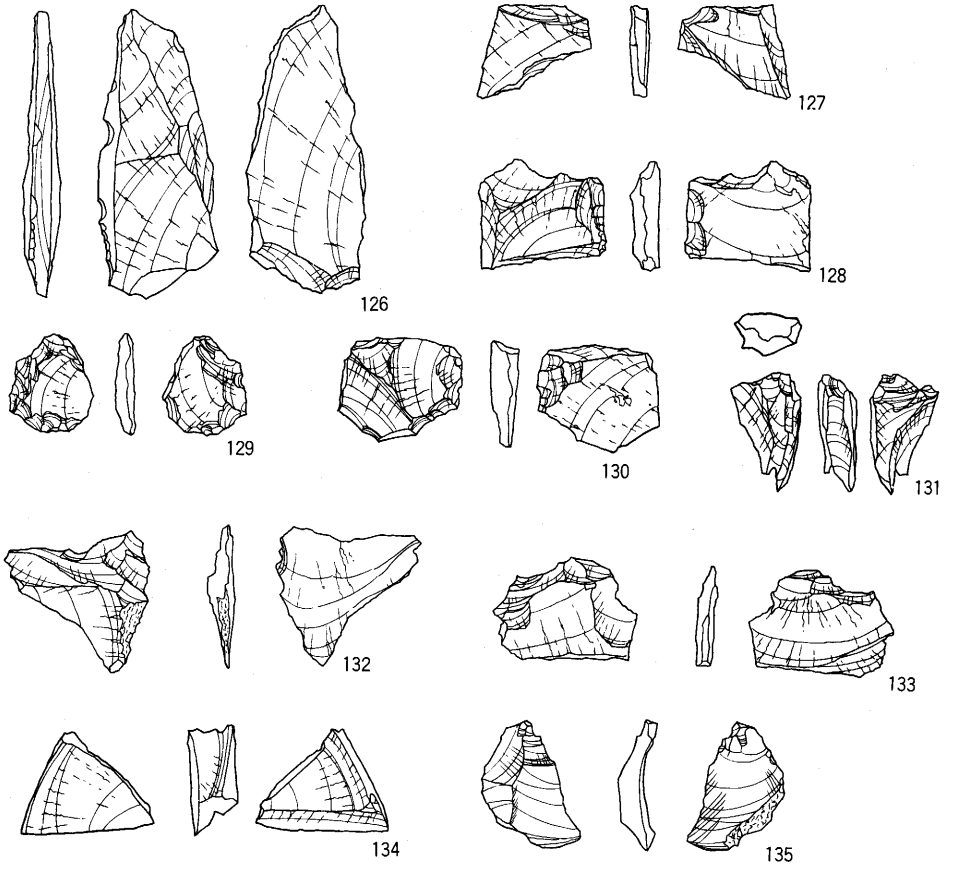
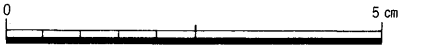



図44　フレイク(9)




して使用されたかどうかは，その大きさ，加工のあり方などから考えると疑問なものが多い。多数の剝片に対して加工が試みられた結果の未製品もしくは中途で遺棄したものと考えたほうが妥当であろう。

また破損品が多いことも特色である。135点の剝片中，破損が全く認められないものはわずか15点で，破損率は89%となる。この原因については即断できないが，１つには上記した二次加工率の高さとの関連も考えられるであろう。即ち，非常に高い割合で二次加工が施される結果，非常に小さな剝片等加工に適さないものまでが加工の対象となったため破損率が高くなり，その結果中途放棄の不定形二次加工剝片が多くなったという相互関係を考えることもできよう。

次にフレイクの大きさに注目したい（図35)。ただしフレイクの大きさは，破損率が非常に大きいため，元の剝片の大きさを把えることは不可能である。フレイクは最大長が1.5cmから3cmあたりに密な分布を示し，その平均値は23.25mm，幅は10mm～20mmに密で平均値は13.82mmである。最大のものでも長さ47mm，幅20mm前後でしかも他を圧して大形となる。比較資料がないため何ともいいがたいが，高い破損率を考慮に入れてもかなり小さな数字ではなかろうか。このことは，石鏃，石核の小ささとも相対応するものである。

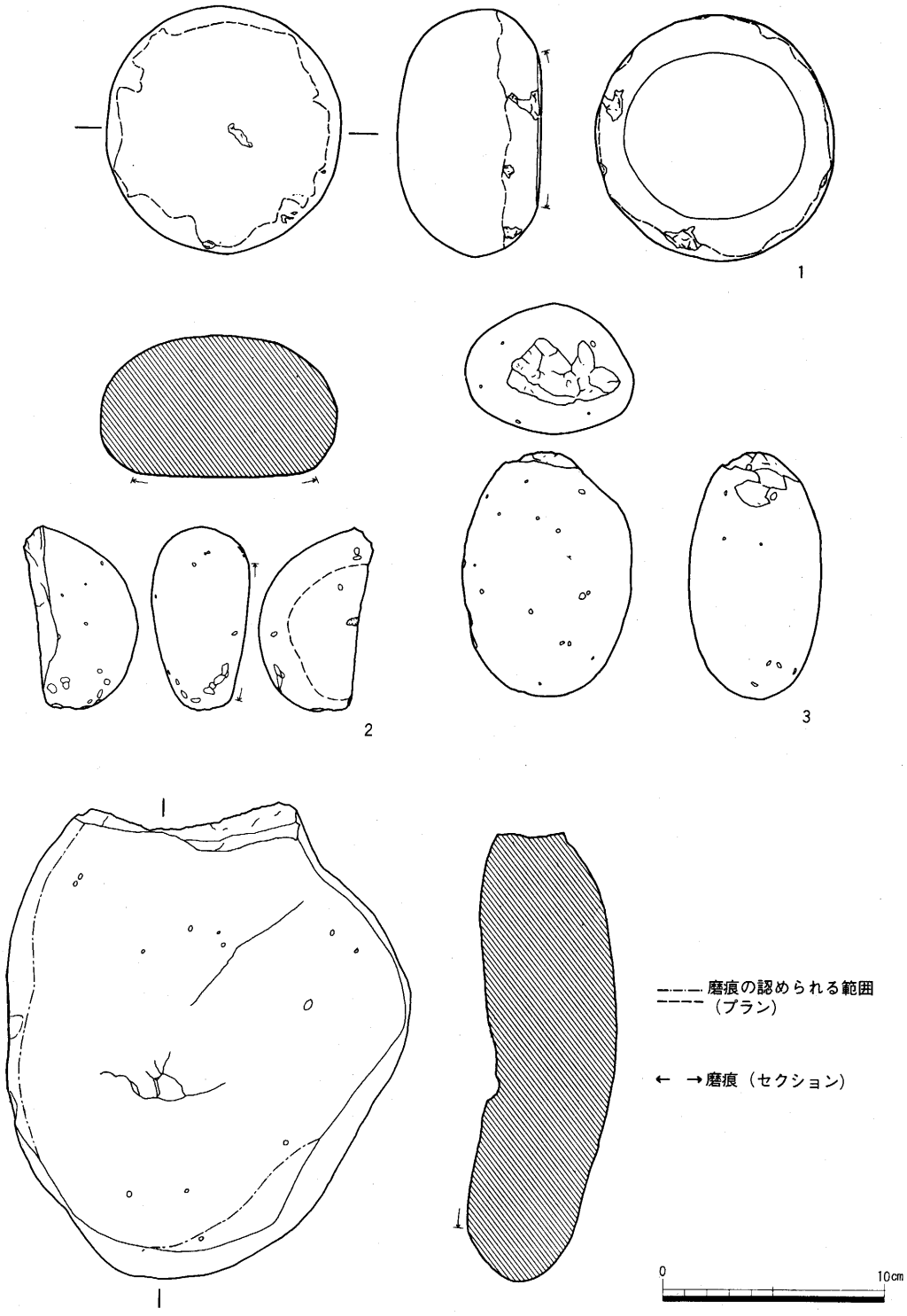



図45　石器実測図（磨石1･2，敲石3，石皿4）　S＝1/3

**磨り石・敲石・石皿**（図45）（図版九,1）

本遺跡からは3点の磨り石（うち1点は取り上げず），敲石，石皿各1点が出土した。このうち，取り上げていない磨り石を含む2点の磨り石が縄文時代の遺構に伴なった他は，いずれも表採品である。

1はF—8グリッドⅢb層から出土した磨り石で，磨痕は上下両面に認められるが，下面を主に使用したとみられ，平滑で光沢をもつ。下面以外の部位では打痕も観察される。

2はF—20グリッドで表採した磨り石で半裁欠損している。下面は平坦で中央には小さな凹みが認められるが磨痕は明確でない。側縁部下端では打痕が観察される。

3はF—16グリッドで表採した敲石である。上端および左右の側縁部に打痕が認められ，特に右側縁上端は，敲打によって本来の形状を失なっている。

4はG—17グリッドで表採した石皿で，不整楕円形を呈し，上面はゆるやかな凹みをもち，磨面が認められる。

以上，1から4のうち，1は細粒花崗岩製，2～4は安山岩製と考えられる。

**骨角器**（図46）

図46はF—18グリッドⅠb層から検出したもので，長さ12.8cm，最大径2.1cmを測る。鹿角製と考えられ，表面は基部約3cmを残して入念に磨かれている。端部には小さなえぐりが施され，ヘラ状を呈する。

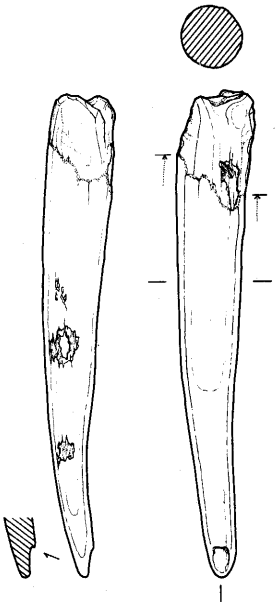


図46 骨 角 器

## 2．小　　結

今回の調査は，発掘面積が非常に小さく，よって，出土石器量も考察を行うには充分とはいえない。また，周辺地域における同時期の遺跡の石器についての詳細な報告例はなく，比較検討も非常に難しいが，ここであえて簡単な考察を試みてみたい。

○石材について

石材は，大部分がサヌカイトであるが，黒曜石製の石鏃1点，フレイク3点も出土している。サヌカイトはおそらく瀬戸内沿岸からの搬入，黒曜石は肉眼観察ではあるが，島根県隠岐産のものと考えられる。こうした大多数のサヌカイトにわずかの黒曜石を含む石材の組合せは，隣接の帝釈峡遺跡群においても同様であり，当時の中国地方山間部における他地域との交流をうかがわせる。また黒曜石に関しては，入念な水洗にもかかわらず，小さいチップは一点も出土しなかったのは興味深い。総量でわずか4点の出土であり不確実ではあるが，サヌカイトの場合のチップの比率の高さから考えると，黒曜石は大きな母岩の段階で持

ちこまれ本遺跡で加工されたのではなく，成品あるいはフレイクのかたちで持ちこまれた可能性も考えられよう。

○製作技術について

石核・フレイクからみた剝片剝離技術については，石核の項で簡単にふれたが，特定の製作技法はみられず，その場その場で目的に適した剝片を剝いでいったと考えられる。これは，製作される石器が，石鏃や不定形のスクレイパーであり，それらが素材に大きく左右されないことが一因かもしれない。ただしフレイクには，分厚なものや，剝離が階段状になっているものは少なく，剝片剝離には，かなりの注意が払われていたことがうかがえる。

○遺跡の性格について

遺跡の性格を考えるために石片・石器の特徴のなかで参考になる事項を挙げてみたい。

①石鏃を始めとして石器が小形である。

②石鏃の破損率が高い。

③石核が小形で，しかも剝片を取りつくしている。

④フレイクが小形である。

⑤フレイクの二次加工率，欠損率が高い。

これらの特徴は，石材の稀少性の結果として理解できるであろう。即ち，石材の不充分さから石器，石核，石片が小形になり，またあらゆる剝片を利用しようと試みた結果，フレイクの二次加工，破損率が高くなる。同様の理由から石鏃の破損率の高さ，原石，石核等で剝片剝離が可能なものは全く残されていなかったことも理解できる。そしてこの事は同時に利用できる石器や石核は他に持ち出された可能性—製作者の移動性—をも暗示する。即ち，この2点，石材の稀少性，製作者の移動の可能性は，従来論じられてきたような，岩陰遺跡をキャンプサイト的性格とする見解の一つの裏付けとなるであろう。おそらく，当時の人々は石材を携え細々と石器を製作しながら，こうした岩陰遺跡等を転々と移動したのではなかろうか。ただ，こうした仮説は周辺の開地遺跡や岩陰遺跡等においても同様の作業を行い，比較検討することによって初めて確かめることができるものである。今後の調査，研究に期待したい。

以上不充分な材料のなかで，簡単に考察を加えてみたが，それを通じて比較資料の少なさが感じられた。現在，縄文・弥生時代の石器研究は石鏃・石匙等の製品が取り上げられるのみで，フレイク・チップ類は，ほとんどその対象から除外されている。今後は，製品ではない石片類をも含めて，総合的な石器研究に対する認識を高めていく必要があろう。

## 表3　石鏃観察表

| No. | 遺物番号 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 欠損部位 古 | 欠損部位 新 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F11−W4 | サヌカイト | 15.20 | 11.70 | 2.25 | 0.36 | | |
| 2 | F12−38 | 〃 | (13.95) | 15.55 | 2.90 | 0.46 | 先端 | |
| 3 | F12−W4 | 〃 | 16.60 | 13.40 | 2.40 | 0.30 | | |
| 4 | F12−W8 | 〃 | 19.90 | 12.40 | 4.00 | 0.67 | | |
| 5 | H14−19 | 〃 | 20.85 | (10.40) | 1.70 | 0.30 | 片脚 | |
| 6 | H14−W16 | 〃 | (13.95) | 16.40 | 4.85 | 1.10 | 先端 | |
| 7 | H14−W22 | 〃 | (17.55) | 14.15 | 2.80 | 0.54 | | 先端 |
| 8 | H14−W22 | 〃 | 21.75 | ( 7.60) | 3.20 | 0.48 | 片脚 | |
| 9 | I14−P1 | 〃 | (18.30) | 17.80 | 2.75 | 0.84 | 先端 | |
| 10 | I14−P1−3 | 〃 | 17.00 | 14.40 | 2.80 | 0.41 | | |
| 11 | I14−W3 | 〃 | 24.10 | (10.10) | 2.75 | 0.46 | 片脚 | |
| 12 | F16−W3 | 〃 | 13.70 | (10.75) | 2.80 | 0.25 | 片脚 | |
| 13 | G17−75 | 〃 | 19.20 | 17.45 | 3.05 | 0.72 | | |
| 14 | G17−W2 | 〃 | 11.80 | 12.80 | 2.00 | 0.20 | | |
| 15 | F18−72 | 〃 | (17.00) | (10.90) | 3.80 | 0.62 | 先端・両端 | |
| 16 | F18−73 | 〃 | 17.45 | (16.40) | 2.85 | 0.73 | | 片脚 |
| 17 | F18−P | 〃 | (18.05) | (13.10) | 3.10 | 0.53 | 先端・片端 | 片脚先端 |
| 18 | F18−P | 〃 | 9.10 | 9.40 | 2.00 | 0.11 | | |
| 19 | F18−P | 〃 | (19.70) | (13.55) | 2.60 | 0.50 | 先端・片脚 | |
| 20 | F18−P | 〃 | (14.85) | (15.60) | 3.60 | 0.49 | 片脚先端 | 片脚先端 |
| 21 | F18−P | 〃 | 14.00 | 8.85 | 1.80 | 0.16 | | |
| 22 | F18−P | 〃 | (15.00) | (11.80) | 3.40 | 0.44 | | 片脚 |
| 23 | F18−P | 〃 | 14.15 | (11.15) | 2.55 | 0.29 | 片脚、片脚先端 | |
| 24 | F18−P | 〃 | (12.70) | (12.25) | 3.15 | 0.50 | | 先端、両脚 |
| 25 | F18−P | 〃 | (12.70) | ( 9.85) | 2.30 | 0.26 | 片脚 | 片脚 |
| 26 | F18−P | 〃 | (10.85) | 14.70 | 2.15 | 0.39 | 先端、片脚先端 | |
| 27 | F18−P | 〃 | (15.55) | (12.00) | 2.80 | 0.54 | 先端、片脚<br>片脚先端 | |
| 28 | F18−P | 〃 | ( 8.10) | (13.20) | 2.95 | 0.38 | | 先端、片脚先端 |
| 29 | F18−P | 〃 | (12.35) | ( 8.80) | 1.80 | 0.19 | 片脚のみ残存 | |
| 30 | F18−W3 | 〃 | (14.95) | (11.80) | 3.20 | 0.54 | | 先端、片脚先端 |
| 31 | F18−W3 | 〃 | (13.85) | 14.50 | 3.40 | 0.51 | | 先端 |
| 32 | F18−W3 | 〃 | (12.20) | (12.85) | 2.70 | 0.30 | 両端先端 | 先端 |
| 33 | F20−91 | 〃 | (15.00) | 17.45 | 5.00 | 1.16 | 先端 | |
| 34 | F20−103 | 黒曜石 | 17.40 | 13.35 | 4.50 | 0.61 | | |
| 35 | F20−W1 | サヌカイト | (20.10) | (14.30) | 4.05 | 0.86 | | 先端、片脚<br>片脚先端 |
| 36 | F20−W1 | 〃 | (12.15) | (10.55) | 2.15 | 0.20 | 両脚先端 | 先端 |
| 37 | F20−W1 | 〃 | 16.75 | (12.30) | 3.00 | 0.36 | | 片脚 |
| 38 | F20−W2 | 〃 | ( 7.50) | ( 6.20) | 1.55 | 0.08 | 片脚のみ残存 | |
| 39 | E21・22−表採 | 〃 | (18.60) | (15.30) | 2.85 | 0.46 | 先端、片脚<br>片脚先端 | |
| 40 | E21・22−表採 | 〃 | 16.75 | (12.25) | 2.40 | 0.41 | | 片脚 |

(　) は、欠損しているものの最大長および最大幅。

## 表4　スクレイパー観察表

| No. | 遺物番号 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | H14−W9 | サヌカイト | (28.60) | (16.65) | 5.50 | 欠損 |
| 2 | F11−W9 | 〃 | 31.85 | (27.30) | 5.70 | 欠損 |
| 3 | F12−19 | 〃 | 54.45 | 22.15 | 6.90 | |
| 4 | F18−49 | 〃 | 42.55 | 21.30 | 5.70 | |

(　) は、欠損しているものの最大長および最大幅。

## 表5 その他の石器観察表

| №. | 遺物番号 | 石　　材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F11−W4 | サヌカイト | (18.75) | ( 5.30) | 4.30 | 欠損 |
| 2 | F18−68 | 〃 | (12.30) | (13.25) | 1.90 | 欠損 |
| 3 | F18−W8 | 〃 | 12.80 | 18.40 | 2.30 | |
| 4 | F20−126 | 〃 | (15.20) | (21.85) | 4.35 | 欠損 |

(　) は、欠損しているものの最大長および最大幅。

## 表6 楔形石器観察表

| | グリッド | 取上№. | 長 | 幅 | 厚 | 裁断面の有無 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | G17 | 39 | 2.32 | 1.61 | 0.72 | ○ | |
| 2 | F20 | 78 | 3.10 | 1.92 | 0.59 | ○ | |
| 3 | F20 | 131 | 3.09 | 1.63 | 0.75 | ○ | |
| 4 | F20 | W2 | 2.74 | 1.72 | 0.68 | ○ | |
| 5 | G17 | 52 | 4.81 | 1.54 | 1.18 | ○ | 削片 |
| 6 | G17 | W3 | 1.85 | 0.60 | 0.51 | ○ | 〃 |
| 7 | G17 | W2 | 2.02 | 0.94 | 0.46 | ○ | 〃 |
| 8 | F20 | 132 | 2.36 | 1.21 | 0.47 | ○ | 〃 |
| 9 | F20 | 66 | 3.62 | 0.85 | 0.81 | ○ | 〃 |

## 表7 フレイク観察表

| | グリッド | 取上№. | 長 | 幅 | 厚 | 二次加工 | 破損 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F11 | 126 | 2.10 | 1.90 | 0.50 | — | ○ | |
| 2 | | 147 | 2.30 | 1.50 | 0.20 | △ | — | |
| 3 | | W4 | 2.40 | 1.50 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 4 | | P | 2.40 | 0.85 | 0.25 | — | ○ | |
| 5 | | W2 | 2.45 | 0.70 | 0.40 | — | ○ | |
| 6 | | W6 | 1.70 | 1.50 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 7 | | 130 | 2.00 | 0.90 | 0.50 | ○ | ○ | |
| 8 | | 78 | 1.95 | 1.60 | 0.60 | ○ | ○ | |
| 9 | G11 | W2 | 1.88 | 1.70 | 0.27 | ○ | — | |
| 10 | | W1 | 1.60 | 1.41 | 0.29 | ○ | ○ | |
| 11 | | 60 | 2.19 | 1.40 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 12 | | 50 | 1.89 | 1.62 | 0.29 | ○ | ○ | |
| 13 | | W2 | 1.78 | 0.92 | 0.41 | — | ○ | |
| 14 | | 50 | 1.50 | 1.32 | 0.40 | — | ○ | |
| 15 | | W2 | 1.58 | 1.00 | 0.26 | — | ○ | |
| 16 | F12 | 23 | 2.00 | 1.12 | 0.35 | ○ | ○ | |
| 17 | | | 1.84 | 1.24 | 0.41 | ○ | ○ | |
| 18 | | W4 | 1.92 | 1.44 | 0.53 | ○ | ○ | |
| 19 | | 31 | 2.38 | 1.85 | 0.42 | ○ | ○ | |
| 20 | | W4 | 1.90 | 1.70 | 0.39 | △ | ○ | |
| 21 | | W4 | 2.74 | 1.35 | 0.48 | △ | ○ | |
| 22 | G12 | W5 | 2.22 | 1.30 | 0.46 | ○ | ○ | |
| 23 | | W9 | 2.00 | 1.61 | 0.53 | ○ | ○ | |
| 24 | | W8 | 2.20 | 1.17 | 0.49 | ○ | ○ | |
| 25 | | W8 | 1.73 | 1.21 | 0.25 | △ | ○ | |
| 26 | | W5 | 2.48 | 0.91 | 0.51 | ○ | — | |

| | グリッド | 取上No. | 長 | 幅 | 厚 | 二次加工 | 破損 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | | 136 | 1.67 | 1.65 | 0.22 | △ | ○ | |
| 28 | H13 | W 5 | 1.75 | 1.50 | 0.30 | — | ○ | |
| 29 | | W 9 | 2.10 | 1.00 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 30 | | W 2 | 2.05 | 1.10 | 0.50 | ○ | ○ | |
| 31 | | W | 2.00 | 1.45 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 32 | | W15 | 2.00 | 0.80 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 33 | | W16 | 2.60 | 1.15 | 0.50 | ○ | ○ | |
| 34 | H14 | W 1 | 2.55 | 1.40 | 0.80 | — | ○ | |
| 35 | | W16 | 1.95 | 1.60 | 0.60 | ○ | ○ | |
| 36 | | W 9 | 2.30 | 1.75 | 0.55 | ○ | ○ | |
| 37 | | W21 | 1.69 | 1.18 | 0.25 | ○ | ○ | 黒曜石製 |
| 38 | I 14 | P 1 | 2.90 | 2.30 | 0.70 | ○ | ○ | |
| 39 | | P 1 | 1.95 | 1.25 | 0.30 | ○ | — | |
| 40 | | P 1 | 1.80 | 1.70 | 0.70 | ○ | ○ | |
| 41 | | W 3 | 2.05 | 1.25 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 42 | | P 1 | 2.35 | 1.35 | 0.35 | — | ○ | |
| 43 | | P 1 | 1.75 | 1.70 | 0.40 | — | ○ | |
| 44 | | P 1 | 2.00 | 1.30 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 45 | | P 1 | 1.50 | 1.50 | 0.25 | △ | ○ | |
| 46 | I 14 | P 1 | 2.30 | 1.10 | 0.45 | — | ○ | |
| 47 | | P 1 | 2.30 | 1.40 | 0.30 | ○ | — | |
| 48 | | P 1 | 1.95 | 1.50 | 0.55 | ○ | ○ | |
| 49 | G17 | W 2 | 2.97 | 1.56 | 0.51 | ○ | ○ | 石鏃未製品 |
| 50 | | 42 | 2.60 | 1.42 | 0.33 | ○ | ○ | |
| 51 | | W 2 | 2.98 | 2.10 | 0.39 | △ | ○ | |
| 52 | | W 2 | 1.92 | 1.10 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 53 | | 122 | 2.00 | 1.51 | 0.35 | △ | ○ | |
| 54 | | W 1 | 2.18 | 1.79 | 0.32 | ○ | ○ | |
| 55 | | W 4 | 2.21 | 1.81 | 0.21 | ○ | ○ | |
| 56 | | W 4 | 2.36 | 1.47 | 0.70 | ○ | ○ | |
| 57 | | W 3 | 3.60 | 1.95 | 0.98 | ○ | ○ | |
| 58 | | 126 | 2.85 | 2.12 | 0.84 | ○ | ○ | |
| 59 | | 65 | 2.30 | 1.44 | 0.41 | ○ | ○ | |
| 60 | | W 2 | 1.90 | 1.59 | 0.56 | ○ | ○ | |
| 61 | | 45 | 2.55 | 1.80 | 0.64 | ○ | ○ | |
| 62 | | | 2.60 | 1.11 | 0.51 | ○ | ○ | |
| 63 | F18 | P | 1.95 | 1.45 | 0.35 | ○ | ○ | |
| 64 | | P | 1.95 | 0.90 | 0.42 | ○ | ○ | |
| 65 | | P | 2.00 | 1.05 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 66 | | P | 2.00 | 1.58 | 0.30 | — | ○ | |
| 67 | | P | 1.80 | 1.10 | 0.60 | ○ | ○ | |
| 68 | | P | 1.60 | 1.05 | 0.90 | ○ | ○ | |
| 69 | | P | 1.92 | 1.40 | 0.60 | ○ | — | |
| 70 | | P | 2.00 | 1.30 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 71 | | P | 1.70 | 1.45 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 72 | | P | 1.70 | 1.30 | 0.42 | ○ | ○ | |
| 73 | | 61 | 4.10 | 2.50 | 0.58 | — | ○ | |
| 74 | | | 3.32 | 1.88 | 0.45 | ○ | — | |
| 75 | | 27 | 4.75 | 2.13 | 0.80 | — | — | |
| 76 | | P 1 | 3.10 | 1.80 | 0.56 | ○ | ○ | |
| 77 | | P | 2.80 | 1.50 | 0.50 | ○ | ○ | |
| 78 | | P | 2.47 | 1.40 | 0.60 | ○ | ○ | |
| 79 | | P | 3.08 | 1.40 | 0.42 | ○ | ○ | |
| 80 | | P 1 | 2.50 | 2.40 | 0.85 | ○ | ○ | |
| 81 | | P 1 | 3.22 | 1.50 | 0.42 | ○ | ○ | |
| 82 | | P 1 | 2.55 | 1.48 | 0.75 | ○ | ○ | |

| | グリッド | 取上No. | 長 | 幅 | 厚 | 二次加工 | 破損 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 83 | | P 1 | 1.90 | 1.70 | 0.55 | ○ | ○ | |
| 84 | | P 1 | 2.90 | 1.20 | 0.40 | — | ○ | |
| 85 | | P 1 | 2.38 | 1.25 | 0.50 | — | ○ | |
| 86 | | 59 | 1.78 | 1.75 | 0.39 | ○ | — | |
| 87 | | P 1 | 2.00 | 1.42 | 0.35 | ○ | ○ | |
| 88 | | P 1 | 2.38 | 1.29 | 0.50 | ○ | ○ | |
| 89 | | P 1 | 2.60 | 1.39 | 0.57 | ○ | ○ | |
| 90 | | P | 2.80 | 1.18 | 0.50 | — | ○ | |
| 91 | F18 | P | 2.42 | 1.14 | 0.50 | △ | ○ | |
| 92 | | P | 2.86 | 1.05 | 0.60 | ○ | ○ | |
| 93 | | P | 2.45 | 2.41 | 0.81 | ○ | ○ | |
| 94 | | P | 2.02 | 1.40 | 0.37 | ○ | ○ | |
| 95 | | P | 2.01 | 1.45 | 0.30 | ○ | ○ | |
| 96 | | P | 2.48 | 1.28 | 0.41 | ○ | ○ | |
| 97 | | P | 2.10 | 1.12 | 0.69 | ○ | ○ | |
| 98 | | P 1 | 2.21 | 1.93 | 0.85 | ○ | ○ | |
| 99 | | W 3 | 2.55 | 1.20 | 0.33 | — | ○ | |
| 100 | | 42 | 3.05 | 1.31 | 0.74 | ○ | ○ | |
| 101 | | 41 | 1.80 | 1.30 | 0.61 | ○ | ○ | |
| 102 | | 66 | 2.78 | 1.92 | 1.10 | ○ | ○ | |
| 103 | | W 3 | 3.20 | 1.51 | 0.56 | △ | — | |
| 104 | | 108 | 2.11 | 1.50 | 0.43 | ○ | ○ | |
| 105 | | P | 2.01 | 1.18 | 0.50 | ○ | — | 黒曜石製 |
| 106 | F20 | 119 | 2.71 | 1.82 | 1.03 | ○ | ○ | |
| 107 | | 135 | 3.42 | 2.20 | 0.41 | △ | ○ | |
| 108 | | 62 | 1.65 | 1.60 | 0.31 | ○ | ○ | |
| 109 | | 104 | 2.50 | 1.95 | 0.44 | ○ | ○ | |
| 110 | | W 5 | 1.67 | 1.31 | 0.17 | △ | — | |
| 111 | | W 2 | 2.26 | 1.91 | 0.46 | ○ | ○ | |
| 112 | | 46 | 2.21 | 1.40 | 0.52 | ○ | ○ | |
| 113 | | W 2 | 2.50 | 1.56 | 0.35 | ○ | ○ | |
| 114 | | W 2 | 1.79 | 1.59 | 0.54 | ○ | ○ | |
| 115 | | 125 | 1.27 | 1.13 | 0.53 | △ | — | |
| 116 | | W 4 | 1.54 | 0.98 | 0.51 | — | ○ | |
| 117 | | W 4 | 1.40 | 1.17 | 0.63 | ○ | ○ | |
| 118 | | W 2 | 1.75 | 1.32 | 0.20 | — | ○ | |
| 119 | | W 2 | 2.09 | 1.24 | 0.36 | ○ | ○ | |
| 120 | | 60 | 1.73 | 1.38 | 0.19 | ○ | ○ | |
| 121 | | 124 | 2.12 | 0.97 | 0.20 | — | ○ | |
| 122 | | W 2 | 1.71 | 1.34 | 0.26 | △ | ○ | |
| 123 | | 98 | 3.12 | 1.54 | 0.29 | — | ○ | |
| 124 | | W 2 | 2.22 | 1.20 | 0.41 | ○ | ○ | |
| 125 | | W 2 | 2.10 | 0.99 | 0.49 | ○ | ○ | |
| 126 | | 84 | 3.75 | 1.59 | 0.58 | ○ | ○ | |
| 127 | | W 4 | 1.78 | 1.11 | 0.38 | ○ | ○ | |
| 128 | E21 | 5 | 1.73 | 1.58 | 0.40 | ○ | ○ | |
| 129 | E21・22 | | 1.37 | 1.24 | 0.29 | ○ | — | 石鏃未製品 |
| 130 | | | 1.92 | 1.36 | 0.44 | ○ | ○ | |
| 131 | | | 1.55 | 0.93 | 0.61 | — | ○ | |
| 132 | | | 2.12 | 1.69 | 0.36 | ○ | — | |
| 133 | | | 1.90 | 1.42 | 0.21 | ○ | ○ | |
| 134 | | | 1.60 | 1.44 | 0.68 | — | ○ | |
| 135 | | | 1.79 | 1.04 | 0.32 | — | — | 黒曜石製 |

二次加工欄△は、微細な歯こぼれ状の剥離がみられるもの
石材は特記しない場合、サヌカイトである。

# 8．出土遺物Ⅲ　近世遺物

当岩陰では，近世遺物と考えられる百片近い土器片および古銭，鉄器片等が表土からⅡ層中にかけて検出された。それぞれのうち，いくつかをあげて述べてみたい。

〈土　器〉

百片近い土器片は，陶磁器を数片含むほかは，いずれも内外黒色を呈する瓦質のもので，江戸時代以降，里圧町大原付近で焼かれていた，いわゆる「大原焼」と思われるものである（藤田憲司氏御教示による）。

1は，口径10.0cmを計る小形の壺形土器である。内外とも黒色で，胎土には2mm以下の砂粒を含み，焼成は良好である。外面には，肩部以下に型による円形浮文が施され，肩部から口縁部内面にかけてはロクロナデが，口縁以下の内面には粗いロクロナデの調整が施されている。

2は，1の壺とセットになると思われる蓋の破片である。色調・胎土とも1土器と同様で，内外ともロクロナデ調整が施されている。

土器外面の浮文には，円形浮文のほかに，二つの種類が認められる。3・4は，それぞれ花形の浮文のものである。両者とも1と同様な壺形土器の肩部破片と思われる。3は，内外黄褐

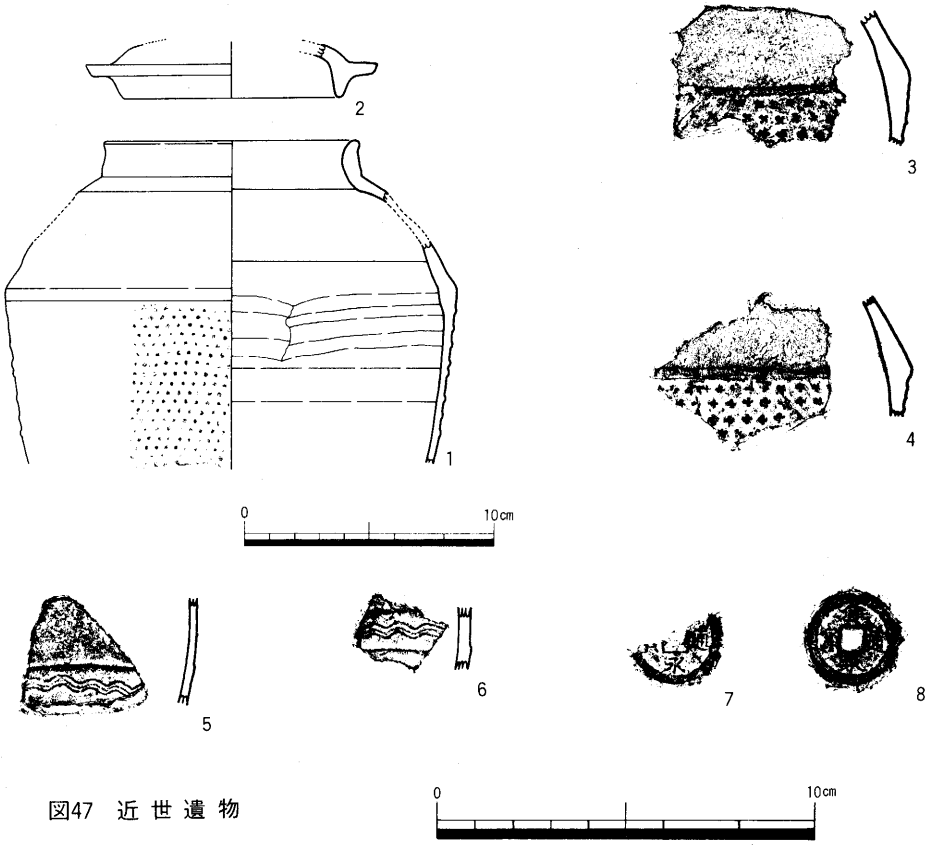



図47　近世遺物

色を呈し，焼成は不良，4は内外黒色を呈し焼成は良好，胎土，調整はそれぞれ，両者とも2㎜以下の砂粒を含み，内外面にロクロナデ調整が施されている。

5・6は，波状の浮文のもので，それぞれ内外黒色を呈し，焼成は良好，胎土には1㎜以下の砂粒を含み，内外ともロクロナデ調整が施されている。器形については不明である。

ほかに，細片でここには図示していないが，同じ「大原焼」の土鍋，注口片をいくつか確認している。

〈古銭〉

古銭は，青銅製のもの2枚と，鉄製のもの1枚，計3枚が検出された。7・8は，いずれも青銅製の寛永通宝で，狭い周縁をもち，古寛永と呼ばれるものである。裏面はいずれも無文である。7は，石灰の付着，緑青が著しいが，8は保存もよく，緑青も少ない。鉄製の古銭については，銹が著しく図示していないが，ほかの遺物の時期と考えあわせて，恐らく鉄寛永であろうと思われる。

# 9．出土遺物Ⅳ　動物遺体

## 4．動物遺体

出土量がもっとも多いのは貝類であるが，なかでもトウガタカワニナ科，カワニナ科の淡水産巻貝，キセルガイ科，ヤマタニシ科，モノアラガイ科，ベッコウマイマイ科，マイマイ科等の陸産巻貝が主体をしめる。しかしこの種の貝の属・種の同定は専門家によらねば困難である。ついで，カワシンジュガイ科，イシガイ科に属する淡水産２枚貝が多い。しかしこれも種の同定にもっとも決定的な特徴となる鉗歯部が保存されている例がすくなく，属・種の同定は困難である。ただし，カワシンジュ・ヌマガイの二種がふくまれていることは確実である。

**海産貝類**としてはツノガイ科の殻頂部の破片が１点発見されている。斧足類ではハマグリが２例発見されているほか，イタヤガイ科，ザルガイ科のものと考えられる破片が若干発見されている。

**甲殻類**ではイワガニ科と考えられるカニの爪（鋏脚）の破片が計３点出土している。モクズガニに対比される可能性が高いが，属・種の判定は専門家の見解を待つべきであろう。
属・種の判定は専門家の見解を待つべきであろう。

**両棲類**ではカエルがほぼ全域にわたって出土している。ただし量はかならずしも多くない。アカガエル級の大きさのものが多いが，ヒキガエル級のものも少数見られる。ただしカエルのサイズは性差が多いのでこの対比はなお検討を要する。

**爬虫類**ではカメ類が見られ，イシガメ亜科に属するものとスッポンをふくむ。前者は腹甲と左右の上腕骨をふくみ，後者は腹甲のみである。出土地点は下記の通り。

イシガメ亜科

上腕骨　（左）　F—18—P，（右）I—14 P１・２

腹　甲　　H—14　No５・No７・No８

F—18a　0017，F—18 No47，G—17 0021

I—13 No20，I—13 No17

F—16 W１，F—18 P（５点）

G—17 0064，G—17 0125，I—13 W８ 炉埋土

I—14 No33，H—12 No52，F—18　230

スッポン

F—18 W１，F—18a　0026，G—12 No49　G—12 No131

**鳥類**の出土量はきわめてすくない。科名の確定できたものとしてはワシ・タカ科の尺骨・中手骨が各１点（I—14 P１・２）出土しただけで，ほかにガン・カモ科と考えられる脛骨破片（G—17 W２　２層），科名不詳の上腕骨破片（H—12 No52）が見られるだけである。なお前記ワシ・タカ科の遺体はきわめて小形のものである。

**哺乳類**では絶対量から見れば，シカ・イノシシの遺体が圧倒的に多く，いずれかと言えばイ

ノシシがシカを上廻っている。しかし，最小個体数を算出してみると両者とも3～4個体でさほどの違いは見られない。シカ・イノシシともに東日本縄文期の標本にくらべると小形であり，とくにシカはニホンジカ（本州産）の現生種よりやゝ大きい程度である。シカ・イノシシの遺体の分布は下記の通り。

シカ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 角 | | F—16 | 016 | ($m_1$, $m_2$, $M_1$, $M_2$) |
| 上顎 | 左 | I—14 | No10 | (d) |
| | 〃 | F—18G | No63 | ($M_3$) |
| | 〃 | H—12 | No52 | ($P_1$) |
| | 〃 | F—18 | 130 | (C) |
| | 〃 | F—20 | W4 | ($M_1$) |
| 下顎 | 左 | I—14 | P1·2 | ($I_4$) |
| | 〃 | F—20W2 | | ($M_2$?) |
| | 〃 | F—18G | No63 | ($M_3$) |
| 下顎 | 右 | G—17W2 | 2層 | ($I_4$) |
| | 〃 | 試掘ピット | 3層 | ($P_2$) |
| 下顎 | 左 | G—17 | 0079 | (後板) } 幼 |
| | 右 | F—20 | 153 | ( 〃 ) } 幼 |
| 撓骨 | 左 | I—13 | No36 | } 近位端 |
| | | I—14 | P1・2 | } 近位端 |
| | 右 | F—20 | 143 | } 近位端 |
| | 左 | F—18 | 169 | } 遠位端 |
| | 右 | F—20 | 136 | } 遠位端 |
| 脛骨 | 右 | I—14 | P1・2 | (近位端) |
| 距骨 | 右 | G—17 | No47 | |
| 末節骨 | 左 | H—13 | 第2層 | No20 |
| 末節骨 | 左 | H—14 | No46 | |

イノシシ

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 上顎 | 左 | F—20 | 146 | ($m_1$, $m_2$) |
| | 右 | J—14 | P1—1 | (C) |
| | | G—17 | 37 | ($P_1$) |
| | | F—18G | 0055 | ($M_1$～$dM_3$) |
| | | F—18 | 188 | ($dM_1$) |
| | | I—14 | P1 | ($dM_3$) |
| 下顎 | 左 | H—13 | No52 | ($I_1$) |

I—14　P 1・2（$dI_2$）
I—14　P 1・2（$I_1$？）
J—14　P 1・2（C）
I—14　P 1・2（$P_1$）
F—18　112　（$M_1$）
F—18　155　（$i_1$～$m_2$）
F—18　Pit下暗褐色土（$m_3$）
F—18　129　（$m_2$）
F—18　114　（$m_1$）

頭蓋骨片（部位同定可能なもの）

左　I—14　No19　（眼高底）
　　F—18　225　（カン骨）
右　F—18　No136　（眼高上縁）
　　F—18　No228　（涙骨）　＞幼・接合
　　G—17　0037　（脳底）
　　G—18　224　（〃）

肩甲骨　左　F—9　No12
　　G—18　224
上腕骨　右　F—20　114
撓　骨　左　F—18　217
　　右　F—18　116
尺　骨　左　I—14　P 1・2
中手骨　右　F—20　No52
末節骨　左　F—18　222
寛　骨　左　F—18　229

シカ・イノシシのほかに，比較的多く見られるのはタヌキであり，下記の分布をしめしている。

頭　蓋　G—17　No108（ほぼ完全）
　　試掘ピット　3層
上　顎　左　I—14　P 1・2（C）
　　H—13　No52　（$P_{2\sim3}$）
　　右　F—18　W3　Pit下黄褐色土（$I_1$）
下　顎　右　F—18　W3　Pit下黄褐色土（$I_3$）
　　〃　〃　〃（$P_1$）
　　〃　〃　〃（$P_2$）
　　〃　〃　〃（$P_3$？）
　　同一個体？

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 800401 | F—18 | (C) |
| 肩甲骨 | 左 | F—18 | 151 | |
| 尺　骨 | 左 | F—18 | №156 | |
| | 右 | H—13 | № 15 | |
| | | F—20 | №109 | |
| 脛　骨 | 左 | I—13 | № 12 | |

このほか，埋葬されたと考えられるほぼ完全なイヌの遺体（小型，若年のもの）が，F—9 №20として採集されている。同一個体に属すると考えられる骨片は多少周辺部に散布している。また，ニホンザルの歯牙・大腿骨が検出されている。左右の上顎$I_1$がそれぞれH—12 №52，H—13 №45に，上顎$I_2$がI—14 P1・2に見られ，同一個体に属すると思われる上顎左Cと左大腿骨がF—18 №32 に見られる。ただしこの犬歯，大腿骨はきわめて新しいものの可能性がある。

以上の概況に，若干の所見をつけくわえておきたい。動物相の構成は広島県帝釈峡の諸例によく似ているように思われる。とくに小形哺乳類にキツネが含まれず，むしろタヌキが多い点は共通する特徴と言える。松島湾沿岸の諸貝塚でもキツネとタヌキの出現頻度は補完的な関係にあることが知られている。これは狩猟活動の内容にかかわると言うよりはむしろ附近の動物相を反映しており，とくにキツネの主要な食糧となるゲッ歯類の生棲量に関係しているものと思われる。

出土した動物遺体のうち，狩猟・採集の対象となったとは考えられぬものも含まれている。陸産・淡水産の腹足類，カエル，ネズミ等はこの類である。カエル・ネズミは洞穴で越冬し，あるいは棲処としていたもののうち自然死した遺体と考えてよいであろう。もちろん両者とも食用に供された場合も否定はできないが，主要な捕獲対象であったとは考えられない。ともに小形であるから捕食されれば骨に火熱をうけた痕跡をとどめるものがふくまれている筈であるが，そのような例は見られない。

海産の貝類が検出されているにもかかわらず，海産魚の遺体としてはタイもしくはカサゴ類の背棘が1点検出されたにすぎない。これも帝釈峡の動物相と類似する点である。北上山地の洞穴の資料では海産魚のみならず，海獣の遺体まで出土する場合がある。このちがいは，中国山地周辺・北上山地両地域における地域集団のあり方のちがいを反映しているのであろう。

これらの動物遺体のうち，縄文土器に伴存したことが確実と思われるものは，シカ，イノシシであり，他の多くは，表層ないし攪乱層で検出されたことから，所属時期を特定することはできない。但し，出土状況及び風化の程度で，明らかに近代のものとみなしうるものは，カメ，スッポン，犬及び陸産貝類の多くである。

# 10. む　す　び

1

本岩陰遺跡発掘の目的のひとつに，岩陰に居住した集団の単位とその性格の究明があったが，予定した日限と，予想しなかった近世・近代の遺構と攪乱に遭遇したことによって，中断を余儀なくされ，充分目的にそう資料を得ることができなかった。

本岩陰の内岩庇内の空間のおよそは，左右の周辺部を入れて幅約33m，奥行約3mをはかる。現在，奥行がほとんどないF—22付近で東西に二分されているが，そのうち東部分は発掘前の試掘によって遺物の出土がみられず，遺跡外あるいはかりに遺跡の一部としても主要居住区でないと判断された。今回の発掘は西部分について行なわれたが，この場合も左右の端部付近には遺物の出土が極少で，遺構もみとめられず，主要居住空間は，西部分の中央，幅にして10mないし12，3m，奥行約3mと考えられる。この広さは，やや大形の竪穴住居一軒分にほぼ相当する。とすると，通常縄文時代集落と考えられているものにくらべ，はなはだ小さいことになる。もちろん調査はなお全面に及ばず，徹底的な発掘も未だしの現在，決定的なことはいいがたいが，以下ひとつの見通しを述べて，この第一次調査のむすびとしたい。

縄文時代の洞穴・岩陰遺跡についてその居住空間を限定するのに成功したのは，帝釈峡遺跡群発掘調査団による名越岩陰の発掘[(1)]であろう。すなわち調査を担当した川越哲志は，柱穴の列が「岩廂の直下あるいはそれに近い位置に，部分的ではあるが廂に沿ってみとめられ」，穴の「直径13cm前後，深さ15～20cmで，各柱穴間の距離は10～15cmでかなり密である。……これらの柱穴列によって区別される岩陰内の広さは約12m²で，縄文時代後期の竪穴住居址1軒分の平面積とあまり大きな差はないとみてよいであろう」と述べている。このような小範囲の居住面積の洞穴岩陰は，帝釈峡遺跡群の中にも，ほかに猿穴岩陰遺跡，豊松堂面洞窟遺跡，戸宇牛川岩陰遺跡などをあげることができる。猿穴岩陰遺跡の居住可能面積は推定約20m²以下，豊松堂面洞窟遺跡で15～18m²，戸宇牛川岩陰遺跡[(2)]もまた，推定復原した最大限でも25m²，いずれも，径5～6m程度の竪穴住居址の面積にほぼ相当する。規模が大きいといわれる観音堂洞窟もまた，「主な生活面は，この岩廂内の約23m²の三角形もしくは扇形に近い部分であったと考えられる」[(3)]と述べられているので，遺物が比較的豊富とはいえ，けっして大規模なものでなく，上記諸例と大差ない。そのほか，帝釈峡遺跡群調査団によって調べられた十数ケ所に上る洞穴・岩陰の大部分もこれとほぼ大同小異で，小規模といえる。

ところが，すべてがそうであるわけではない。寄倉岩陰だけは上記と異なりきわめて大規模である。[(4)]間口約40m，奥行は推定約8m，間口の南側約10mほどは埋葬区およびその周辺として土器石器などの遺物は少ないので，[(5)]それを除くと30m×8mとなる。これでも上記とくらべると大規模で，約10倍の面積となる。食料残骸をふくめた出土遺物もけたちがいに多く，その包含層も厚く，また早期押型文以来黒土BⅡ式に至る各時期の遺物が層位的に把えられるなど

の点でも他と異なる。

本権現谷岩陰は約30数㎡で，小規模な部類に入る。先年発掘した川上町原瀧山岩陰もまた小規模である。

このようにみてくると，大規模洞穴ないし岩陰は，ごく稀又は少数で，小規模なものがほとんどであるということになる。もちろん小規模にもいろいろあるわけであるが，ここではその間の差は重視しない。問題となるのは，大規模遺跡と小規模遺跡の関係であり，小の単位をどうとらえるかにあろうかと思う。

2

和島誠一の論文「原始聚落の構成」[6]以来，一般に縄文集落は数軒ないし十数軒で構成され，共同体としての強固なまとまりを保持していて個々の竪穴住居に表現される単位の自立性はないと理解されているが，その点で，本遺跡を含めた小規模岩陰・洞穴をみるとどういうことになろうか。たしかに猿穴岩陰のように「石鏃２，煮沸用の小形土器１に少量の動物・淡水産貝」といったわずかな遺物をみせるだけの「キャンプ・サイト」もあろうが，[7] 多くの場合，遺物はより豊富で炉址もあり，少くとも一定期間の居住を想わせる。このことは，ほぼ竪穴住居一軒分（あるいは二軒分でもよい）に相当する数の人々が，少なくとも一定期間分散して生産活動に従っていたことを示すものである。竪穴一軒分がそのまま，岩陰・洞穴に居住したのか，ある基準で集落内の人々の組み合わせがあったのかについては，おそらく前者であろうと推定されるが，今後の課題のひとつとしたい。いずれにしても少なくとも生産・消費そしておそらくは貯蔵を一定期間共にする小単位であったことは確かといえるだろう。これら小遺跡では，寄倉岩陰のように各時期の遺物が存在するのとちがって，たとえば前期が欠けたり，またそれぞれのうちのある時期のものが欠けたりしていることが一般である。

さてこの小単位が自立した存在であるとすると，彼等は点々と洞穴・岩陰をわたり歩いていたということになるが，それは，これまでの縄文集落研究からする集団規模とは合致しないし同じ地域にある寄倉岩陰のような大規模遺跡を理解できない。とすれば，次のように考えざるをえない。

寄倉岩陰のようなところに集結した集団が，ある期間，季節的又は偶発的に，分散して生産活動に従い，したがって生活を営んだということである。それが寄倉岩陰のように同じ地域にあったとは必ずしも限らず，瀬戸内沿岸あるいは日本海沿岸に居住する集団が，季節ごと，あるいは偶発的な「事件」ののちに，分散して河川ぞいに遡り，個別の活動の拠点を営んだことも考慮に入れておいてよい。

私は以前に，岡山県真庭郡蒜山原の調査書の一節「狩猟民の足跡」の中で，その遺物量の少なさ，遺構をほとんど残していないことなどから，中国山地帯の遺跡は，沿海集団の季節的一時的な足跡を示すとした。[8] その後も多くの遺物発見地は狭小で遺物が少ないことが明らかにされた。しかし中には北房町谷尻遺跡，[9] 広島県王貫峠遺跡など，先の寄倉岩陰と同じように大きな遺跡も稀にみられることも同時に知られるようになった。

その一方，沿海地域では，中国山地におけるような少量遺物発見地は，大形遺跡の数が多いほどには，多くない。すなわち，そこでは，大形遺跡が顕著であり，人々は多くの場合，集結生活していたと考えるほかないようである。[10] 山間地と，沿海地のこのちがいの意味するところは何か。

沿海地域では，集落をつくりうるだけの生産力が保持されていたこと，少なくともある季節ないし期間は，集落を保持しうる条件にあったこと，そこでは，分散して生産活動に従う必要のない，つまり本来的な集団構成をもちうる条件に恵まれていたわけである。

それにひきかえ，山間部では，小規模遺跡のほうがはるかに多い。帝釈地域においても14，5の小遺跡に対して大は1である。これは沿海部と逆の現象といえる。すなわち，そこでは，分散して，小単位で生産活動に従うことが，より有効であり，そうせざるろえなかった事情が働いていたのであろう。寄倉岩陰のような集落があることは，人々の随時的な集結がくりかえし行われたことはもちろん示しはするが，以上にのべたような小と大の関係における山間地域と沿海地域とのちがいを，地域差として捉えうるであろうか。そもそも分散するということは当時の経済段階からみて，少人数の単位がより有効に生産活動を果しえたからにほかならず，裏がえしにいうと，集落を常時的に保持することが，困難であったことを示すいっぽう，海浜地域では，一般的に集落を保持しえたということになる。

問題は，このようなちがいが，海浜地域と山間地域に縄文時代の早い頃から一貫して成立していたかどうかの点であろう。山は山，海は海だったのであろうか。山間地域の洞穴・岩陰遺跡で時に海浜性の遺物（たとえば貝殻）が発見されることがあることなどは，少なくとも両者の交流ないし，山間集団の海浜への帰来を示すだろう。この問題を直接に明らかにする資料はないが，このような相違は，各期とも同じ土器・石器などを山海共有していること，日本海と瀬戸内が著しい類似を示していることなどから考えて，山・海を別集団として扱うよりも，海洋資源として漁撈・貝採取などにも恵まれ，気候的にも好条件の海浜集団が季節的にあるいは随時的に山地に赴いたことを考えたい。その場合，日本海側からか瀬戸内側からかは判らないが，おそらく両者からだろう。また，山間に向った折の集結地であり同時に埋葬地でもあった場所として寄倉岩陰の如き遺跡があったと考えたらどうであろうか。日本における縄文時代の大小の集団の問題は，この方向で，結集的と分散的のちがいとみることによって明らかとなるかもしれない。このことは，帝釈だけでなく日本各地の山間部洞穴・岩陰遺跡において小規模性が圧倒的に多いことからも支持されるであろう。[11]

註

(1) 川越哲志「帝釈名越岩陰遺跡の第一次・第二次調査」『帝釈峡遺跡群の調査研究』3 1968

(2) 潮見浩・川越哲志「帝釈猿穴岩陰遺跡の調査」,川越哲志・福井万千「豊松堂面洞窟遺跡の調査」,川越俊一・乗安和二三「戸宇牛川岩陰遺跡の調査」何れも松崎寿和編『帝釈峡遺跡群』1976

(3) 潮見浩・藤田等・川越哲志「帝釈観音堂洞窟遺跡の第一次調査」『帝釈峡遺跡群の調査研究』2 1965 35P

(4) 大塚初重・潮見浩・難波宗朋「帝釈峡遺跡群の分布調査」『帝釈峡遺跡群』1976

(5) 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎他「帝釈寄倉岩陰遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』1976

(6) 和島誠一「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』1948（和島誠一『日本考古学の発達と科学的精神』1973に再録）

(7) 潮見浩・川越哲志 前掲書 147P

(8) 近藤義郎「狩猟民の足跡」『蒜山原…その考古学的調査』1953

(9) 高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第11集 1976

(10) 平井勝氏教示

(11) 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会『日本の洞穴遺跡』1967

**権現谷岩陰遺跡**

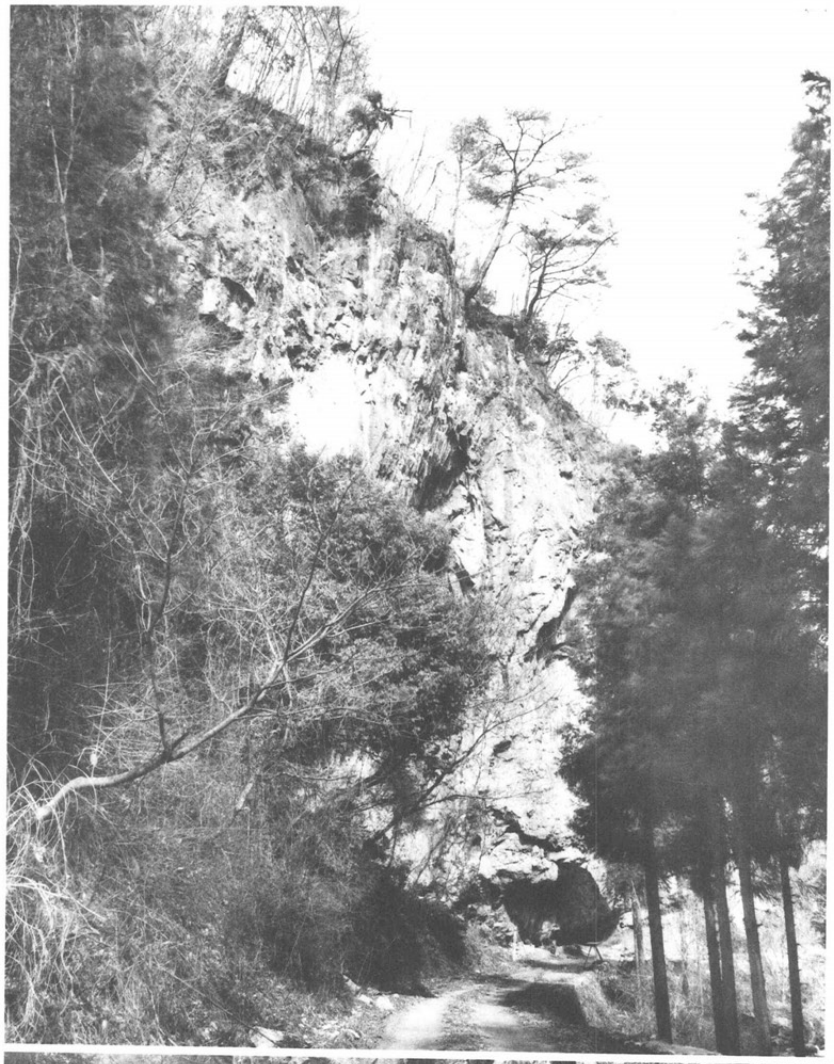
1983年２月28日印刷・発行

編集代表　近藤義郎Ⓒ

発 行 者　岡山県川上郡川上町教育委員会

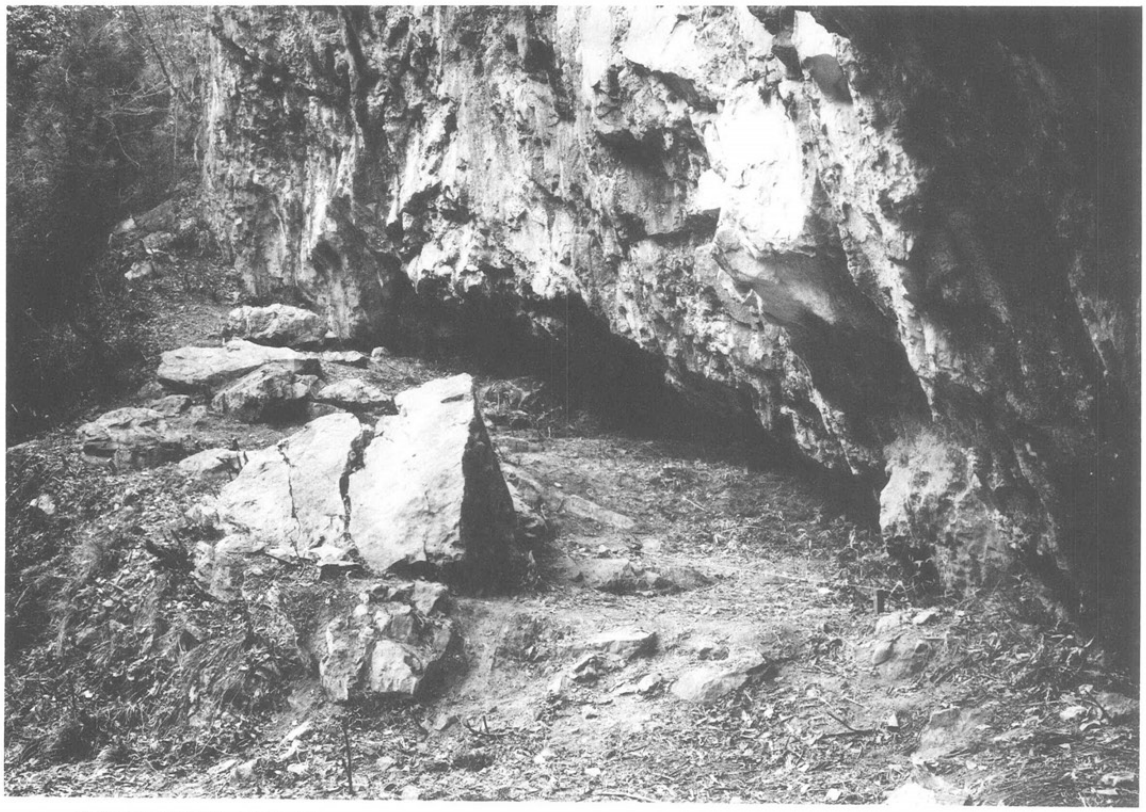
印　　刷　サンコー印刷㈱

図版一　遺　跡



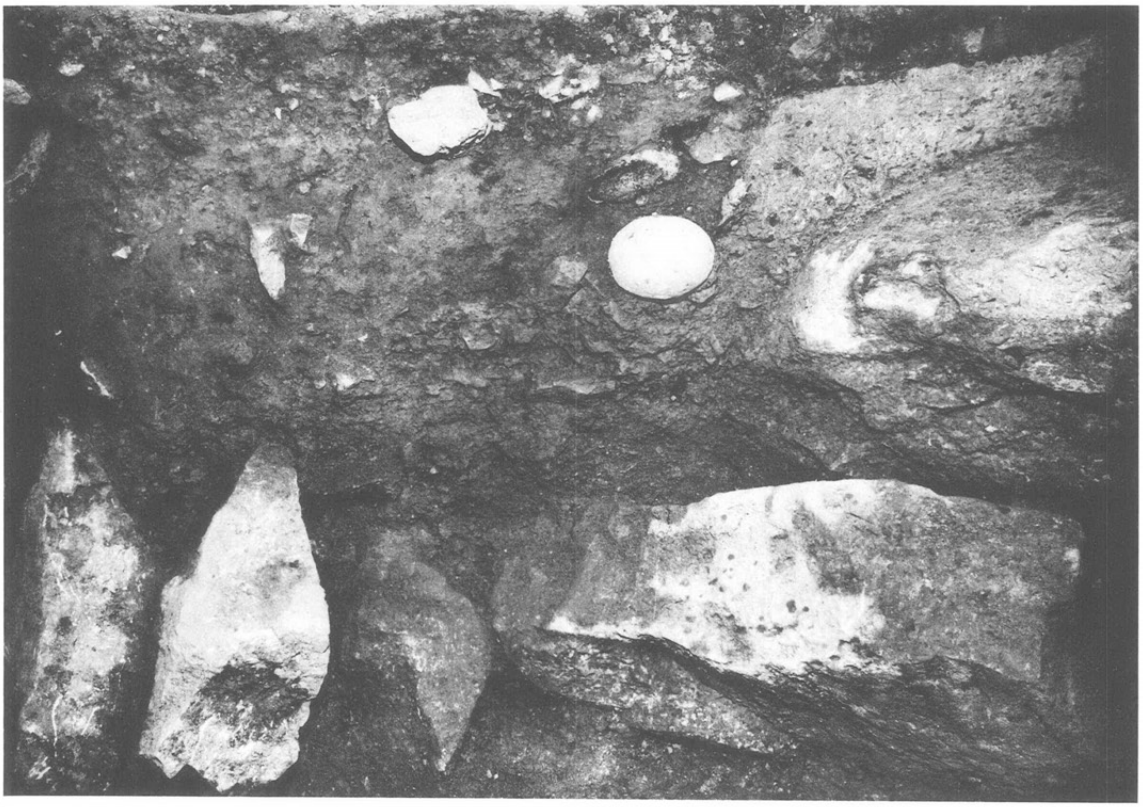
1　遺跡全景（西から）

2　岩陰下部（東から）

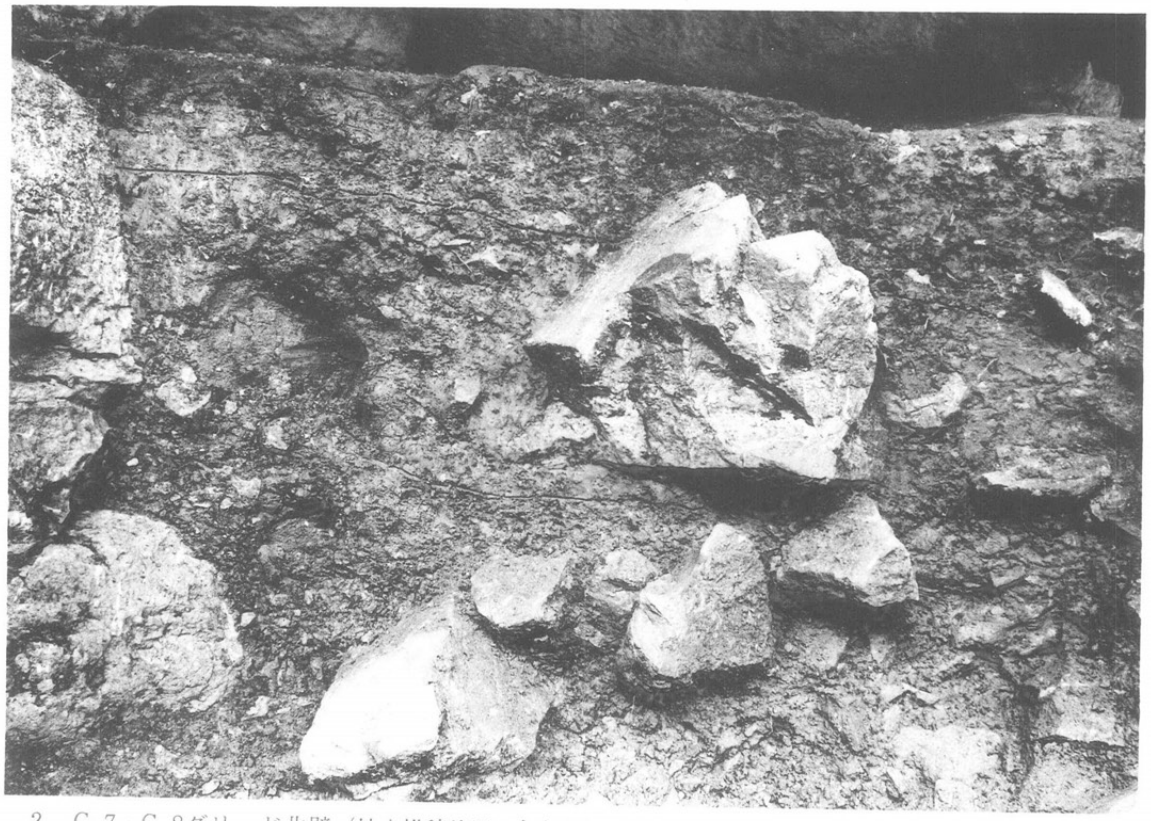


1　発掘前の状況（東から）

2　発掘前の状況（西から）

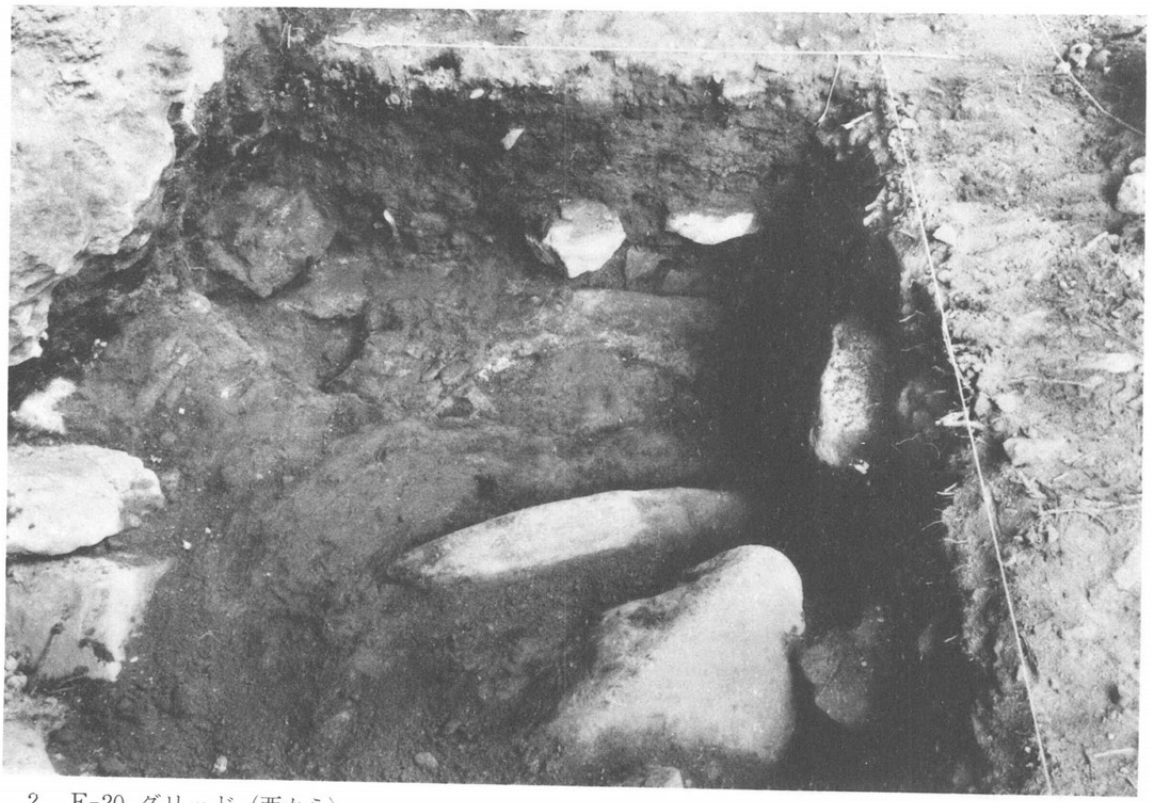


1　F-8・G-8グリット東壁（磨り石検出状況）

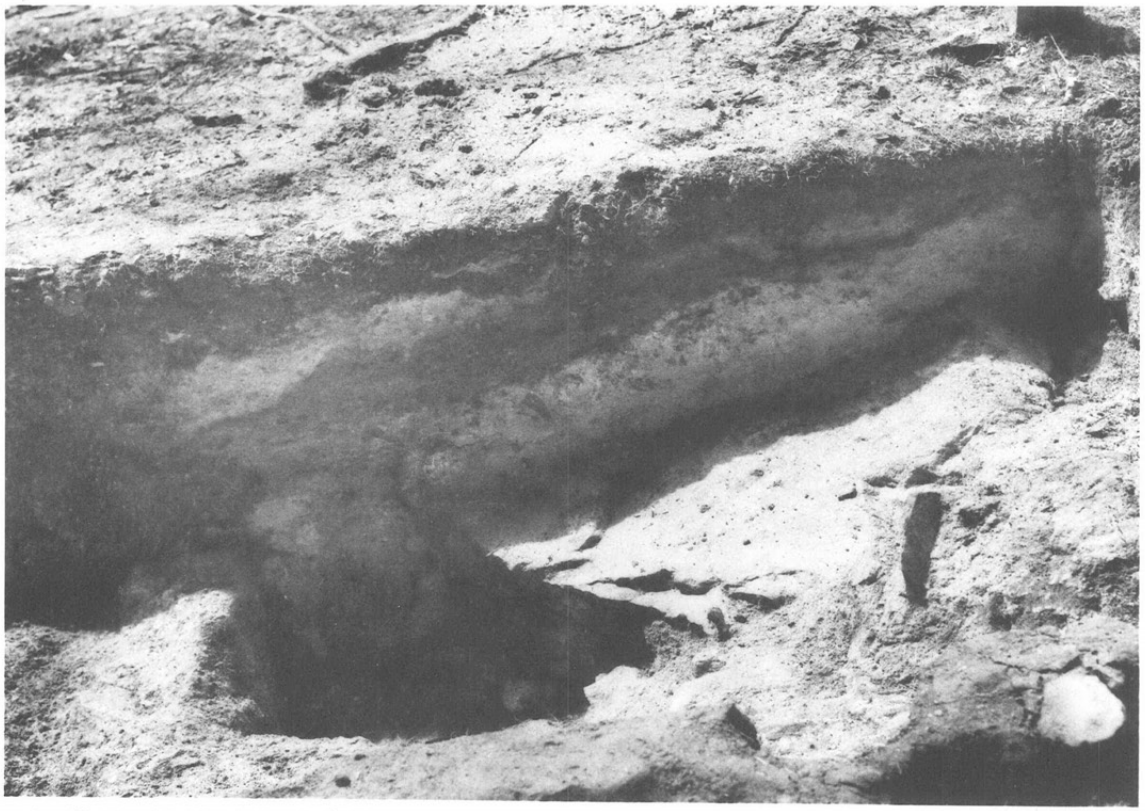


2　G-7・G-8グリッド北壁（地山堆積状況，中央上部にF.P.-4）

1　F.P.-18（近世配石炉）

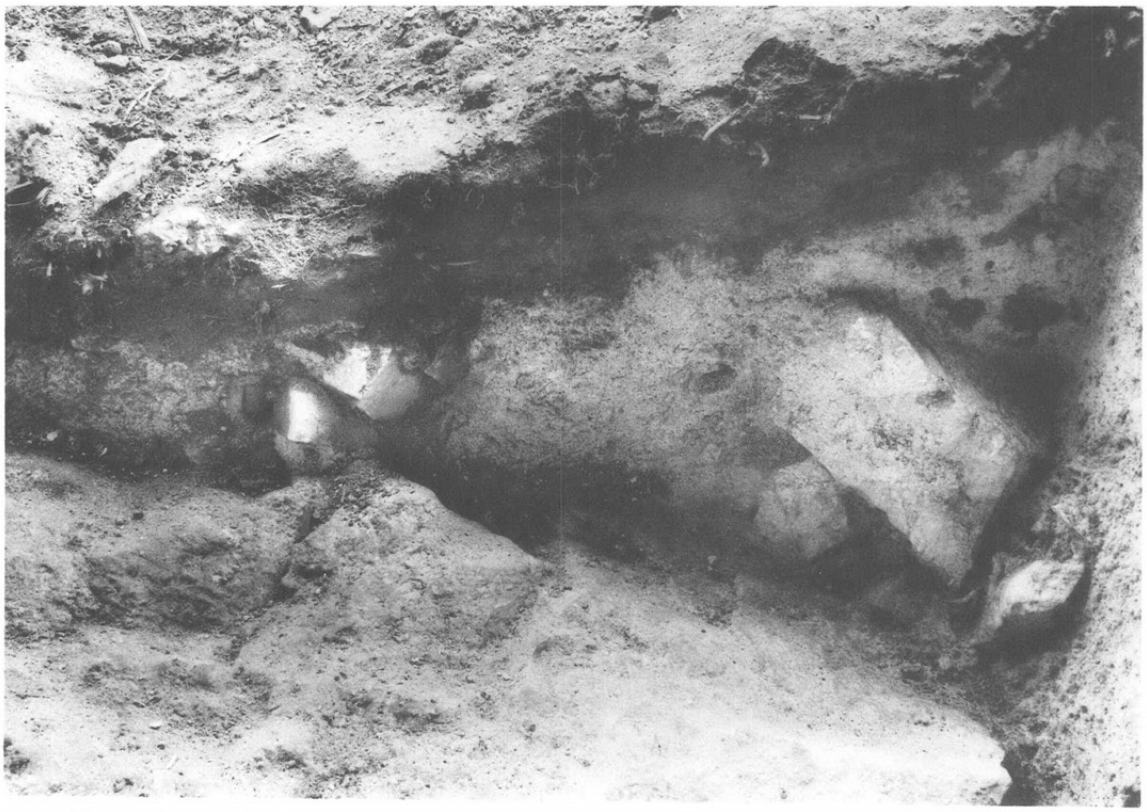


2　F-20 グリッド（西から）



1　F-11・F-12 グリッド南壁

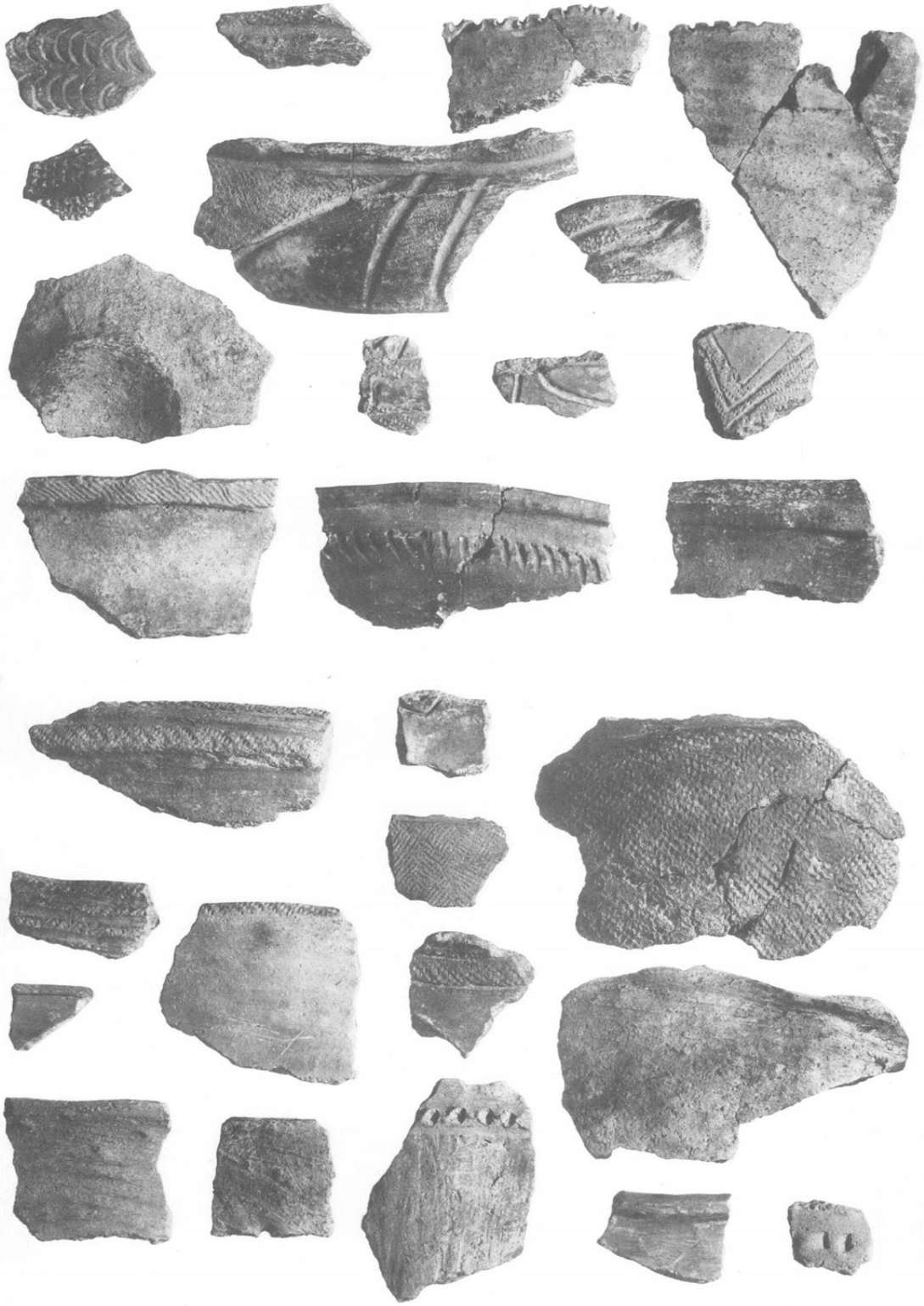
2　F-18 グリッド西壁



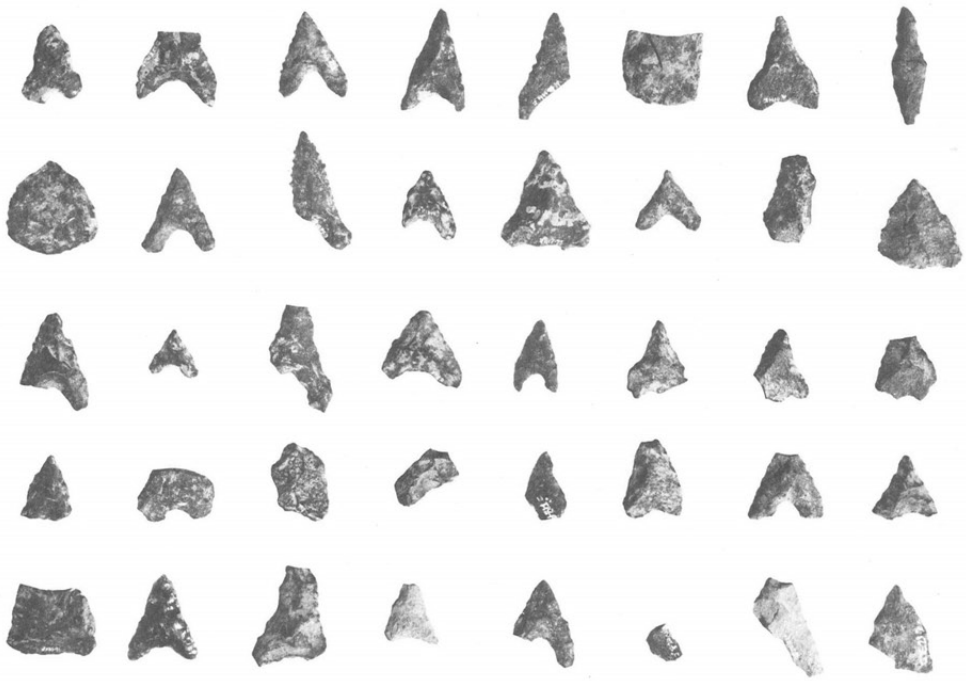
1　F-16 グリッド南壁

2　F-16 グリッド西壁（掘り下げ状況）

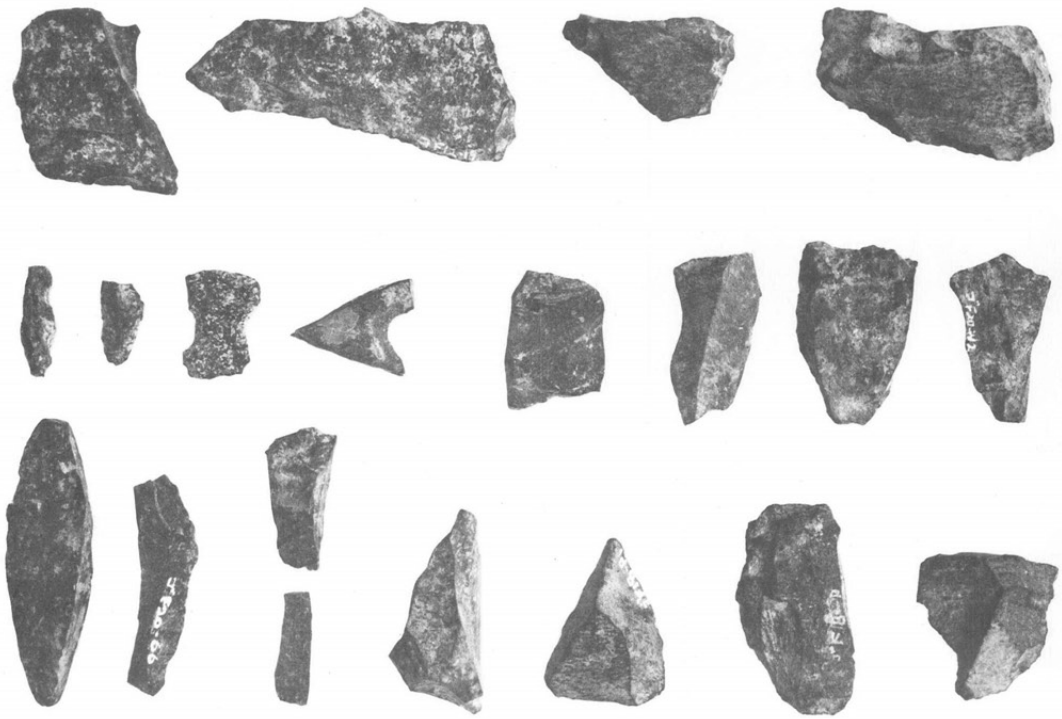
図版七　出土遺物



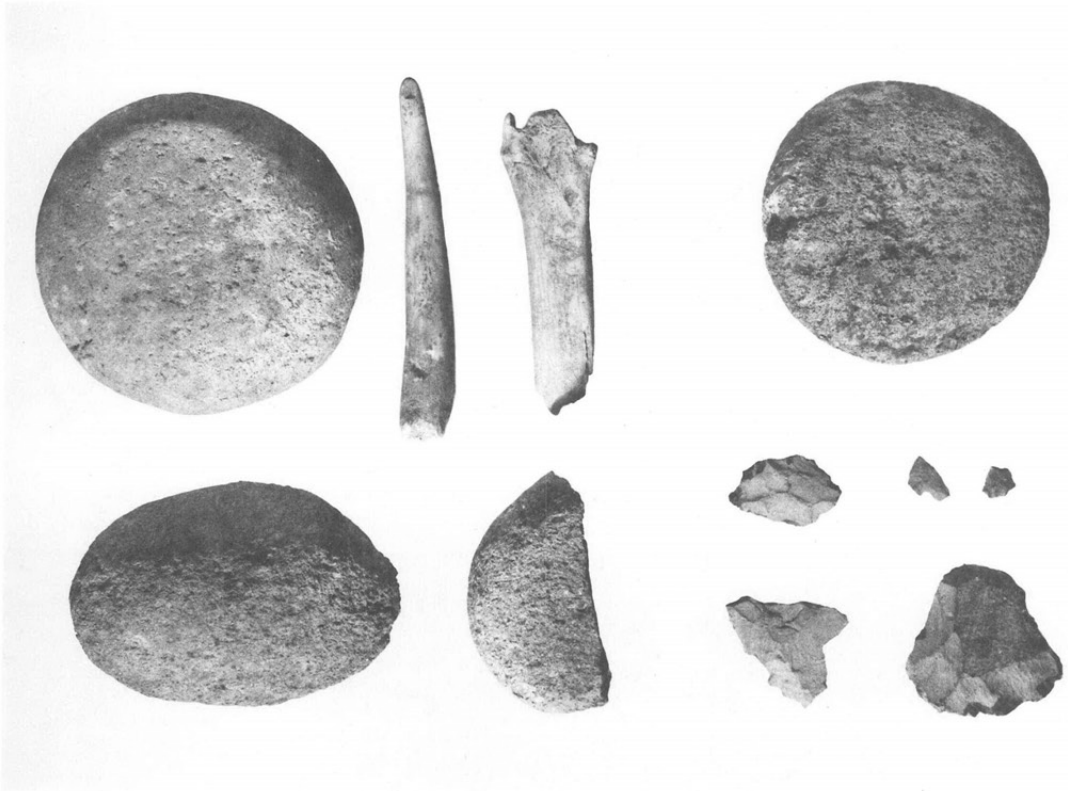
縄文土器



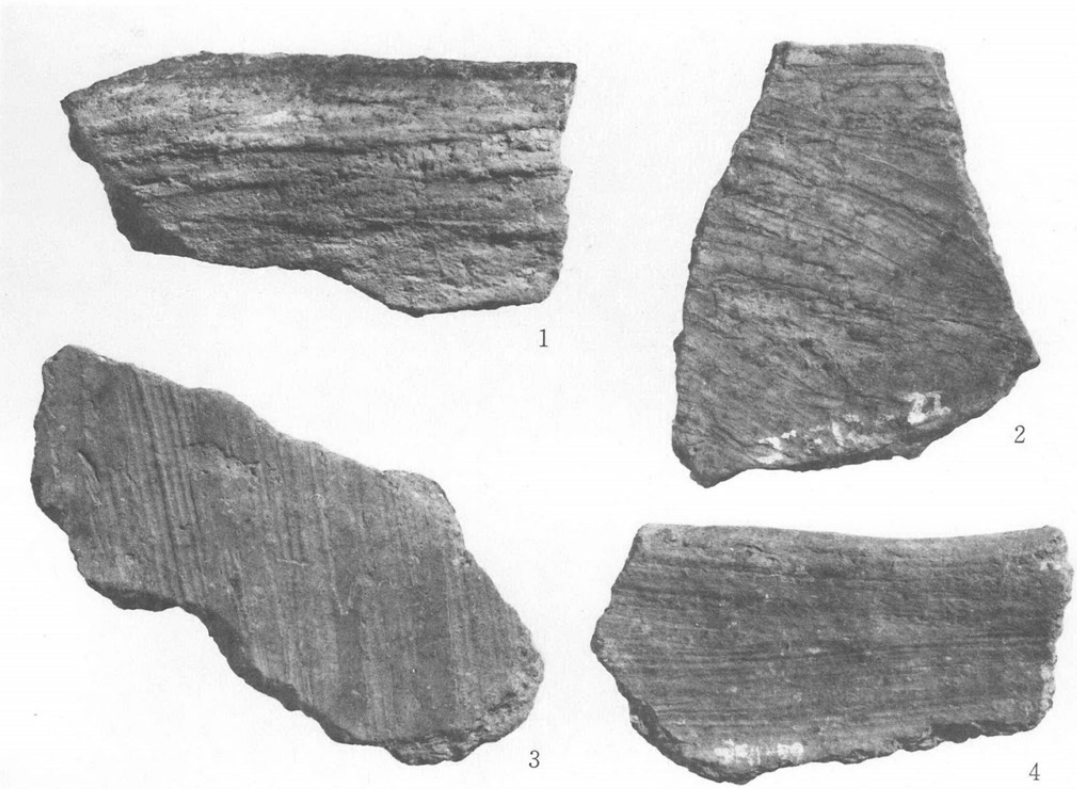
1　石　鏃



2　スクレイパー・楔形石器・石核他



1　磨り石・敲石・骨角器・獣骨　　2　周辺遺跡表採遺物




3　縄文土器条痕　1　A種条痕　2　B種条痕　3　$C_1$条痕　4　$C_2$条痕

# Gongendani Rock Shelter of Jomon Period

Excavation Report of the Department of Archaeology, Okayama University

Editors
Yoshiro Kondo and
Tadamasa Ugaki

1983
Published by
Educational Committee of Kawakami-chō,
Okayama Prefecture